K-GAME

薬

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｋ－ＧＡＭＥ

【Ｎコード】
Ｎ９０１１Ｒ

【作者名】
薬

【あらすじ】
ある日巻き込まれたのはゲームの世界！！
生き残るためには強くならねばならないこの世界で、果たして主人公は生きていけるのか。
能力あり、戦闘あり、恋愛……あるかなぁ？
主人公最強物ではないと思います。途中からなるかもしれませんが、最初は弱いところから始まります。

※あらすじは、よく変わります。どれもしっくりこない説明なので。

プロローグ

身を起こすと、目の前は一面に花が咲き誇っていた。一輪、一輪は大きくないが、小さく咲き誇る花たちは美しく、眠気を誘ってくる。その中で、さながら俺は名画の中の染みだろうと思う。コートは染め抜かれたように真っ黒、黒目黒髪と相俟って完全にこの光景をぶち壊している。春の陽気にも似た風を感じながら、うとうととしていると、

「カズヤ、そろそろ行くわよ！」

遠くから少女の声が聞こえてきた。カズヤ――少女に呼ばれたそれが俺の名前だった。ここが日本ならそこら辺に転がっているような、珍しくともなんとも無い名前だ。

俺の身長は百六十センチくらいで、黒目に黒髪を肩口まで伸ばしている。背中に一振りの日本刀を持っているが、腰に挿さない理由は刀が地面に擦れそうだからだ。

俺がぼんやりとして返事をしないでいると、声の主は近づいて来て目の前に屈み込んで顔を覗き込んできた。

「カズヤ、聞こえてる？」

少女の名前はリン。腰まで伸びている緑色の長い髪をポニーテールに束ね、瞳は涼しげな翡翠色をしている。腰には不釣合いな装飾の全くされていない、実用簡素な日本刀が一振りだけ差してあった。とても整った顔立ちなのだが、刀同様着ている服も飾り気のない動きやすそうな服で本音を言えば少々勿体無い。着飾れば――今でも充分に美少女の部類に入ることは間違いないが――、もっと美しい華になるであろう。

「聞こえてる、リン」

「だったら返事しなさい」

リンに軽く注意され、起きながらコートについた草を払い落とす。その仕草で、俺としてはあまり好きではないのだが草特有の匂いが

鼻をくすぐる。因みに、怒られて分かる通り俺よりも多分年上だ。見た目から十六〜九歳くらいだと思われる。実際に訊いたことはない。マナーの問題ではなく、ここでは歳など関係ないからだ。

「ふわぁ……さて、旅の続きに戻りますか」

「珍しいわね、和哉がこんなとこで昼寝がしたいだなんて」

「偶(たま)には、休憩(きゅうけい)も必要なのさ」

肩を大袈裟にすくめて見せる。

「普段から力抜いてると思うけど？」

くすっ、と笑いながらリンは言う。確かに、と言いながら俺達は雑談を交(まじ)えて笑いながら歩きだした。

しかし、俺は頭の中ではあの時のことを思い出していた。死ぬまで忘れないであろう、紛(まぎ)うこと無き俺――いや、多くの人が狂(くるる)わされたあの忌(い)まわしい出来事を。あの日も俺は、静かに生きているはずだった。地球で一つの部品のように、ただ何も考えることもなく……。

「ようこそゲームへ」

いきなり掛けられた声に、大勢の人々は当初動揺するだけであった。あいつは何を言ってるんだ、という視線で見上げる者もいれば、神を見るような目をする者もいる。

そこは緑色の草がどこまでも続いて、涼しい風が流れている草原だった。その空中で一人の少年が立っているという異常な現象を除けば普通の光景であろう。そんな場所に大勢なんて言葉では表現が出来ない程の、おびただしい数の人が集まっていた。いや、根拠はないが集められたと断言できる。

しかし、これだけ大量の人がいても、不思議なことにその少年の

言葉は浸透するようにどこまでも明瞭に聞こえた。
「私は鏡八。君達プレイヤーからしたら神にも等しき存在だ」
プレイヤー……？　周りからざわめきが起きる。俺も頭の上に疑問符を浮かべるが、それに対する回答は俺を含め誰も持ち合わせてない。
この少年以外の誰も。
「諸君の中には気付いているのも多いかもしれないが、ここは地球ではない。まぁ、夢幻の類と解釈するのも各個人の勝手だが、敢えて言おうここはゲームだと」
「ゲーム……？」
「……何を言ってるんだ？」
周りから更に疑問の色が強くなった気がする。当然だ。夢幻の可能性を否定し、現実ではなくゲームだと言い張ったのだから。
そして、ざわめきが最高に達したとき少年が再び口を開いた。
「諸君等にはゲームをクリアしてもらう。私が君達に求めるのはそれだけだ。それ故、君達が誰を殺し、欺き、生かすかは自由だ。そして、ＧＡＭＥ　ＯＶＥＲは全ての終わりだと言っておこう。いや、こう言った方が分かりやすいかな。ここはゲームの世界であるが死は現実同様死だと」
口の端を歪めて語る彼の内容はほとんどが理解出来なかった。いや、きっと理解したくなかったのだろう。だって、それは――
「……ゲームだって言うのに、死んだら終わりってことじゃないか？」
脳が理解を拒んでいるからお陰で、声は震えてもいなかった。もしそれが本当だとしたら、ここがゲームの世界だろうと関係ない。死ねば全ての終わり。ゲームはセーブデータをロードすればいい。しかし、ここはセーブなしの一度の死が全ての終わりに繋がる最悪のゲーム。
「何故このようなことをするのか？　これは夢ではないのか？　などと甘い幻想を未だに抱いている者もいるようだが、その問いは無

駄だ」
　言い切ったとばかりに少年は虚空に消えた。そして、痛いくらいの静寂が打って変わったように一つだけどこかで叫び声があがった。それに続くように色んな所から罵声や叫び声、泣き声が聞こえてきて――一瞬で聞こえなくなった。気が付けば、先程とは違う草原で倒れていた。おびただしい程の人もいない。俺は立ち上がり、取り敢えず歩き始めた。その道がどこに繋がっているかも知らずに。
　一方的な説明と共に、その日人類がプレイヤーとして強制参加させられたゲームが始まった。悪夢のようであり、本当に夢ならどれ程良かっただろうか……。

ナレーター1

ゲーム開始と共に個人的に観察したことを書いてみる。
まず一つ目、このゲーム――彼の言葉を借りるなら――だがジャンルとしては間違いなくＲＰＧ（ローグレヴィンダ）だろう。モンスターが出るわ、プレイヤーに殺されかけるわ。最悪だ。
二つ目、プレイヤーは肉体的な歳をとらない――プレイヤーは肉体的年齢を自由に定めることが出来る。つまり、成長したいまでして止まるらしい。未（いま）だにこの問題は、あらゆる所で検証段階である――。しかし、肉体的な歳をとらないのは当然のことではある、何故ならここはゲームなのだから。
三つ目、ゲームには地球外生物が沢山だ。先述した通り、モンスターは出るし、リンみたいなのはいるし。ここで誤解して欲しくないが別に性格がモンスターだとか、そういうオチじゃないからな。普通に緑色の髪に翡翠色の容姿を持つ人種が地球上にいなかっただけのことだ。
四つ目、能力（ちから）と称する正体不明の謎の力がある。雷やら炎を使うプレイヤーもいるし、果ては頭を抱（かか）えたくなるようなのもある。
五つ目、これが一番重要なことである。事実上ゲームは終わらない。根拠として挙げられるものとして――

「う～ん……何してるの、カズヤ？」
「何もしてないよ」
寝ぼけ眼のリンに言われて思考を中断して、書きかけのノートをコートの内側に押し込んだ。外界に意識を向ければ、木々が鬱葱（うっそう）と

生い茂っていて分かり辛いが、日が昇り始めたばかりだ。起きるにはまだ早い時分だ。
「そう……お休み」
「お休み」
すぅすぅ、と可愛らしい寝息を立てて眠るリンの寝顔を見て髪を手で梳く。さらさらとした髪が手中で揺れる。すると、整えられた様なリンの美しい顔が途端に嫌そうになった。
「おいおい、ちょっと傷付くぞ」
小声で苦笑する。それから隣に座り込んで、リンが起きるまで待とうかと思った。一度本格的に起きてしまえば、眠る気など全く起きなかった。それ故に、こんなくだらないことに時間を費やしているのだ。ノートを再度開いて、もう一度書こうとして止めた。
しかし、森の中で野宿だったのだが意外に涼しくて良かった。静寂の中を心地よい風が吹き抜けて、手を傍らに置き――
「誰だ……！！」
鞘から刀を抜き、低い声で語りかける。これだけ風が吹いているというのに、木が揺れているのに関わらず周りからは木々がざわめく音が全くしない。
ただの思い過ごしならばよいのだが、このゲームでは些細な見落としで命を落としてしまう。事実、それが原因で死んだものなどいくらでもいる。
「おいおい、死にたいのか？」
木々の隙間から呆れたような声と共に、尋常じゃない程の殺気が向けられる。一歩でも動けば殺されると断言出来るような錯覚すら覚える程だ――殺気については、この世界に来てから初めて感じれる様になった。それほどまでに地球が平和ボケしていたのか。或いは、この世界特有の雰囲気にでも呑まれたか。理由は定かではない――。
冷たい汗が背中を伝う嫌な感覚だけが妙にはっきりと感じられる。緊張と極度の集中状態だからだろう。

「そのまま、ゆっくり前向いて歩け。女の方は起こすなよ？」
どこか楽しそうに言う声は少年のものだ。音が遮られたことからして、何かしらの能力は持っていると仮定するべきだろう。傍らのリンを一度だけ横目で見て、立ち上がり木々の間を慎重に歩き出しある一点で止まった。
「どうした？　歩け」
声は促すが俺は動かない。否、これ以上は動けない。
「無理だ、お前は俺を殺す気か？」
「何を言っているのか、分からんな。……ククク」
沸点が低いのは自覚しているが、からかわれていると思うとむかついてくる。こめかみを引き攣らせながら刀を一閃する。すると、糸のようなものが切れた。
「ワイヤーだな、しかも首の高さに」
「流石は見込みがありそうだな！！」
少年はトラップを無効化されたというのにどこか嬉しそうだ。まるで、子供が新しい玩具を手に入れた様な声だ。声からして、同じくらいの歳のような気がするのだが……。ますます、意図が掴めない。
「貴様は誰だ！？」
「ナレーターだよ」
その一声と共に殺気と視線が消えた。辺りは次第に音を取り戻し、風は緩やかに俺の首筋を撫でて行った。何故だか、その一撫では刃が掠めたかのように俺を震わせた。

ナレーター2

石畳の広がっている綺麗な町並みを、欠伸を噛(か)み締(し)めながら歩く。レンガで建てられた家が立ち並び、店が色んな所に出ていて目移りするが視点が合わない。理由としては連日の睡眠不足が祟(たた)っているせいだ。

「危ないから近くの街に行きましょう」

リンの一言は、謎の人物からの接触を考えれば街に入るのは悪くないように思えた。街中でまで暴れるような大物ではないと判断したからだろう。このゲーム、モンスターを倒す人がいるが中には人を殺すのがいたりするのだ――大規模なものだと、市場で剣振り回して十三人を殺したものなんかもあった。そして、プレイヤーは人数に関わらず人を殺してる可能性は高い。山賊などが出るのだから、殺していないプレイヤーの方が少ないのだ――。

しかし、万が一森から街まで尾行していたら、被害が増える可能性も存在したが所詮他人の命だ。それらを全て考慮してのリンの言葉だった。

「ふあぁ……眠い」

宿で寝ていても良かったのだが、町を見ておきたい気分になったのだ。レトロな風情(ふぜい)を感じるこの町並みは、見ていても飽きない。因みに、リンは宿屋でぐっすり寝ている。

しかし、こうして見れば色んな人がいる。黒髪の人がいれば、青い瞳など多種多様な容姿を持つ人々がいてアニメかゲームのように幻想的で感動だ。……大剣やら斧やら物騒なものを所持していなければな。

「コーヒー、一つくれ」

近場の酒場のような所に入って注文をした後、窓辺の席に座る。ガラスが無く些細(ささい)な埃が入ってくるが気にしない。少々待つと、かなり苦そうなコーヒーが運ばれてきた。試しに口に含んでみると――

「うぇ……苦っ！？」
「そんなに苦いかい？」
突然声を掛けられ、びっくりというか身構えてしまったのは仕方がなかろう。今日一日生き残るかも賭けに等しいこのゲームでは、警戒心は本能のお陰か発達している。
声を掛けてきたのは黒いフードを目深に被った少年だった。薄手の手袋なども付けている為、僅かに口元と黒髪が覗くばかりだ。暑い最中その格好はいかがなものかと思う。……はっきり言って怪しい。
「結構苦い。というか濃ゆいぞ、これ」
「へぇ、そうなんだ。すみません、僕にもアイスコーヒー下さい」
注文したかと思うと、少年は勝手に向かいの席に座った。その拍子に腰に付けられていたナイフが揺れたのが印象に残った。高級そうなものではないが、鞘に収められているナイフからは何処と無く嫌な感じがした。
僅かに足の位置を変え、何があっても動けるようにしておく。
「ねぇ、君はこのゲームをどう思ってるんだい？」
唐突な質問に、何と答えを返すか迷った。
しかし、訊かれた内容が問題だった。ゲームについて思考するのは禁忌に等しい。誰もがこんな世界を望んでいないのだから当然だ。楽しかった地球に戻りたいと言う者もいるし、死にたくないと言う人もいる。愛した人も、憎んだ人も、強者に弱者、富める者も貧しき者にも、皆等しく死が色濃くあるこの世界を誰が好むというのか。
「皆、嫌だと……地球に戻りたいと言っている。誰もが、きっとこんな残酷な世界を望んではいないだろう？」
「ははは、物は言い様だね。僕は君に訊いたんだよ？　まぁいいけどね」
少年はアイスコーヒーを一気に飲み干した。その直後口元がぴくっ、と痙攣したのは見逃さなかった。当たり前だ、こんな濃ゆいというか苦いコーヒーを一気飲みしたらそうなるだろ。

「げほっ……何だ、このクソ不味いのは！？」
「理解は出来るが落ち着けって。すいません、ミルク一つ」
あまりの驚きようで口調が最早(もはや)別人だ。周りの目が集中して、中にはガラの悪そうな男がこっちを睨んでいたり心臓に悪い。心なしかミルクを運んできた定員の目も怖い。
「取り敢えず、これでも飲んで落ち着け」
「あぁ、すまないね」
奪い取るくらいの速さでミルクを掴むと、味が分かるかも怪しい速度で喉に通していた。それからコーヒーを飲んだことを心底後悔したらしく、一つ小さく息を吐いた。
「ところで、君は旅行か何かでここにいるのかい？」
「いや、ゲームクリアを狙ってるんだ」
ゲームクリアの条件は意外に単純だ。ゲームのクエストの様なもので、ドラゴンの討伐だったら殺すみたいなものだ。まぁ、生憎(あいにく)とそんな条件だったことはないがな……。
「なら、僕も連れて行ってくれないかい？」
「いいけど、死ぬかもしれないぜ」
俺としては、何があるかも分からないから訊いたのだが。
「くく、なかなか君は冗談が面白いね」
厚顔不遜(こうがんふそん)に笑う少年の口元は楽しそうに歪んでいた。

ナレーター3（前書き）

最近、友人が小説書き始めたんっすよね～。
面白いの書いてくれるといいんですが……。

ナレーター3

「かくかくしかじか、以下略で。という訳で、ゲーム攻略に一人付いてくることになりました」
「そう、よろしくね。ところで、あなた名前は？」
俺と少年はリンに一度説明する為、宿に戻ってきていた。宿はこの街の規模にしては簡素ものだが、休息を取るには十分だったらしくリンの顔色も優れていた。
「あっ……聞くの忘れてた」
「えっと……僕はKと呼んでください」
一瞬言い淀(よど)んで答えたのは、Kという奇妙な名前だった。このゲームの性質(さぎ)上詐欺などが多いため、こういう風に偽名を使う人も少なくない。あとはお尋ね者だったり、後ろめたいことのある人間くらいのものだ。声から察するに、歳もあまり離れていない１６歳くらいだと思う。そんな歳で後ろめたいことを抱えるか甚(はなは)だ疑問だ。それらを鑑(かんが)みても、やはり詐欺防止だろうか？
「そう、Kね。私はリン、こっちはカズヤね。どうせ、名前教えてないんでしょ」
一瞬不可解な表情になったものの、リンもその意見に辿り着いた様で納得したようだ。しかも、俺が名乗っていないのも勘付いていたらしい。流石よく気の利くリンだ、苦笑いを浮かべるしかなかった。
「ふあぁ……でも、一休みさせてくれ。眠たくて仕方が無い」
先程から今にも意識が飛びそうだ。頭が回らないし、欠伸も止まらない。
「寝ときなよ、僕はリンさんと今後の打ち合わせをしとくから」
「そうね。おやすみ、カズヤ」
「あぁ」
そのまま布団に倒れ込み、泥のように眠った。

次に目が覚めたのは、まだ夜が白んできた頃だった。変な時間に寝た為、変な時間に起きたのは理解出来る。人によっては体内管理をしておけば、眠くなる時間も起きる時間も割と一定するらしいのだが生憎と寝たければ寝る、起きたければ起きるのが俺だ。しかし、今この時ばかりは若干寝るのに躊躇(ためら)いが生まれた。

「もう一度寝るか……なんて言えねぇよな？」

「別にいいわよ、寝てても」

面白そうに微笑むリンが、窓際の椅子に腰掛けていたのだ。謎の男の接触に加えてKの警戒だろうか？　Kも一見優しそうな男に見えるが、このゲームで見た目だけの性格には何の意味も無い。本名を名乗らない以上、危険人物である可能性も無い訳ではない。それに、あの接触を謀(はか)ってきた奴が街まですんなり通したのも安心できない。街の人が言うには、あの森は通る人も少ないそうで盗賊の類ではないはずだ。俺たちを狙っての待ち伏せとか言われた方が納得出来る。

「まぁ、いいや。リンは寝ないのか？」

「私は大丈夫よ。カズヤこそ寝たら？」

「この状況じゃ寝れねぇよ」

流石に寝顔を見られながら寝たいとは思わん。見られながらじゃ寝れないとか、そこまで神経は細くないが――どちらかと言えば太いか？――あまり気持ちのいいものではない。見るのは好きでも、見られるのは嫌いなのだ。

「なぁ、なんでKを連れて行くの賛成したんだ？」

少し気になっていたのだ。根というか、見た目からというかリンは優しいのだが、リスクを鑑(かんが)みれば得体の知れない今日昨日知り合ったばかりのKなど連れて行かないだろう。そこら辺の意図もあっ

て軽く尋ねたつもりだったのだが、リンは言い辛そうな困ったような顔をした。何か言おうとするのだが、どう言っていいか迷ってる感じだ。
「やっぱいいや。リンの一目惚れということにしとこう」
「はいはい。違うから」
雰囲気に耐えられなくなった俺は取り敢えず話題を切り上げつつ、空気をある程度和ませようとした。和んだかは兎も角、話題の切り上げには成功したようだ。
「ねぇ、カズヤ。あなたはこのゲームに満足してる？」
リンは躊躇(ためら)いがちに尋ねてきた。まるで、そこに重大な分岐点があるようだ。何故そんな質問をしてきたのか分からないが――
「さぁな」
と、曖昧に返答した。

ナレーター４（前書き）

友人がこの小説の絵書いてくれたんですが、書きかけだったんですよねぇ……。
いつか絵載せてみようと思います。

ナレーター4

朝目が覚めても、もやもやした感じが残っていた。昨日のリンの問いが、未(いま)だに俺の脳裏に焼きついて離れなかったからだ。明らかに昨日のリンの質問は普通ではなかった。俺が寝ている間にKと何かあったのだろうか？

頭を悩ませながら朝食を食べる為に宿の食堂に向かった。朝食は値段に見合った、簡素なパンとスープだけのものだった。

「朝はパン派だからいいんだがな……」

地球にいた頃は、朝はパンのみだったからな。スープが付いてるだけでも、豪勢に感じるくらいだ。更にコーヒーが付いてる所もいい！

だが、今朝は嬉しさなど微塵も無くリンの態度が気になった。一日に二回も同じ様なことを訊かれるとは――正確には次の日になっていたが――禁忌(タブー)な話題という意識はないのだろうか、などという発想すら出てこない。それに、Kを連れて行くことへの反対の無さだ。こればかりは全く分からない。

「まぁ、別にどうでもいいけどさ」

言ってる事と裏腹に、一度気になるとずっと引きずる性格なのだ。自認してる所が余計に質(たち)が悪い。

その後も、一人ぶつぶつと呟き続け食堂で注目を浴びていたというのは、俺の精神状況を考慮して黙っていて欲しいところである。

「おはよう、よく眠れたみたいだね」

「あぁ、Kも元気そうで」

宿の前で落ち合ったKは、やはり暑そうなコートを目深(まぶか)にかぶっていた。しかし、ここから見える口元にはうっすらと汗をかいている。当人も暑いのだろうに、何故ファッションにそこまでこだわるのだろうか？

「あら、カズヤもKも遅かったわね」

話をしていると、通りからリンが歩いてきた。何故宿からではなく通りから？　と、思ったが多分市場にでも行っていたのだろう。一つ言っておくが、俺達が起きるのが遅いんじゃなくリンが単に早いだけだ。

「で、次はどこ行くのさ。東西南北、さぁどこだ？」

「それなんだけど、ここから東に行くと大きな街があるんだ。そこに行くことになったよ」

「東……確か、そこには地図じゃ荒野しかなかったはず。あとは山とか谷とかで、街なんて一つもなかったはずだが……」

普段は地図など見ずに気の向くままに旅する傾向があるのだが、以前見た地図ではそんな場所には何も無かった気がするのだ。存在してないはずの街……そんな情報をKはどこから仕入れてきたんだ？　訝(いぶか)しげな視線に気付いたのか、気付かなかったのかは分からない。フードが邪魔で表情を読み取ることが難しいからだ。ただ、口元が堪えられないかのように笑みの形に歪んでいる気がした。

「じゃあ、行きましょうか」

「楽しみだよ」

「……眠い」

三者三様な言葉を口にしながら歩き始めた。

ナレーター5（前書き）

ＧＷ入りましたね……正直家のあちこちが五月蝿いです。
皆家に大集合ですから。

ナレーター5

街を出たのはいいが、そこからは最悪な旅路を予想させた。荒野や山に至るどころか、街の出たすぐの草原ですら狼が出てきて面倒だった。

しかし、Kは見れば見るほど異様だった。その出で立ちも奇妙だが戦闘の冴えが恐ろしい。まるで、ナイフを自分の体の一部のように操るのだ。

「一丁上がりっと」

今だって向かってきた狼を避けるでもなく、右手に持ったナイフを一閃しただけで倒した。まるで腕の延長線かのように、指揮者がタクトを振るうようにごく自然に振るうのだ。芸術のように甘美でありながら、研ぎ澄まされた刃のような恐怖を与えてくる。

「どうかしたのかい、カズヤ？」

「何でもない。ただ……」

「ただ？」

言い返す言葉も見つからず無言でいると、苦笑いの雰囲気がKから発せられた気がする。生憎とフードのせいで表情が如何せん分からない。敵がいなくなるとKは戦闘中とは違い、緩慢な動作でナイフに付いた血糊を払いながら腰の鞘に収めた。

「ふぅ……でも、この速度じゃ夜までに目的地に着くのは無理そうね」

「そうだね、夜は森で野宿かな？」

地図を開いて見れば、小一時間程した所の小さな山を越えて森に入るらしい。太陽が真昼の空に大きく出ている今から考えれば、問題なく進んだとしたら日没の頃には森辺りにいることになる。大抵、日が沈んだ後の移動は行わない。明かりが無いし、道も分からなくなってくるからだ。戦闘なんて以ての外、論外だ。

「いやしかし、連れて行って貰えて良かったよ。流石にこの距離の

戦闘を一人でこなすのは骨が折れるからね」
「確かに、面倒だな」
言ってる間にも狼が沸いてきている。正確に言えばこの狼も似てるから便宜上狼と称してるが、地球ではないこの世界では狼と呼ばれないのかもしれない。しかし、不思議なことに地球に存在していた狼もそんなに変わらないように思える。更に言えば、多様な生物が存在するこのゲームだが地球上に存在していた生物と同じものが多い。何も生物に限った話ではないがな。気温、気圧、何もかもが地球に似ている。ちょっと変わってるが、地球の環境に近い。
「まったく、面倒ね」
「カズヤ、大丈夫かい？　何か考え事しているみたいだけど」
「……大丈夫だ」
キンと、金属質な刃物の響きが鳴り渡る。リンは型に則(のっと)っているが、俺とKはまったくの無型だ。Kは知らんが、俺の場合刀を使うことなどない学生の身分だったのだからだ。
『グルルルゥ……』
「……せいっ！！」
一番先に動いたのはリンだった。狼の動きを凌駕(りょうが)する程の素早さで近付き切り下ろした。一瞬で死んだのだろう。狼は刀が刺さったまま動かなくなった。それを無表情に引き抜くリン。
「ガウゥ！！」
それを見て狼が二匹動いた。狙いはK。Kは機械的というか非生物的な動きで一匹目を冷たく切り捨て――二匹目は急に進路を変更、俺に走ってくる。しかし、それにKが懐から出したナイフを投げる。
『ギャン……！！』
首元に当たり悲鳴を上げたが、最後の力を振り絞ってKに襲い掛かる。俺に向かって走っていたため、都合Kの後ろを取った形での体当たりだった。更に、噛み付こうとした所を避けるのではなく、逆に口の中にナイフを押し込む形で脳を貫通させた。俺だったら、絶対に避けていただろうな。

Kが手の甲を口元に持っていくのを横目で見ながら、俺は前方の狼に真っ直ぐ走って行った。それを狼は横に避け左側から襲い掛かってきた。右手の刀を振るには遅い。なら――

「ッ！！」

噛み付こうとしてきた狼の首を左手で掴(つか)み刀で首を落とす。技も無い、キレもない。なりふり構わず戦う俺らしい戦い方だった。

「さぁ、先に進みましょう」

リンの声を聞きながら俺たちは急いで歩いた。横ではKが傷の手当をしているのが見えた。

ナレーター6（前書き）

いや、ほんと久しぶりに投稿します。
読者の皆様には申し訳ない（あっ、読者がいないか）。
もうそろそろ、三日に一度くらいは更新したいんですけどねぇ。

ナレーター6

「……ようやく着いたか」
「そうだね、流石に山越え谷越えはキツイね」
横でKが苦笑しながら言う。一週間程掛け、谷と山を越えて時に迂回して進んだ。そうして、ようやく街に辿り着くことができた。
しかし、これが街とは言えるのかは甚だ疑問だ。何故なら、活気のあるべき市場に人が少なく、店も軒並み閉ざしてある。最早これは――
「戒厳令下ですか？　て言いたい感じだぜ」
「いやいや、普通に考えて人気無いだけだから疫病とかじゃないの？」
そりゃそうだ。戒厳令というのは戦争状態だし、普通。山や谷に囲まれたこの地形では、空でも飛べぬ限りどこにも戦いなど仕掛けるなど到底不可能だ。リンに宿を探してもらい俺とKで街を軽く探るつもりだったのだが、これでは聞き込みすら出来まい。
「ゲームクリアの為にここに来たけれど。今回は一体何が条件なのか」
フードの中から軽い溜め息と独り言が零れる。半ば誰かに聞かせるような感じな言い方ではあるが、暇潰しにでも訊いておくか。
「Kはどこまで知ってるんだ？　このゲームのこと」
「中々に本質的なことを聞いたね。別に僕が知ってることくらいなら、教えてあげるよ」
口ぶりからして、知ってることが少々あるらしい。そして、どこか楽しげな雰囲気だ。しかしこの街の事といい、どこから情報を仕入れているのか不思議なやつだ。
「これまでゲームクリアは、幾度かされてきたのは知ってるよね？」
そう、このゲームは過去に幾度と無くクリアされている。俺が把握しているだけでも両手の指に余るほどだ。しかも、この世界に連

れて来られてから二ヶ月も経つか、経たぬかの内にだ。意外と人間の順応力も馬鹿に出来ないのかもしれない。
「噂じゃ、クリアした奴は元の世界に戻れるってのがあったな」
「あれは嘘だよ」
期待はしていない。流石に、そんな噂話が本当だとしたらこの程度の回数しかクリアされないはずがない。人間パニックになると最初の内は物凄い勢いで行動するからな。無言で先を促す。
「このゲームは一種の平行世界（パラレルワールド）になっていて、ゲームがクリアされるとプレイヤーは他の世界に飛ばされる。例えるなら、ボスを倒したら次のダンジョンに行けるようになった感じかな？　あとはクリアすると特典と称して、鏡八（きょうや）から能力や武器が貰えることがあるとか。因みに僕は貰ったことはないけどね」
壮大なスケールを、そんな言葉で例えるのは無理がある様な気もする。クリア特典って……そんなの聞いたことも無い。というより、鏡八は一体何がしたいんだ？
「要するに鏡八にとっては、俺たちの命を賭けたゲームすらも娯楽でしかないということか」
「話はこれくらいにしようか。リンさんも帰ってきたみたいだしね」
遠くにリンが曲がり角から出てきたのが見える。
「困ったわ、開いてる宿が一つもなかったわ」
「空いてるではなく、開いてるか」
言葉の微妙なニュアンスをつぶさに感じ取ったが、現実問題としては休める宿が無くては疲れも十分に取れない。皆程度の差こそあれ疲れているはずだ。因みに疲労している順に俺＞リン＞Kの順だ。詰まる所、俺が一番疲れている。
「だけど、この静けさは異常じゃないのかな。疫病でも流行ってるのかい？」
「それだけど違ったわ。どうやら、ただの通り魔のようよ」
「ただの、通り魔……ねぇ」
日本にいたときは通り魔が出た時はかなり警戒するものだ。まぁ、

流石にここまでの状態には陥らないと思うが。リンのただのという言い回しが普通におかしいはずなんだがな、この世界じゃ俺の方が異端らしい。
「仕方ねぇ、通りで寝ても俺は構わんし」
「僕は流石に遠慮したいけどなぁ……」
Kは苦笑というか溜め息というか、心底うんざりしている様だ。流石に、この硬い石畳の上で寝ても疲労は回復しない。路上で寝るというのは流石に冗談だ。しかし、このままではその可能性もなくはないのだ。
「仕方ない、僕がもう一度聞いてくるよ」
Kが通りの方へ向かって歩いて行く。リンはその後姿(うしろすがた)を見てやるせない表情で見た後、こちらを向いた。その時には、いつもの表情に戻っていた。
「宿はなんとかなりそうね」
何故たった今リンが断られたばかりだというのに、Kなら大丈夫だと言うのだろうか？　リンはまたどうしようもなく、やるせない感じの表情を少し浮かべた。
「リンはKのこと知ってるのか？」
俺とリンが出会ったのは今はどことも分からぬ世界の草原だった。倒れていたところを介抱(かいほう)してもらったという情けない話だが、それが俺たちの出会いだった。つまり、それまでのリンの過去を多くは知らないのだ。
「知ってると言えば知ってるわ。でも、私よりはあなたの方が知っていたはずよ」
「知って……いた？」
それ以上リンは語らなかった――いや、語れなかった。どうやら、Kが戻ってきたようだ。
「いやぁ、良かった。当分泊めてくれる宿が一軒だけあったよ」
今の言葉の意味、Kなら大丈夫という信頼一（？）分からない。あいつは一体何者なのか……俺には、分からない。

鏡八（前書き）

一週間ぶりくらいに書けた！！
俺にとっては奇跡じゃね？
しかし、友達が絵を書いてくれるのが嬉しいですね。
＞ｉ２６８１３―３４８７＜
＞ｉ２６８１４―３４８７＜

鏡八

暗くどこか底冷えのする夜の町を、借りている宿の窓から何をするでもなく呆然と眺めていた。あれから三日程掛けて、街の人に聞き込みをして情報収集に励んだ。

しかし、努力虚しく聞けたのは通り魔の話だけ。この街もやはりハズレなのだろうか？　どうもこのゲームをやっているとゲームクリアとは無関係な場所がたくさんあるのだ。既存のゲームなら範囲など自ずと絞られてくるのだが、何せこのゲームの範囲は世界一つ分だからな。当然ハズレも出てくるのだ。

「しかし、今日で十五日か」

その数字は前回の世界でゲームがクリアされ、俺たちがこの世界に飛ばされてからの日数だ。この数字は日が沈む毎に数えているだけだ。一日の時間が二十四時間かも定かではないのだから、数えることにあまり意味は無い。ただ、なんとなく数えるのが何時の間にか日課になっていただけだ。

つらつらと取り留めの無い思考を続け、そろそろ寝ようかと思った矢先に控えめにドアがノックされた。Kリンかは知らないが、こんな夜更けに一体何用だ？

「カズヤ、入ってもいいかしら？」

「構わんよ」

かちゃり、と小さく音がしてリンが入ってきた。宿屋だというのにしっかりと帯刀していて、夜が醸し出す色気的なものが皆無だった。普通宿でまで帯刀するものなのか？　俺なんか安そうなベッドの近くに無造作に放り投げてあるというのに――このゲームでは宿にいようが殺される可能性もあるんだし、俺が無用心なだけなのかもしれないが――。

「どうしたんだ、もう寝たかと思ったけど？」

「そうね、寝ようかとも思ったんだけどね。これからどうするのか

聞いておこうと思って」
　これからと言うと、次の行き先ということだろうか？
「あんまそこら辺考えてないんだよね。気の向くままでいいんじゃない？」
「言うと思ったわ」
　リンは微(かす)かに笑みを浮かべて、ベッドに腰掛け手元にあった瓶を取った。中では綺麗な赤色の液体が揺れている。ジュースではなく酒の類(たぐい)だ。リンが飲むと思って買っておいたのだ。
「どうして、こんなものがあるのかしらね？」
　悪戯(いたずら)な笑みを浮かべてわざと尋ねてくる。勿論、俺が酒をあまり飲まないのを知ってのことであるから非常に質(タチ)が悪い。
「リンにあげようと思ってたんだよ」
「ありがと。でも、偶(たま)にはカズヤも飲んだら？」
　俺がアルコールを取らないのは苦手という訳ではないのだ。いや、たしかにリンには負けるが弱いほうでもない……はずだ――リンはいくら飲もうが顔に赤みは差しても、全くと言っていいほど酔わないのだ――。流石にリンの強さと比べると基準が分からなくなってくる。
　なら、何故飲まないのかというと単純な問題だ。まだ俺が十六歳だからだ。ゲームの中だしいいだろ、と思うかもしれないがどうしても日本にいた頃の習慣が残っているのだ。
「じゃあ、少しだけ貰おうかな」
　しかし、今日ばかりはこの街に来たのに肩透かしをくらって、まぁいいかと思ってしまったのだ。
「どうぞ」
　瓶と共に置いてあった二つのグラスに注いで片方を渡してくる。グラスを揺らしてコップの中の赤い液体を揺らして楽しむ。それから、ゆっくりと一口嚥(えんか)下するが美味しいのかよく分からない。
「リン、これって美味しいと思うの？　どうも、俺にはそう思えんよ」

「そう？　意外に美味しいわよ」
それからも静かな雑談を交え、ある程度の今後の方針を決めた。
「取り敢えずは、近日中にここを発つくらいか」
「そうね、あまりここに留まる利点が無いわね。明日辺りにでもKも含めて相談すればいいでしょう」
「Kか……一体何者なのか、時々考えてしまうよ。俺が言うのもなんだが、あいつは普通のプレイヤーとはどこか違う気がする」
リンはそれを聞いても何も言わなかった。Kの素性に気を使っていないのか、或いは何も言わないだけなのか。どちらにせよ、実のある話では――
「キャーー！！」
『！？』
思考を中断するには充分な程の悲鳴が表から上がった。急いで窓から確認するが見える範囲には誰もいない。振り返るがリンはもういない。刀を取り上げ宿を出る。
男の声だったと思う。
「リンどこだ！？」
「こっちよ！」
声が聞こえる方向に向かうが、裏通りに死体はなかった。代わりにいたのは、リンとあと一人ナイフを下げた男が一人いる。ジーンズにシャツ姿という動きやすそうな服装で――反面、旅装とは言い難くプレイヤーとは思えない――墨のように黒い髪はろくな手入れをしていない。縁の無い眼鏡をかけている。
「馬鹿なっ……！！　何故、お前がここにいるんだ！！」
「いやはや、おかしな質問をする。逆に問うが、俺以外の一体誰がこの世界に存在を許されようか」
いや、確かに理屈で考えればこいつがここにいいるのはなんら不思議ではない。そう言わせるだけの人物だった。
「鏡八……」
「どうした？　恨みか、怒りか？　何を感じる、お前の日常を壊し

たこの俺に」
楽しげに口の端を歪めている。そう、こいつこそが六十億余りの人々を苦しめた人間なのだ。こいつのせいで、一体何人もの人々が死んだかも分からない。そして、一体何人の者達が人生を狂わされたか。
「何故、無関係な人を大勢巻き込んだんだ？」
「そんなことが聞きたいのか？　どうせ、お前にはどうでもいいことにカテゴライズされているはずなのにな」
先程の楽しげな雰囲気から一転、呆れるような溜め息と共に言われた。そして、どこか面倒な面持ちで思考し始める。確かに、俺は他人のことをあまり意識する方ではない。全人類が滅ぼうが死のうが畢竟構わないが。
「そうだな……一人連れてこようとしただけだ、そうたった一人だけだ」
「一人？　たった一人の為にここまでしたのか？」
答えは意外だった。明確な答えを期待した訳でないが、たった一人のためにここまでお膳立てしたのが理解できなかった。
「はは、何を人事のように言ってるのか。一人とはお前のことだよ」

ショック（前書き）

来週はテストなので更新はしないです。
取り敢えず、ギブ・ミー夏休み！！
思うに、前書きに適当なこと書いて後書きにショートストーリーでも書いてみようかな？

ショック

少々呆然としていたのは否めない。いきなりあんなことを言われ、俺のせいで一体何十億の命が危機に晒されているのか考えるとショックがあった。

しかし、先述した通り他人がどうなろうと知ったことではないのが俺だ。一日経つと何事も無かったかのように何時もの俺に戻っていた。……いや、多少は引きずっていたか。

「何故呼ばれたんだ、こんな世界に」

ベッドに横たわりながら目を覆うように腕を乗せ、呻くように言う。そこに開け放たれていた窓から、一撫での風が吹き込んで肌の上を滑った。それは刃が掠めるような冷たさを想起させて思いがけず僅かに上体を起こす。

そこに何も無いと分かっているはずなのに探してしまう。探したものは無念の元に散った命の無音の怨嗟か。

「あぁ……まったく、これじゃ完璧に引きずってんじゃねぇかよ」

愚痴をこぼしながら、緩慢な動作で立ち上がり窓の外を見る。そう言えば、昨日の死体は見つかったのだろうか……？　いや、それすらもどうでもいいことか。今の状態では何も身に入らない

表通りはいつも通り閑散として侘しい。それを見て、ようやく重たい足を外に向けた。

カズヤがショックを引きずっているその階下の食堂では――

「まだ起きて来ねえのかよ」

「そうね、カズヤの心情でも察したら？　それに鏡八、あなた何時

までここにいる気かしら？」
警戒心も顕わなリンと、いかにもだるそうにジュースを啜る鏡八。二人の間には一触即発とは行かないまでも、あまり近付きたくなくなるような雰囲気が醸し出されている。そんなことからか、食堂には誰もおらず話をするには絶好の機会だった。
それにしても、どうして鏡八はあんなことを言ったのだろうか？
カズヤを知っているような素振りだったが、これも何かの罠なのだろうか？　本当は知らず、はめて楽しむ可能性も捨てきれない。
「カズヤが強くならないと面白くねぇ、まだまだ弱すぎだ。だから来たのさ」
「弱い？」
鏡八の言葉は唐突過ぎた。確かにカズヤの戦闘力は突き抜けて強い訳ではないが、弱いと言い切る程のものではないはずだ。それが何故弱いと断言出来るのか。いや、そもそも何故そんなことを気に掛けるのか。
「別に俺が出張る必要はなかったんだがな。ちょっとした暇潰しも兼ねてだ」
そう言うと、肩を鳴らす。まるでデスクワークをした後のような凝りっぷりだ。
そういえば、鏡八は日頃何をしているのだろうか？　このゲームの絶対的な支配者である彼はしたいことをすることが出来る。そんな彼が肩を凝る様なことをしているとは思えない。
「ならどうしてわざわざ来たのかしら？」
「なに、クリア条件を示してやらねばあいつは動くまい。だから俺がここまで来たのさ」
「親切なことね」
リンが呆れた様な態度を取るが鏡八はまったく気にしなかった。そもそも彼にとってはこの雑談自体が暇潰しの延長線でしかないのだから。
「さてさて、条件は何にするか？」

呆れて溜め息を一つ零(こぼ)す。最初からここだけはクリア条件など設定されていなかったのだろう。多分、ここの世界はこれもそれも全てカズヤの為だけにお膳立てされた世界なのだ。

「さてと、そろそろ行くか」

鏡八は温(ぬる)くなったジュースを飲み干し、何処かへと消えていった。多分、これから起こるであろうゲームの準備のために。

「本当にこの世界はゲームなのね」

嘆息(たんそく)しながら窓の外を見る。この閑散とした街も、栄えた歴史も、朽ちていく未来も、草木に至るまで全てが鏡八のものでありゲームなのだ。そう痛感させられるには充分だった。

「私も準備しないとね。カズヤを殺させる訳にはいかないわ」

鏡八が本当にカズヤの知り合いだというのなら、殺すことは無いと思うが一応準備しておくに越したことは無い。

ショック（後書き）

～ショートストーリー～

カズヤ「さて、ここでは色んな質問をしていこうと思う」

鏡八「まぁ、ぶっちゃけ初回だからな。それに（小説家の）　？？

　設定作りも甘いからな」

リン「まず、ゲームクリア何時出来るの」

カズヤ・鏡八『……』

リン「クリア予定はないのね」

カズヤ「いや、あと三話くらいでクリアするさ。よし、それよりリン

　のスリーサイズを」

リン「えっと、上から――」

鏡八「アホかーー！！」

カズヤ「ギャー、殺すな！！　待て、話せば分かる！！」

リン「どうしたのかしら」

因みに、リンは天然が入ってるのでお気になさらずに～。

カズヤ「うぅ……次回も、適当に期待……して、くれ」

リン「カズヤ大丈夫！？　頭から血が大量に出てるわよ！！」

鏡八「まぁ、セクハラは死刑ものだからな。フッ」

出立（前書き）

テスト期間なのに小説を書くとは何事かと思いますが、少々モチベーションとかの補充を兼ねて投稿しようと思います。

出立

街は人気がほとんどなく……とは言え完全にいない訳ではない。いくつかの店は開かれているが、やはり住人には覇気が無い。店で買った果物は少々熟れ足りないものだが、今のこの街ではこれが精一杯なのだろう。

「はぁ……」

溜め息を吐きながら裏路地に入る。汚れも気にせず、壁に背を預けて座り込む。もう一度息を吐き、吸い込むが――

「！？」

鼻腔につん、とくる乾いたような鉄の匂い。ぼんやりと横を見れば、長身痩躯な男が血溜まりの中にうつ伏せに倒れている。見紛う事なき死体だ。多分、昨日の悲鳴の主であろう。

「うえっ……俺もこうなるのか、な」

吐き気が込み上がる。このゲームの事実を知れば怒れる人々の手によって殺されることは目に見えている。それでなくても、このゲームは本当にデスゲームなのだ。何時こうなってもおかしくない。

男を仰向けにしてみると、心臓に一突きされているだけだった。鮮やかにも思える切り口。男も何をされたのか分からないような驚きの表情のままだ。一瞬で殺されたのが有り有りと見て取れる。背中まで貫通していない所を見ると小物の刃物だろう。

「包丁……？」

男の死体の下敷きになるように包丁が落ちていた。確かに切れ味は良さそうだが、包丁でこんな芸当が出来るものなのか？

「カズヤ、どうしたんだい？」

びくっ、と体が震えて息が止まった。しかし、その声がKのものだと気付いてすぐに安心する。いや、正確にはKではなかったか。

「鏡八、こんなとこで何をしてるんだ？」

振り返れば立っているのはフードを深くかぶった、ここ数日共に

行動してきたKの姿だ。しかし、これはKではないのだ。
「うん？　どういうことかな？」
「手」
「成る程、これは失態だったな」
鏡八は一言で全てを理解したらしい。頷きながら、フードを脱ぎ手をかざして見る。うっすらと残った傷は、ここに来るまでの狼に付けられたものだ。余程注意しないと見えないくらいの治りかけの傷、それを俺は昨日の接触で見つけていてカマをかけたのだ。
「それで、そんな通(ヤツ)り魔を検証して何になる？」
「お前が殺したのか？」
「あぁ、夜歩きには気をつけないとな？　クク……」
楽しそうな笑いではなく、どこか嘲笑に似た笑いだ。まるで、人を虫か何かにしか見えていないようだ。普通の人なら純粋に怖いと感じるはずだが、どこか懐かしく感じる。
「あぁ、そういやお前のナイフの冴えは素晴らしかったな」
意外にキョトンとした表情の鏡八が面白かった。別に褒(ほ)められた事ではなく、不意を突かれたからだろう。
「あ～ぁ、もったいねぇ。記憶がありゃ、面白かったんだがな」
記憶？　一体何の話をしているんだ？
「おい、それは――」
「東に行け」
唐突な物言いだった。それ以上話す気は無い様で、今にもナイフを抜きそうな剣呑な目をしている。選択を間違えれば今にも肉片に変えられそうな勢いだ。
「行って……何をしろって、言うんだ」
途切れ途切れになってしまったのは、冷たい汗が背中を伝う嫌な感覚のせいだ。しかし、このセリフなら選択を間違っていないはずだ。鏡八の性格はともかく、立場としてはこの問いに答える義務があるはずだ。
「殺せ」

「何を？」
鏡八は何も答えなかった。そのとき、微風（そよかぜ）が吹いた。それは段々と強くなり微風は涼しげな風になり強風になった。
「ッ！！」
砂埃（すなぼこり）が舞い上がり、目が開けられなくなり一瞬閉じた瞬間に嘘だったかの様に荒れ狂う強風は消えた。過ぎ去った後には、鏡八も死体も何もかも残っていなかった。
「あぁ、もう嫌になってくるなぁ。ククク……」
別に気が触れた訳ではなく、気合を入れるようなものなのだ。どうも、気が高揚（こうよう）して仕方がない。面倒なのは嫌だが、ようやくゲームがクリア出来そうなのだ。
「リンいるか！！　行くぞ、クリアしに！！」
「はいはい、それで今度はどっちに？」
何故か食料等を買い溜めしていたリンが、裏路地の入り口に立っていた。どうにも疲れた感じのぞんざいな態度であるが、俺は気付かなかった。
「東だ！！」
「はぁ……因みに聞くけど東ってどっち？」
「……どちらでしょうか？」
因みに、リンが溜め息を付いて何も言えなくなったのは秘密である。

鬼（前書き）

久しぶりの投稿です。
夏休みに入ったのはいいですが、その分小説を書く機会が減った気がします。

鬼

翌朝、まだ日も昇らない内に俺達は東に向かった。地図上ではこの街は山に四方を囲まれている。事実深い緑色をした木々が鬱蒼(うっそう)とした森が広がり、ひどく鼻に付く土の匂いに満たされたその空間では何が出て来てもおかしくない様子だった。

「一体どこにいるんだって言うんだ！？」

顔にかかった草を払いのけ、イライラしてつい大声で言ってしまう。鏡八には東に行けと言われたが一体どれ程の距離を歩き、何を殺せばいいのか。そもそも、その対象は人なのかモンスターなのかそれすらも分かっていないのだ。

木々が茂(しげ)り、日が全く差さないとは言え疲労は蓄積される。それに、暑い中を真っ黒のコートを着ているので汗は止め処なく流れ落ちる。

「カズヤ、焦らなくていいでしょ」

対してリンは冷静で、どちらかと俺に辟易しているくらいだ。同じ距離を歩き続けているのに涼しい顔で汗もほとんどかいていない。

「残念ながら雨も降りそうね。これはどこかで休むしかないわよ」

「そうだな」

空は暗くなり始め、少し時間が経てば今にも豪雨が降り始めるだろう。リンは軽く辺りを見回して――

「降られる前に、雨宿りできる場所に行きましょう」

一つの洞窟を指差した。入り口は三メートルくらいの半円形型で、中は見通せずどこか不気味な雰囲気が醸(かも)し出されている。

「あ、あぁ……だが何かいないか？」

「どういうこと？」

「なんか……嫌な予感がする」

そう？　と言いながら、リンは先頭を切るように入っていく。諦めて、本当に渋々ながらリンに付いて行く。こういう時に俺の――

いや、プレイヤーにある一種の勘にも似たこの感覚はほぼ間違いなく当たる。リンは何も感じていないのだろうか？
洞窟の中は湿っぽさを感じず、不気味な雰囲気に反して中は静謐（せいひつ）な空気で満たされていた。そして、一つ嘆息した。
「やっぱりか、ここは迷宮なんだな」
入ってみると、蝋燭（ろうそく）が壁に幾重にも続き薄暗い通路が続いている。しゃがみ込み指で通路をなぞる。
「やはり……」
通路に埃（ほこり）は積もっておらず、真新しく作られたもののようだ――いや、こんなものすぐに作れるのはＧＭ（ゲームマスター）である鏡八を除いて存在しないだろう。
「仕方ない、どう考えても鏡八の誘いだろうしな……」
「どうも、そのようね」
『ウオオオォ……』
それを肯定するかのように、通路の後ろから呻（うめ）く様にゾンビのような物体が……。
「ちょ、待っ――」
俺が刀を抜くより速く、リンの居合い切りをする方が速かった。一瞬のことで軌跡すら見えなかった。
「さぁ、行くわよ」
「まったく、何時見てもリンは速いな」
恐ろしいまでの速度だった。何度戦っても勝てないのだろうと、思い知らされる戦いっぷりだった。俺は力任せの戦い方だが、リンは速すぎるまでのスピードを使った戦い方をする。参考にできないのが実に悔やまれる。
そしてどれ程の距離を歩いただろうか、いきなり荘厳な装飾のされた扉が現れた。
「この先か」
「えぇ、そうね。そしてあなたの始めての試練が」
リンの声はぞっとする程冷たく、そして首には金属特有の凍（い）て付

くような冷たさが感じられた。後ろを振り返るのは無理というものだろう。今振り返れば、リンに首を撥(は)ねられかねない体勢だ。
「一つ訊いていいか？　何故こんなことをするんだ？」
「鏡八のお願いよ。叶えてあげる必要はないのだけれど」
一つ溜め息を僅かに零(こぼ)して扉に手をかける。扉は見た目に反して軽く、ほとんど音も立たずに開いた。
中は直径三十メートル、高さ十メートルくらいのホールで二階のバルコニーから鑑賞できるような作りになっている。その二階にはやはりというか鏡八が見下ろしていた。相変わらずラフな格好で腰にはナイフを下げて楽しそうな笑顔だ。
「ようこそ……と、言うべきかな？」
「まったく、いい趣味してやがるぜ。はっきり言って悪趣味だ」
「そうかねぇ」
鏡八が肩をすくめてみせる。しかし、この瞬間にもリンは入ってきた扉の前を塞ぐ様に立っている。ここを通れなければ反対側の扉しかない。退路の確保を考るが、この配置なら全速力で逆の扉で離脱出来るか……。
「それで、一体何を殺させたいんだ？」
鏡八は何も答えなかった。ゴゴゴォ、と反対側の五メートルくらいの扉が開いて四メートルくらいの巨体が現れた。体表は赤黒く額からは一本の角が飛び出し、痩躯(そうく)だが筋肉質な肉体は鬼という言葉を連想させた。
「マジかよ！？　おいおい流石にあんなの殺せる程、俺は人間やめてないぜ！！」
その手には幅広で肉厚の大剣が握られている。長さはその体躯と変わらぬ長さ、俺など一撃貰えば切られるではなく挽(ひ)き肉になってしまうだろう。
「さてと、この鬼と戦ってもらおうか」
「おい、こいつを一人で倒せって言うのか！？」
「そうだ、助言も手助けも一切皆無だ。勿論、リンも含めて。その

代わり、こちらからは手出ししないから安心しろ」
笑顔で最悪なことをはっきり言いやがったぜ。無茶振りもいい所だな。それに剣で切られなくても踏み潰されたら普通に死ぬぞ！？
『ゴアアアアアァ！！』
「ちっ！！」
迷宮すら震える程の声量に、思わず刀を抜くことすら出来ずに耳を防ぐ。そして咆哮を鳴き止むと同時に鬼は物凄い速度で走り出した。
「速っ！？」
その速度を剣に乗せた横凪ぎの一撃を、地に伏せるようにしてギリギリ避ける。そして、縦から振り下ろされた斬撃を転がるように横に避けるが――
「ぐっ！！」
破砕した地面の破片が胸に直撃した。一瞬息が止まるが、体は動く。息をまとめて吐き、立ち上がり鬼の股下を通り抜け壁際まで走る。
「はぁ、はぁ……どうするか。いや、マジで」
あの巨体にダメージを通すには剣なんかでは無理があるだろう。股下を抜けるときに触れてみたが、正確なことは分からないが筋肉が異常に発達しsているのか硬かった。
「今度はこっちからか」
鬼の足元を切り込む。
「ちっ、やはりか」
剣は勿論というか、ガキンと金属が鳴り合うような音を響かせて弾かれた。そのまま鬼が剣を振り下ろしてくるが、股下から後ろ側から抜ける。巨体のお陰で回避は容易いが硬すぎる。

「苦戦しそうね」
「そうだな、あいつは勝てそうに無いと諦める癖があるからな」
カズヤが戦っている間に鏡八の隣にリンはいた。冷静に考えれば扉から逃げれるのだが、それすらも思考出来ない程に焦っているのだろう。
今話してる間にもカズヤは防戦一方だ――いや、防戦一方と言えば聞こえはいいが勝ち目のない戦いから逃げ回っているだけだ。たしかに鬼はカスタマイズして体表は硬くしたし俊敏にしてある。はっきり言って勝つことは今のカズヤでは難しいだろう。
「はっきり言って無理でしょ。今のカズヤでは死ぬかもね」
「おぉ、はっきり言うね。いやいや、カズヤが憐れだ。美少女からも見放されたとあっては号泣ものだな」
流石に同情の視線をカズヤに向ける。逃げるのに必死で多分今の話は聞こえていないだろうが、勝利の女神とは言わないがリンからも見放されたら本当に勝てるのか？　ついつい、縁起でもないことを考えてしまう。
「あいつは絶対勝つさ。何せあいつは――」

鬼の攻撃は確実に俺を捉(とら)え始めている。いや違うか、俺の体力が刻一刻と落ちてきているのだ。過度の緊張は実際の疲労を何倍にも増やす足枷だ。
「はぁ……無理かもな。勝てる気がしねぇ」
それに緊張だけじゃない。握力は弱まり剣を落としそうで、恐怖が足を竦(すく)ませ、息は上がり今にも崩れ落ちそうだ。もう何がなんだか分からないくらいに疲弊している。

『ゴアアアアアァ！！』
「しまっ――」
咆哮を上げ耳を塞がせた隙に接近され、上段から振り下ろされた剣を俺は避けようとした。しかし、疲労で足が震え避けることが出来ず俺は受け止めるしか出来なかった。
「ゴホッ……」
肺から全ての息が抜ける嫌な感覚が妙に残り、折れた刀の破片が腹に刺さっているのを冷静に見つめていた。鬼はそのままもう一度上段から振り下ろそうとしているのを見て、俺は指一本動かせず目を閉じた。

鬼1（前書き）

まさか、一日に二回も更新するとは思いませんでした。
この小説、作者自身書いてて内容が理解し辛いものがあります。
なんというか、頭では書きたい内容が固まっているのですが文字では伝えにくい場所が多々ありげんなりしております。

ガーベラさん、どこ直せば分かり易いですかね～？

鬼1

昔……と言うほど古い話ではないが過去を思い出していた。
俺は小、中学校共に虐(いじ)めに遭(あ)っていた。最初は友達の軽い遊び心だったようだ。集団無視、暴行、悪口、持ち物を捨てられたりと色んな手法を使われた。
だが、その話は今は関係ないので置いておくとしよう。それはその後の人生にも暗い影を落とした。対人恐怖症というほどではなかったが、人と接するのが怖くなってしまった。いや、正確には人とどう接していいか分からなくなってしまった。
しかし、一人の少年との出会いが俺を生きたいと思わせてくれた。何故か、その顔は濃霧がかかったように思い出せない。
何時頃だっただろうか……招待されたのは。多分、交流ができて少しした頃だったと思う。そいつが作ったゲームをやってみないか、と訊(き)かれたのだ。俺はあまり興味を持っていなかったがやると答えたのだ。
そう、この世界こそが俺がプレイしているゲームだ。

目を開ければ、鬼が剣を振り下ろすのがスローモーションで見えた。だが、そんなもの今の俺は眼中になかった。俺が探していたのは、リンの隣あくまで悠然と見ている鏡八だった。
ゲームの主催者だった時点で気付くべきだったのにな。
「思い出したぜ……まったく、何でこんな大切なこと忘れてたんだろうな」
腹に刺さった破片は一先(ひとま)ず無視して、折れた刀を鬼に投げつける。

それを払いのけた僅かなタイムラグで剣を避け、腹の破片も抜き取っておく。
「はぁ、勝っても出血多量で死んだら笑いもんだぞ！！」
鬼が地面に食い込んだ剣を抜くと、ぼろぼろと土煙などが落ちていく。そのまま後ろを振り向き、連続で縦から振り下ろしてくる。それをぎりぎりの所で、サイドステップだけで避ける。
『ゴオァ！！』
当たらないことに痺れを切らしたのか、単調ではあるが確実な範囲を持った横凪ぎの攻撃に切り替えた。
「待ってましたよっ、と」
今度は避けるのではなく、逆に突っ込む様に前に出てジャンプする。そして、剣の刃先に乗り振り終わる寸前に弾丸のような速度で飛び出した。
向かう先は二階のバルコニー。
「こうなりゃ自棄（ヤケ）だ」
回収していた壁に折れた剣を叩きつけ、衝撃が伝わる前に手を離し地面を転がる。そのまま通路を駆け抜け、鏡八たちの元に向かう。
「借りるぞ」
鏡八の腰に下がっていた鞘（さや）に納（おさ）められたナイフを抜き取る。そのまま一階に飛び降り、転がって衝撃を和（やわ）らげる。

カズヤにナイフを取られ、戦闘を見ているが先程とは全く動きが違う。もしかしたら、戦闘前よりも俊敏かもしれない。
「あーぁ、あいつには俺のナイフに触れんなって言ってたのによ」
「おかしいわね。カズヤの動きが違うわね。いえ、迷いが消えたのかしら？」

「勝てると踏んだのさ」
何か対抗策を見出したか。それじゃなくても、あのナイフは――

「クソ野郎が、借りは今殺して返してやる」
鬼の振るう上段からの剣をサイドステップで避けて、剣に飛び乗り、手、肩まで上り詰める。払いのけようとした手が来るより僅かに早く俺のナイフが目に刺さった。
『ゴアアアアァァァァァ！！』
そのままナイフを手にしたまま飛び降りる。本来ならばそのまま目から脳まで切り込みたかったのだが、痛みで顔を覆(おお)うように突き出された手から逃げるように飛び降りてしまった。
「さて、もういっか……あれ？」
振り返った俺が見たものは、半分に切り裂かれた鬼がゆっくりと倒れる様であった。ドン、と腹に響くような大きな音を立てて倒れた鬼は、溶けるように塵(ちり)になって消えた。予想以上というか、有り得ない程の切れ味のナイフだった。
「これでいいんだろ、鏡八」
ナイフの血糊(ちのり)を払い、鏡八に投げる。あぁ、と受け取り懐から出した紙でふき取り鞘に納めた。そして飛び降り、こちらへと悠然と近付いてきた。
「まぁ、ギリギリ及第点だな」
「俺も思い出したぜ、お前のこと」
「忘れんなよ、一応親友だろ」
鏡八はいかにも落胆したように首を振る。というか、気のせいか今一応を強調しなかったか？　いや、気のせいだと信じたい……。
「まさか親友に殺されかけるとはな、流石の俺でも想定外だ」

「死なないように微妙にカスタマイズしただろ？」
あれで死なないように……だと？　腹から血が出て骨の一本くらい逝ってるかもしれない程の重症だと言うのにか？　それを聞いたせいか、単に血が足りないだけなのかくらくらする。
「おっと」
「大丈夫、カズヤ？」
ふらついた所を、何時からいたのか後ろに立っていたリンが支えてくれる。そのまま座らされ、応急処置を施（ほどこ）してくれる。
「さて、これで今回もゲームはクリアされた。お前が進むは茨の道――いや、それすらも生温（なまぬる）い、覇道を進むだろう。さて何時まで生き残れるか」
俺たちに背を向け、語る言葉は多分本当だろう。それでなくても、この世界は生き残れない可能性が非常に高いのだ。まぁ、ただ――
「後ろ向いてんの照れ隠しか、そんな中二臭いセリフ」
「ちげぇよ、殺すぞ」
「あ、照れちゃ――」
て、という言葉を言い切ることが出来なかった。ちゃき、とほんの僅かの音に全身の毛が逆立つのが分かったからだ。間違いなくナイフをほんの少し抜いた音だ。
「はは、何を言ってるんだカズヤ。あれ、そんなに死にたかったのか？」
「いや、待て！！　早まるな、リン行くぞ！！」
「えっ、ちょっと！？」
リンの手を引き、鬼が入ってきた扉に向かう。そこは形容し難い色で輝いてるように見える。これが、このゲーム最大の特徴。世界と世界を繋いでいるのだ。いくら終わろうとも、世界を連結させることで果てがない――詰まり、終わりがないゲームになっている――。
俺とリンは光の中に包まれて消えた。

紹介コーナー（前書き）

今日は紹介コーナーを書いてみました。
作者自身まとめとかないと無理そうなんで……色々と。

紹介コーナー

〜自己紹介コーナー〜
名前：カズヤ
役職：プレイヤー
肉体年齢：十六歳（ゲームの中では基本的に歳取らないので……）
容姿：黒目黒髪、常に黒いコート着用。身長、約百六十センチ程度。
武器：現在、日本刀一振り。武器に慣れていない故に、どんなものでも使うことに躊躇はない。
備考：実質的ゲームの支配者である鏡八とは自称親友の間柄
　　戦い方は基本的に力任せに斬るだけ
　　一人称、語尾、口調気分によって色々変わる

名前：リン
役職：仲間、剣士
肉体年齢：十六〜十九くらい
容姿：緑色の長い髪をポニーテールに束ね、瞳は涼しげな翡翠色。服装は動きやすいものなら何でもＯＫ
　　身長百七十センチ程度。
武器：日本刀一振り
備考：カズヤの仲間。
　　戦い方は誰よりも速く斬る、スピード型
　　心なしか、羞恥心が薄いような……

名前：鏡八
役職：ＧＭ（ゲームマスター）。ナレーター。
肉体年齢：十六歳
容姿：黒目黒髪。メガネ着用（伊達か度が入ってるかは不明）。身長、百七十センチ程度。

服はシャツにジーンズ、スリッパなどラフな格好を好む。
武器：ナイフ。普通は一本だけだが、二刀流も逆手持ちもスローイングナイフも可能。
備考：カズヤの一応親友にして、実質的ゲームの支配者
残念なことに、戦闘シーンが少ないような……

～登場予定プレイヤー、紹介～
（九十九％くらいの確立で出ます。最早、出ないとしたら作者が小説書かないときくらいです）
名前：本名不明、通称イッチー
役職：プレイヤー、創造神
肉体年齢：十六歳
容姿：黒目黒髪。身長、百七十センチ程度で痩躯（そうく）。鏡八同様、ラフな格好を好む。
武器：思考
備考：このゲーム最初の神格を得た者。
カズヤ達とは違う時代にゲームに参加した者
実力はほぼゲーム内Ｎｏ．１
神としての能力は思考したことを全て創造すること
（思考したら現実に全て引き起こされる。一部例外アリ）

名前：タツキ
役職：プレイヤー、妄想神
肉体年齢：十六歳
容姿：黒目黒髪、メガネ装備。身長、百六十センチ程度。
武器：銃器ならなんでもござれ。
備考：ゲーム内最大戦力、約三万の仲間を持つプレイヤー
本人は仲間より強くないような……
神としての能力永遠に物凄い速度で妄想する。外界の刺激をシャットアウトしてしまうほど。

（ぶっちゃけ要らね）

名前：ユージ
役職：仲間、コック
肉体年齢：十六歳程度
容姿：黒目黒髪、中肉中背。身長、百六十センチ程度。
武器：片手剣一本＋α（その時の気分）
備考：タツキの仲間にして最強の料理人を目指す少年
　火がないところでも料理を作る為なのか火を操ることが可能
　最強キャラ候補

紹介コーナー（後書き）

～プレイヤーと仲間の違い～

カズヤ「さて、今回久々に設けたこのコーナー」

鏡八「え？　プレイヤーと仲間の違い？　知らね」

リン「いや、ＧＭがそれ言っちゃ終わりでしょ……」

鏡八「冗談だって、プレイヤーと仲間だろ、主従関係に近いか？
仲間になる人物の条件は色々あるが、あいつらは全員
ゲームの中の世界で育った奴等だな」

カズヤ「……因みに、主従関係としての強制力は？」

鏡八「最低限の拘束かな。
詰まり、中にはプレイヤーの命令をほとんど聞かない仲間も
存在するってことだ」

カズヤ「まぁ、プレイヤーに愛想つかしてどっか行くことはない
という解釈でＯＫ？」

鏡八「まぁ、そんな感じだな。因みに、リンみたいなのは貴重だぞ。
掃除、洗濯、料理何でも出来るからな。
それに美少女なのは間違いない」

カズヤ「確かに……」

リン「取り敢えず、次回のお話はカズヤがゲームを一度クリアして
数年後の世界よ。
……因みに、カズヤの出番はないかも（ボソッ）」

カズヤ「え、何か言った？」

鏡八「取り敢えず、次回を待て！！」

神様ｖｓ料理人（前書き）

この世界は、カズヤがゲームをクリアしてから数年後のお話です。
いきなり戦闘のスケールが違って作者自身げんなりします……。
でも、仕方ないんです。まだまだスケールアップするつもりだし。

神様ｖｓ料理人

木々がそこそこ茂(しげ)っているが周りが暗くなる程でも、じめじめした湿度の高い空気で満たされているわけでもない非常に過ごし易い森の中を一人の少年が歩いていた。少年は百七十センチ程の身長で黒目黒髪の痩躯(そうく)、軽装で武器を持っているような様子もしない。見れば皆が森林浴か散歩をしているのだろうと思うだろう。

しかし、このゲームの性質上安全な場所などどこにも存在していない。例え、どんなに過ごし易い穏やかな場所であろうが、モンスターは出てくる。それを考慮すると無用心だと言えなくない。いや寧ろ(むしろ)、プレイヤーの体感では逆に過ごし易い場所のほうが凶暴なモンスターが出現するという噂があるくらいだ。製作者の悪意が見え透けるようである。

少年は無言で歩いて行く。その足取りに迷いはなく、とは言え明確な目的地があるわけでもないようで適当に道を選んでいるようである。既に日は高く、湿度は高くないが温度は高くなってきたはずではあるが、少年の顔には汗が全く浮かんでいない。

「何だ……？」

少年は歩みを止め、唐突に上を仰ぎ見るて僅かに呟(つぶや)くくらいの声で言った。

そして、上空から弾丸などという生易しい速度で言い表すことができない速度で何かが降ってきた！！

「おいおい、今のを避けるのかよ。まぁいいさ、今日こそじっくり調理してやるよ。なぁ、神様？」

舞い上がった砂埃(すなぼこり)から出てきたのは、なんと少年だった！！

こちらもやはり黒目だが、髪は少々色素が薄く茶色に近い。身長も少し低く百六十センチ程であろう。手に持っているのは幅広だが片手剣であり少々重そうなのだが、少年にとっては苦でもないようで平然と片手で持っている。

「あー……ユージが来たということは、またタツキか。何でこうも面倒なもんばっか来るんだ」
襲撃され押しつぶされたように見えた少年は、何時の間にか五メートル程離れた場所に立っていた。服には一切埃が付いておらず、あの速度に対応できるなど控えめに見てもまともな人間ではないようだ。しかも、神様と呼ばれていたが何者なのか？
ユージと呼ばれた襲撃者は距離を測りつつも、逃がさぬように視線で牽制している。しかし、それを見て涼しい顔……もとい面倒なことになったと疲れた顔をしてみせる少年。
「よっしゃあぁぁぁ！！　ここで会ったが百年目だイッチー！！」
いきなり木々の間を走って出てきた乱入者は、神様と呼ばれた少年を指差す――因みに、いきなりの乱入に場に微妙な空気が流れてしまったのは察してほしい――。どうやら、この少年の名前……では勿論ないだろうが、通称はイッチーと言うのだろう。ということは、イッチーが言っていたタツキと言うのはこの少年ではなかろうか？
黒目で黒髪だが、髪は全く手入れされておらず元気にツンツンと立っている。視力が悪いのか眼鏡をしており、身長はユージとさして変わらないだろう。イッチーが痩躯なのに対し、タツキはまぁ……中肉中背ややぷっくりと言ったところか。
「行くのだユージ君！！　今日こそイッチーを――」
「うるせぇ、黙ってろカス」
威勢よく命令を掛けたタツキは、ユージに軽く腹を殴られ悶絶していた――ゴキッと骨が逝ったような音がしたような気が……――。多分、タツキはプレイヤーでユージはその仲間なのだろう。しかし、上下関係というか主従関係はあからさまに逆転していた。
だが、それも仕方がないのかもしれない。なにせ、ここにいるイッチーとユージの強さはゲーム内最強と言っても過言ではない域に達しているのだ。
「行くぜイッチー！！」

ユージの顔には、戦闘行為そのものに狂喜しているような笑みが浮かんでいる。そして、じりっと足の重心をずらして――消えた！？
多分、常人では視認出来ないほどの速度に達したのだろう。
「壁」
イッチーは一言紡ぐと、がきんと硬い金属音が鳴り響いてきた。見ればユージがイッチーの後方から切りかかっている姿だった。不自然なことに、そこに空気の壁があるかのように刃が空中で止まっている。
「ふはは、まだだ！！　燃えろ！！」
ユージが歪んだ笑みを浮かべつつ叫ぶと、剣を持っていない左手に炎を纏(まと)いそれを空気の壁へ叩き付けた。多分、炎を操る能力があるのだろう。
「やばっ！？」
イッチーはここで初めて動揺していた。なにせ、ユージの炎を纏った左手が普通に空気の壁を貫通してきたからである。脇目も振らず、土の上を無様に転がる様にしてなんとか回避した。この動きからしても、イッチーには体を張った戦闘をこなした経験が少ないのかもしれない。
このゲームにはイッチーの様な純粋な能力者タイプが、極稀(ごくまれ)に存在するのだ。能力を使い、武器を持つ者を圧倒する程の力を得た者に傾向がある。しかし、それも当然か。能力を用いて武器を扱う以上のことが出来るならば、危険な戦闘を減らせる可能性や面倒な手間を掛けずに済むからだ。
「いいぜ、さて今回のは耐えられるか！！」
ユージの手に物凄い炎が集まっていく。更に、それを圧縮させ、更に圧縮、圧縮、圧縮……その手に集う熱量は物凄い温度になっているだろう。近くにある木々は溶け失せ、土も溶解し泥になっている。
人間が耐えられる熱量ではない。イッチーにぶつかれば、間違いなく殺せるだろう。

「熱い、熱い、死ぬ～！！」
喚くのは、腹を抱えて悶絶していたはずのタツキであった。基礎回復力が高いのか、単に頑丈なのかユージから逃げていく。いくら、プレイヤーとは言え自分の仲間の攻撃に巻き込まれて死ぬのはゴメンだろう。
「燃えろ！！」
「衝撃……！！」
ユージの手からは荒れ狂うように炎が飛び出していき、イッチーの周りからは衝撃波が生み出され互いの間で拮抗し始めた。
「いいぜ、まだまだぁ！！」
ユージはもはや狂笑に近い笑みを浮かべ火力を上げる。
「もっと強く……！！」
それに比例するようにイッチーから放たれる衝撃波も強くなる。
そして、結果は呆気なく訪れることになった。二人の攻撃が拡散するように、爆発してしまったのだ。
『やばっ！？』
二人とも言うが早いか、いきなり消えてしまった。

この攻撃の余波で隕石が落ちたのか、という程のクレーターが発生したのは言うまでもない。そしてもっと重大なことに、この世界に存在したプレイヤーの総人口の二割が消失したのは紛れもない事実である。

巻き添え

痛みで目が覚めるのは、あまり体験したくないことの一つだと俺は思う。

「痛ッ……！！」

一番ポピュラーなのは筋肉痛だろうが、今の俺はその状況に近かった。寝返りを打った拍子に、体中の擦り傷が悲鳴を上げるように痛んだ。今朝の俺の意識は、何時にも増してはっきりしていなかった。そうそうの事が無ければ、一時間くらいはいつも通りベッドで寝転がったままだろう。

――そう、目の前にリンの寝顔があったとしても……はい？

「！？　何でリンがこ――」

「五月蠅（うるさ）い」

全てを言い切る前に後ろから頭を軽く殴られた。振り返ろうとして、強烈な日差しと軽い痛みに顔をしかめつつ叩いた人物を探す。日は高くないようで気温もさして高くなく、まだ朝なのだろう。

「何故、お前がここにいる鏡八……」

「俺がいたら悪いのかカズヤ？」

そこにいたのはベッドに腰掛け、窓に向かいつつ読書している鏡八だった。手に持っているのは……ラノベか？

……一歩譲って読んでる本は置いておこう。取り敢えず、ナゼオマエガココニイル……？

しかし、よく見てみれば鏡八の格好はKのときのフードつきコートだ。ラフな格好を好む彼が何故――

「おい、鏡八その傷！？」

「あー、もうこんぐらいで騒ぐなよ……」

僅かに覗く袖口からは幾重にも巻かれた包帯が見える。明らかに戦闘行為か何かをした後のような有様だ。というより俺が驚いたのは戦闘行為そのものではなく、鏡八が怪我（ケガ）をするほどのことをした

という事実にだ。
「というか、それ言ったらてめぇ等もだろうが」
？　言われて気付いたが、俺とリンの体にも包帯があちこち巻かれている。それも、俺が巻いたような無残な出来ではなく的確な処置がされている。微(かす)かに消毒液臭い匂いが鼻につく。
しかし、よくよく考えてみれば怪我(ケガ)をした記憶が無い。それどころか、宿に泊まった記憶もないのだが……。
「まさか……俺は、酒を飲んでしまったというのか……！！」
「いや何故、そうなる？」
記憶がないだなんて、きっとアルコールが回って酔ってあちこちぶつけて宿に入ったとしか……。
いや、待てリンがここで寝ている理由は……まさか、俺は男として最低なことを――
「いや無いわ」
「何がだよ」
リンを押し倒すのは不可能。うん、有り得んわ。
「……五月蝿いわねぇ」
「すまん、起こしたか」
「えぇ……でもどうして宿にいるのかしら？　確かどこかの森の近くにいたはずだけど」
記憶を探るように頭を手で押さえながらリンは話す。言われてみれば、森のような所を歩いていた気がしないでもないが混乱した頭では思い出せそうに無かった。
「まぁ……なんだ、飯でも食うか？」
やはりコートは暑かったのか脱ぎながら鏡八は提案した。

コートを脱いだ鏡八の体は予め(あらかじ)袖口から覗いた包帯を見ていた為、ショックは少なかったが体中に包帯を巻いていた。控えめに見ても重傷に見える。
食堂は人払いでもしたかのように誰もいなかった。まぁ、普通にこのゲームを操ることが出来る鏡八がやったとしてもおかしくはないのだが。朝食はパンにスープ……そして、何故朝から肉？
「朝から重(ヘビー)いな飯だな……」
「……激しく同意だ」
鏡八ですら、頭を抱えたい様子で……いや違うな、あいつは肉が食えないんだったな。何故食えないのかは、普通のプレイヤーなら想像が付かないでもない。
俺たちはモンスターを殺すことがあるが、それ以上に人間を殺すのが精神的に辛いのだ。人を一人殺しただけで、何も喉に通らないほど憔悴(しょうすい)した者などたくさんいる。それは人がまだ人であることを、実感出来るのだからいいことだと思う。殺さないで済むに越したことはないのだが。
まぁ……そんなことで気が滅入る程、俺もリンも鏡八も細い神経している訳ではないはずだ。鏡八の場合は、純粋に肉が嫌いなのかもしれない。
「でも、美味しいわよ」
「あぁ……まぁ、よかったんじゃね？　よしこれも、食っちまえ」
リンは朝から肉でもいいのか普通に食べている。俺としては食えないこともないのだが、朝はパンか食わないくらいなのだ。鏡八の皿を移動させるが、鏡八自身何も言わなかったがほっとしているようだ。
「さてと、話を戻すか……お前たちは倒れてたんだ。つーか、攻撃の余波に巻き込まれて九死に一生を得たというか、ぶっちゃけ――」
そこで一区切りして、溜めるように間を置いて。
「死んだ♪」
「いやいや！！　死んだ、はいいけど♪は余計だろ！！」

「遂にこの微妙なニュアンスまで体得してしまうとは……プレイヤーの成長恐るべし」
ボケはいいが、もうツッコミを入れる気すら起きん……。というか、お前本当は楽しければなんでもいいんだろ？
「それで、本当のところはどうだったの？」
「いや、ほとんど言った通りなんだよ。ゲーム内最強候補同士のバトルだ、余波で総人口の二割くらい消滅した。そして、それの巻き添えくらったのさ」
総人口の二割！？　驚きを内心隠せなかったが、他者の命などどうでもいいためそれほどショックは大きくなかった。
話すのが面倒なのか鏡八は頬杖（ほおづえ）を付きつつ、懐からノートパソコンのようなものを取り出した。ような、と形容したのは何故そんなものが必要なのかと思うのと……。
「壊れてないか？」
正確に言えばパソコンの残骸だったのだ。半分くらいは綺麗なのだが半分くらいはボロボロ、まるでハンマーで半分だけ叩き壊したようだ。
「あぁ、大丈夫だって。ちょっと待ってろ、すぐ直る」
何をする気なのか机に置いたまま、放置してパンを頬張る。
「いや、直るって……動物じゃねぇんだから」
鏡八の言動に付き合うのも面倒、と気にせずに少し濃ゆい味付けのスープを口に含む。
「ぶっ！！」
しかし、それをすぐに吹き出してしまう事になる。何故なら、壊れていたパソコンが独りでに直り始めたのだ。壊れた箇所から新たに部品が生えるように、次々と直っていくのだ。
「言った通りだろ」
鏡八が直ったパソコンを起動させるが、これまた現実的に考えて有り得ない動きをするのだ。鏡八はパソコンに触れているだけなのに、画面上にいくつものファイル、文字、画像がほぼタイムラグ無

しで自動的に展開していくのだ。どこかの森だったのか、クレーター状に抉られた周りには枯れた木々が囲んでいる。ぶっちゃけこのパソコン勝手に直ったり、スペックの異常な高さに気味悪い。
画面には被害面積、死亡者……次々に情報が出ては消えていく。
「見覚えがあるか？」
「俺が最後に覚えてる場所は確かに森だが、こんなとこじゃねぇよ」
「まぁな……だが、残念ながらここなんだよな」
画像が切り替わり、動画になる。写っているのは三人の少年、見たところ全員共に日本人だろう。戦闘が行われているようだが、速過ぎたり理解不能な事象が起きたりと正直何が行われているか分からない。そして動画は二人の激突と共に終わりを告げた。
「有り得ん、人間の限界を軽く越えてるだろ」
「そりゃそうだ。少なくとも片方は神クラスだ」
「神？」
「そう、神だ。まぁ人だし、ただのゲームの役職（クラス）みたいなものだ」
人だと聞いて少し安心したのは内緒だ。神なんてものが相手だったら、どう戦えばいいのかを考えてしまった。だが、同じ人ならまだ何とかなると思ってしまったのだ。
しかし、その安心はしてはいけないものだと知るのは鏡八のたった一言だった。
「だが、その持ちうる権能一つで冗談抜きで世界が潰れるぞ。実際に何度世界が壊され、人の知らぬところで直されていたことか」
嘆息しながら淡々と恐ろしいことを口にする。本当にそんなことが行われていたのに、誰も気付かないなんて……。
「なにせ、出来ないことの方が少ない」
こいつだ、と画面を指差すとまた切り替わりプロフィールのようなものと顔写真が現れた。典型的な日本人で黒目黒髪の痩躯（そうく）、名前イチヤマ通称イッチー。というか、名前書いてるんだったら通称を書く必要は無いのでは……？
「んっ？　こいつ、俺たちよりも十年弱だが早くこの世界に来てい

る！？」
　履歴には確かにゲームに参加した年号が八年早く書かれている。それだけじゃない。神を殺した年も目を引かれるが、今までの経歴の中には世界を破壊したという項目が散見できた。能力は特秘事項扱いになっているが、『創造神：思考を現実に引き起こす』と箇条書きで書かれている。
「あと、相手の情報は……面倒、接触して思考をするだけで勝手に見れるから後は任した」
　本当に面倒なのかパソコンを投げてよこす。手に取ると見た目に反して軽く、落としてしまいそうになる。というより、これはプレイヤーが勝手に見ていいものではないだろうに……。
　動画の相手側を思い出すと、プロフィールが表示された。名前はユージ、黒目黒髪少し筋肉質な体躯（たいく）。……それにしても、趣味が料理というのは意外すぎる。というか、最高速度８００ｍ／秒って何！？
「こいつ、人間か！？　この速度で、体バラバラにならんのか。有り得ね……」
　先に神様なんてものを見てしまったからだろうか。最初に驚きが出たが、すぐに冷静に思考することが出来た。
「まぁ、残念ながらプレイヤーはゲーム内なら成長に果てが無い。無限に成長可能だ、才能にもよるがな」
　鏡八は何でも無いように言うが、本当に興味がないのだろう。それはプレイヤーに等しく強くなる権利が与えられていることに他ならない。だが才能に左右されると言うならば、時間を掛ければ掛けるだけ他者との強さは明確なものになっていくことになるだろう。
「ねぇ、そろそろ訊（き）いていいかしら？」
「どうした？」
　今まで何も言わずにいたリンが口を挟んできた。画面に集中し過ぎていて気付かなかったが、見てみれば食事を終えたのだろう。何時の間にか窓から外を覗いていた。

「ここどこかしら？」
「そういや言ってなかったが、次の世界。正確に言えばお前たちが巻き込まれた森があった世界のだが」
　ということは、気絶してる間にゲームがクリアされたということだろう。ゲームはクリアされると、強制的にプレイヤーは世界を移動させられる。自分でクリア出来なかったのは残念だが。
「前の世界はほぼ全域が森にしてあり、サバイバル能力を確かめるのが目標だったんだが。しかし、あれではあまり見れなかった。なにせ前の世界に来て三日でクリアだったからな、餓死者は百名もいなかった。それに、クリア条件を破壊系のものにしたのもいけなかった。対象物も巻き込まれて、すぐ終わりだ」
　後悔しているのか、面白かったのか判断に困る声音だ。
　話を聞いてるのも飽きたので窓から外を見る。どこも変わらない普通の街。人々が賑(にぎ)やかに買い物していたり雑談していたり、楽しげな風景。そして、その中にある異物。
「コロシアム……？」
　想像が容易に出来るような円柱型の闘技場。ここから遠くにあるというのに、巨大な闘技場の凝った意匠がここからでもよく見て取れる。
「そう、今回の趣旨は殺し合い♪」
　本当に楽しそうに鏡八は歪んだ笑顔を浮かべた。

闘技場（前書き）

久しぶりの投稿です。
因みに、小説のお気に入り登録してくださった読者さんが一人おりましていたく喜びました。
まぁ、二人の内一人は知人なのですが……。

闘技場

鏡八との会話の後、宿を出て俺達は店を冷やかしつつ闘技場へと足を向けていた。鏡八とは宿で別れたのだが何かすることがあるらしく、フードを深く被(かぶ)り直して行った。何時(いつ)殺されそうになってもおかしくないほどのこと――デスゲームに無理矢理参加させた――張本人なのだ。その辺を歩くだけでも危険だと思う。神経が太いのか、単に死なない自信があるのかどちらにしても大したものである。

思考を断ち闘技場に目を向けるが、やはり異様なのはその大きさだろう。近付けば近付くほどその大きさに圧倒される。高さ、直径共に一キロは下らないだろう。豪奢(ごうしゃ)な外壁を見ていると、中もきっと凄いのだろうと思わせるが――。

「こんなとこで戦いたくないぜ。金で戦うのも、気のまま戦うのもいいが見世物にはされたくねぇな」

「同意だわ。戦いなんて自分の為か大切な人を守るだけで充分よ」

取り敢えず、ここで戦うことなんてないだろう。俺もリンもやる気がないのだし、わざわざ参加する必要はないはずだ。それに、まだ怪我は完治していないのだ。

参加しない場合、ゲームのクリアは他の人に譲ることになるだろう。こんなに大きく目立つものなら、クリア条件もここに関連するものだろうからな。

「前回に引き続き、今回もクリアならずか」

「そうね、でもいいんじゃないかしら。クリアする為に戦っている訳ではないでしょう？」

リンも俺と同じ結論に達したのか、同意を示している。それに言っていることは正しい。クリアする為に戦う訳ではなく、生きるために刃を向ける。それがリンの刀を握る理由なのだろう。

俺はどうなんだろうな？　何の為に武器を手に取るのか。

「カズヤ怖い顔してるわよ」

顔に手を当ててみるが、俺の口は楽しそうに歪んでいて溜め息が僅かに漏れる。人を殺すのが楽しくて戦っているのだろうか、と考えてしまう。実際その可能性も否定できないのが現状だ。殺すことへの快楽を求めて戦っているプレイヤーはたくさんいる。俺もその中の一人でしかないのかもしれない。

「どうする、見物に行くか？」

「殺し合いを見て楽しいの？」

リンは呆れた、と言うように頭を振る。リンの性格を考えればこうなることは予想できたはずなのに、配慮が足りなかったと反省する。だが、気になるのだ。参加するかは分からないが、先程見た三人分のデータが脳裏を過ぎる。

「じゃあ、後で一人で行ってみますか」

「行きたいならそうするといいわ」

リンは別行動を取るようで、一人で人込みの中へ消えていった。

闘技場に入ると、観客席が見えたので行ってみた。どうやら収容できる人数は相当に多いようで、八割がた埋まっているが空きがある。空いていた席に座り込み、足を組んで待つこと十分程。

「――ようこそ、殺し合いの場へ」

闘技場内の静けさは耳が痛いほどであった。その一言に問題があった訳でも――倫理的に問題があるが、今は置いておく――、トラブルが発生した訳でもない。静けさの原因は驚愕と殺意と憎悪に収束されるだろう。

「おいおい……あいつは馬鹿か」

思わず言葉が漏れる――漏れてしまう。闘技場に唐突に現れ、一言を言ったのは鏡八であった。闘技場の正面に、バルコニー状に開

けた空間で一人だけ椅子で寛(くつろ)いでる。
　このゲームにおいて、一番殺したい人に挙げられても仕方が無い程の人物なのだ。友人、家族、恋人、大切な人をこのデスゲームで無くした人は少なくない。そして、この状況を作り出したのは鏡八なのだ――原因は俺にあるのだが――。よくも、のうのうと出てこれると誰もが感じているだろう。
「ん？　どうした、やけに静かだな。俺が殺したいか？」
　当たり前だ、と隣から言葉が漏れてきた。この会場には、同じ気持ちの者たちが大量に存在しているだろう。空気が気持ち悪い程、淀(よど)んでいるのが肌で感じられる。
「そうだな、このまま戦うのは面白くないな。優勝者には俺と戦う権利をくれてやるってのはどうだ？
ついでにこれをくれてやろう」
　周りからふざけるな、という声がいくつか上がった。普通に考えて、ここで皆で袋叩きにしてしまえばいいのだ。誰もそんな茶番に付き合う必要がないことを理解している。
　だが、鏡八が懐から取り出した小瓶が気になる。中には液体がほんの数滴入ってるだけだ。何に使えるのだろうか？
「死ね！！」
　思考を遮るように、ここから遠い席で自身を叱咤するように大声を上げ何かを投げた人が見えた。手榴弾の類(たぐい)なのだろうか、意外に強い筋力で鏡八の近くまで行き――爆発した！！
　煙が巻き上がり、皆が固唾(かたず)を飲んで見守る気配が闘技場を包む。
そして、煙が晴れ――
「無駄なことをする……。いくらやっても時間の無駄だ」
　鏡八はうんざりとした表情で腰掛けたままだ。傷一つ付いてないように思える。
「成る程、戦う権利欲しさに戦わせる。自身を賭けにするか……思い切りがいいな」
　どうやって身を守ったのかは不明だが、無傷なのを見てしまえば

攻撃に意味はないように思える。
しかし、これでは鏡八を殺したいと願ったら戦って勝ち抜くしかないのだ。面白いことになりそうだと思いつつ、会場を後にする。
「開催は三日後だ。存分に備えたまえ」
後ろから小さくなった鏡八の声が聞こえてくる。闘技場には、ただ憎悪と殺意が渦巻いていた。

一日目

闘技場のルールは分かりやすいが、その分抑制も少なくリスキーな戦いを予想させるものであった。

一つ目、勝敗は降参を認めさせるか殺せば勝ち。確かに……非常に分かりやすいのだが、言ってることは一歩間違えば死んでしまうということだ。生死問わずなのは鏡八らしい考えだ。

二つ目、一パーティー五名までの団体戦にするというもの。俺はリンを無理矢理説き伏せるような形で参加を取り付けた。よって二人で戦闘することなるが、苦戦することは予想される。一人で戦闘をするよりは幾分マシなのかもしれないが。

三つ目、試合前の妨害、その他行為を認めるというもの。その他と曖昧な表現になっているが、多くのプレイヤーが戦闘不能状態に追い込むことも可だと捉えている。詰まり、試合前に相手を潰す事が実質可能になってしまっているのだ。

それらが主だったルールの内容で、発表されたのが一日目。ギスギスした街の雰囲気を、三日間も過ごさねばならないというのは精神的に辛いものがある。リンはそうでもないみたいではあるけれど。

「俺には無理だって、あんな雰囲気……」

そういうことなので、俺は誰もいなさそうな街の少し外れたところにある森に来ていた。綺麗に透き通る川が流れ、魚もいるのではないだろうか。日が当たらない木陰に横たわり、何を見るでもなく空を見上げる。眠るには最高の気温のはずなのだが、眠気は襲ってこない。元々のんびりするのは好きな方だが、昼寝はあまり好きな方ではないのだ。

仕方なく、過去を少しだけ振り返ってみる。このゲームに参加した日、そしてリンとの出会いなど懐かしいことばかりだ。まだ、数年しか経っていないはずだがひどく遠くに感じる。それらも、最早過去のことになってしまったということなのだろうか？

「……ん？」
思考を中断する。近くで人の気配がした気がしたのだが、何もいないのだ。戦いを控えた前だから、気を張りすぎているのだろうか？
目を閉じて耳を澄ませば、遠くから足音が近付いてきているのが分かる。歩幅が大きくないのか、急いで歩いているのか土を踏む感覚は短い。先程感じた気配はこいつなのだろうか？
しかし、距離が離れているようでどこか遠くから聞こえる。
「あれぇ、こんなとこに人がいる～。殺しちゃおうか、くくく」
「！？」
いきなりの声に、慌てて飛び起きる。つい先程まで誰もいなかったはずなのに、湧き出るようにすぐ近くに人がいたのだ。
暗闇を思わせる髪に、思考が読み取れず光を全く反射しない黒色の瞳。黒いローブのようなものを羽織（はお）り、全体的に暗いイメージで奇妙な雰囲気を持つ少女だった。俺よりも少し年下で、十四歳くらいだろう。喜悦を湛（たた）えた表情だが、どこか歪みを含んでいるのが見て取れる。一言で言うなら――
「壊れてるやがる」
「あれぇ、壊れてるなんて言った？　失礼だなぁ」
表情は笑ったままだが、あれは典型的な精神的に壊れた者のいい例だ。心を壊すほどのショックを受けたか、人を殺すのが楽しくて止（や）められなくなってしまった者に傾向がある。或いは、両方なのか……。
厄介なことに、この手の相手は異常に強い。精神を壊しているため痛みを恐れないし、何より強さを正確に測るのが難しい。表情に意味がないせいだ。人間、目を見るだけで相手の考えていることが分かるというのは有名な話だが、この少女のように終始笑顔では思考が読み取れない。
戦うのはかなりマズイ気がした。いや、気なんてものではない。プレイヤーが感じる危険は、決して気などと曖昧（あいまい）なもので済ましていいものではない。死ぬ可能性は限りなく高い。

理解しているからこそ、少しずつ後退する。
「……」
「あれぇ、どこ行くのかな～？　逃がさないよ、死んでね」
どうやら、見逃す気は更々（さらさら）ないようで楽しそうに懐を探り始める。何を出すのか見極めて、初撃を防ぐなり避けてから逃げる決意をする。無防備な背中を晒（さらし）すほど、俺も間抜けではないということだ。
「ふふふ……」
楽しそうに取り出したのは、実用性を損なわない程度に装飾された短剣だった。少々使い込まれている感があるが、特徴も装飾以外これといったものがなく切れ味が良すぎることもなさそうだ。それを手で弄（もてあそ）び、唐突に投げてきた。
「ちっ！」
これだから壊れてる奴は嫌だ。事前動作も雰囲気もなく、何の脈絡も無く行動する。攻撃が来るのが認識出来ず、対応がほんの僅かに遅れてしまうのだ。
しかし、速さ自体はそれ程のものでもない。横に避けるだけで、楽に避けれるはず――

ザクッ！！

「――えっ？」
俺は呆然として、ついそんな呟（つぶや）きを漏らしつつ左肩を見る。確かに避けたはずなのだが、何時の間にか先程の短剣が肩に深く刺さっていた。間違いなく短剣は俺の横を通り過ぎ、後方に飛んでいったはずなのに……納得は出来ないが、現状の理解と共に痛みを発し始める。冷たい鉄の温度と熱い鈍痛が神経を逆撫でる。
「くそっ！！」
能力を使用したように思えるが、幾つか候補を頭の中で思い浮かべるが断定は出来ない。

しかし、それについて思考するのは無意味だ。根拠が足りないし、何より対処が出来なければ分かったところで意味が無い。
「ふふ……」
何の前触れも無く、大きな岩が頭上から降ってくる！！
「ちょ――」
横に転がるようにギリギリ回避するが、その先にも降り注ぐ！！
それを避けるが、その先にも――！！

「はぁ……はぁ……」
何十回にも及ぶ攻撃を繰り返して飽きたのか、少女は攻撃を止めた。しかし、何を考えているのかその思考は全く読み取れない。
「飽きちゃた、バイバイ」
「くそ、やっぱり転移（ワープ）系の能力だったか！！」
今更推論が当たったことを気付いても手遅れだった。何故なら、俺は地上百メートルくらいの空中に放り出されていた。人間、残念なことに空を飛べるようには設計されてはいない。
「あぁ、困ったな……どうしよう？」
急速に落下していく中、俺は逆に冷静に思考していた。恐怖のせいで、脳が正常に作用しないのだろうか？
もう地面はすぐそこまで迫っている！！
「いや、でも洒落（しゃれ）に――！？」
「――止まれ」
不思議なことに、俺は空中で止まっていた。たった、一言の言葉で指一本動かすことすら出来ず目を見開く。
「誰……？」
少女が草むらから出てきた少年に問いかける。先程までの笑顔と

は打って変わって、冷静に思考しているように見える。首も動かず、碌(ろく)に視点をずらす事すら出来ないため横目で少年を見る。
「馬鹿な……何故ここに……」
黒目黒髪の少年、無表情でその瞳は俺たちを全く認識してないと言わんばかりの無関心。痩躯(そうく)で、およそ旅には向かない軽装。間違いなく、資料で見た通り創造神であるイチヤマ！！
少女とイチヤマは視線を交わしつつ、その場を動かない。そして、三分ほど睨み合ったあと――
「飽きた……」
少女は一言(つぶや)呟くと、そのまま虚空に溶けるように姿を消した。
「がふっ！！」
すると、硬直していた体は動き出し地面に激突した。落下していた途中だったので、頭からぶつかった。百メートルくらいの高さから落ちるよりはまだいいのかもしれないが、頭からぶつかったのは痛かった。
「えっと……ありがとう」
取り敢(あ)えず、感謝の言葉を述べてみる。イチヤマは黙ったまま俺を見てくる。そこに何かを探すかのように。
「……どういたしまして。だが、まだまだだな。あんな小物にも勝てないとは」
イチヤマは永遠にも思えた無言を止め、ほんの少し口の端を歪ませつつ言葉を紡いだ。いきなり本当のことを突きつけられたが、事実手も足も出なかった現状では言い返せない。まぁ、本気なら手くらいは出せたかもしれないが……。
「まぁいい、もっと強くなって俺を楽しませろ。お前は面白いやつになりそうだ」
終始無表情だったイチヤマが今だけは笑っていた。しかし、それは友好的なものではなく獰猛(どうもう)な笑み、狩りの獲物に対するような肉食獣の目。強くなりすぎた故に、対等に戦うものすらいない場所で彼はきっと待っているのだろう。自分と同等の力をつけた者と戦う

日を。
そして、彼も唐突に消えた。
「……そんなこと言われても困るんだが。なにせ、俺残念ながらプレイヤーの中じゃ中の下行きゃいい方だし」
俺の本音と弱音を混ぜた吐露は静かに森に消えた。

二日目（前書き）

お待たせいたしました（誰も待ってないと思うけど）。
ガーベラさんが『更新してよ～』と言ってきたものですから、今日は久しぶりに投稿したいと思います。

二日目

昨日の反省を生かして――というわけでもないのだが、今日は街の中で過ごすことにした。ギスギスした空気は相変わらずだが、昨日どうやら先手必勝とばかりに奇襲をしたところを返り討ちにあった事件が起こったらしく、皆相手を見定める内は潰しにかかるのを自重しているようだ。

詰まりは、潰すこと自体は諦めていないのだろう。しかし、今日しか猶予もないわけで何事もないのを祈るだけだ。

「うわぁ……こりゃ悲惨だな」

その事件が起きたという場所を訪れたのだが、裏道の一区画が完全に溶けていた。返り討ちになった者は死んでしまったと聞いたが無理もない。チョコレートでも溶かすかのように壁はどろりと垂れ、近くにあったものは元の形を判別するのも不可能なほどの燃え滓になっている。人間が耐えれる程の火力ではない。だが、襲われた人物が火を操る能力であることは間違いなさそうだ。

背後を窺えば、人がちらほら見てとれる。人気の少ない時間を狙って来てみたのだが、やはりいるものだ。長居すれば俺も襲われかねない場所だ。早目に切り上げるのが賢明だろう。

「……いや、もう遅かったか」

背後は見ないが、複数足音が聞こえてくる。出来る限り音を消しているようだが、ほんの少し擦れる音がする。意識しなければ軽いゴミが地面を擦るようにも聞こえるが、人間らしい音の間隔がそれを否定している。

非常にマズイ事態である。戦闘になったら複数人相手に余裕で勝てる程俺は強くない。ぶっちゃけ、殺される可能性も有り得る。

「3……2……1……行くか」

振り向かずに前へひたすら走る。相手が人ではないという可能性に一縷の望みを賭けてみるが、その思いも虚しく後方から舌打ちと

走り出す音が聞こえる。因みに、数を数えたのはやる気の無い体に発破を掛けるためのもので深い意味は無い。
「ちっ……逃がすと面倒だ。殺すぞ」
リーダー格なのか一人の男の声が押し殺すように言葉を発した。それに同意するように、頷く気配が二つ。都合、三人に追われていることになるのだろう。男が本当に殺気を放つことに驚いたものの、俺としては面倒にしか思えなかった。
「あ～ぁ、イッチーのように楽に倒せりゃ苦労せんのだがなぁ……」
愚痴りつつも速度は落ちない。まぁ、落としたら殺されるわけで落とせないんだが……。
いくつ角を曲がっただろうか、突如視界が開けた場所に出て日の眩しさに思わず目を細める。振り返れば、陰で薄暗い裏通りから男が三人ほど曲がってくるのが見えた。表立って行動する可能性は低そうだが、念のため出店に紛(まぎ)れて身を隠そうと適当な店に入る。
「ラーメン？」
実に適当な選択だった。しかし、店内は見渡し難い構造になっていて、逆に良かったかもしれないと思い直しカウンターに腰掛ける。メニューを見れば、普通のものから創作料理に至るまでの色んな料理が載っている。それも、ラーメンに限らずハンバーグなどの洋食から和食に中華などの多岐にわたる。
「凄いな、これは……」
思わず感嘆の言葉を漏らしてしまう。メニューの内容も見てて凄いが、それ以上に厨房の方を見てみるが一人しか居ないのだ。詰まり、たった一人で全ての注文を捌(さば)いているのだろう。というか、もしかしたらここはラーメン屋ではないのかもしれない。厨房でラーメンを煮ていたからそうだと思ったが、客を見れば色んなものを注文している。
一体どんな奴が料理しているのかと気になったが、ここからでは背後にあたるので色素の薄い茶色の髪を肩口辺りまで伸ばしている少年であることくらいしか分からない。

「おぉ、来てたんだな。ここの飯は美味いぞ」
「鏡……Kか。お前と外食なんて久しぶりだな」
声を掛けられ振り向けば、そこにはフードを目深に被り手袋をして全身覆うような鏡八の姿があった。流石に、人前で鏡八と呼ぶ訳にもいかないのでKと呼んだ。隣の椅子を引いて座りつつ、とんこつラーメン二つなどと俺の分まで勝手に注文し始めた。
「何時も思うが暑そうな格好だな」
「仕方ないだろ、これでも着なきゃ出歩けねえし。てか、あれはお前の連れか？」
どれが？　と思いつつ、指差された方向を見ると静かに殺気を含んでいる男の姿があった。ローブで顔を隠しているが、隠し切れない口元には髭（ひげ）と獰猛な笑みが浮かんでいる。
「来い」
俺の腕を掴み、立たせようとする。抗うより、途中何らかの方法で切り抜けるほうがいいだろう。店なら襲ってこないと思ったが、甘かったようだ。
「ラーメン一丁あがり」
席に茹でたての食欲をそそるラーメンを置きつつ、立とうとした俺を抑えて男の前に少年が立つ。鏡八は美味そうに食べるばかりで興味はないようだ。戦うことを肯定している節のある鏡八が、何も言わないのは珍しい。
「邪魔だ、ガキ」
「あん？　そりゃ俺に言ったのか、ザコ」
少年は口悪く言い放つ。こんな小物に絶対に負けるわけがないという傲岸不遜な雰囲気が少年から発せられていたが、それに気付いてか気付かぬか男は視線を少年へと移した。
「死ね」
バンッ！！　と、銃声が店内に鳴り響く。店内が静まり返り、何事かと皆振り向く中で発するのは鏡八が汁を啜（すす）る音だけ。少年は微動だにしない。

男の手に握られていたのは黒光りする拳銃だ。このゲームで銃を使うものは少なくない。いや、多いとすら言えるだろう。能力にも頼らず剣すら握らず自分の手を汚さず殺せる、比較的安全圏内からの攻撃が可能といった要素が大きいためだ。
「御馳走さん。まぁ、なんだ。ご愁傷さん？」
「何を言ってやがる。フード野郎」
鏡八の言葉に訝しむのも無理は無いだろう。一メートルと離れていない距離から放たれた銃弾が外れることなど有り得ない。命中したはずだ。
「死にたくなかったら、早めに切り上げた方がいいんじゃないか？
まぁ、俺には関係ないがな」
「どういう――」
男が言い終わるよりも早く、後頭部を掴む手があった。今まで目の前にいたはずの少年が欠伸を噛み殺しつつ、今にも握り潰さんばかりに力んでいる。男の目は本気で命の危険を感じていて、口からは今にも絶叫が迸りそうなのだが、抑えられた力が強すぎて口をほとんど開けられないでいる。
「や、め――」
ぐちゃり、とトマトでも潰すかのように呆気なく頭を割られた。ゆっくり崩れ落ちる向こうで、少年は嗤っていた。返り血を浴びたその表情には、侮蔑さえ浮かんでいる。
それを見た客たちと男の連れ――そういや、こいつらもいたな――は我先にと出ていく。店内に残されたのは俺と鏡八と少年だけだった。
「ラーメンは美味しいかい？」
「……取り敢えず、美味しそうだったとは言っておく」
ラーメンには飛び散った血や脳の一部が浮かんでいる。湯気が立ち昇る器には到底口を付ける気にはならなかった。
「ふむ、また作り直さないとね」
面倒だと言外に呟きつつ、軽くフィンガースナップをする。それ

だけで男の体からは炎が吹き出し、あっと言う間に焼き尽くしてしまう。ほんの二、三秒の間に人を塵(ちり)一つ残さず燃やすなんてどれほどの火力が必要なのだろう？

「ユージ君、俺もお替わり」

「えっ！？　あれがユージなのか！！」

驚いた。画像で見ていた容姿と似ている気がしてはいたが、まさかこんな所で料理なんて作っているとは思いもしなかった。ゲーム内最強候補が悠長に今ラーメン煮てんだぜ？

「それよりも、さっきの攻撃当たってなかったのか？」

「あぁ、銃弾か。筋肉で防いだか、避けたんじゃねえの？」

んな、無茶な……銃弾が効かない筋肉って、どんだけ硬けりゃいいのさ。回避したと信じたいが、したとしても速過ぎるしどっちも人間技じゃねえ。

「はい、とんこつラーメン。お待たせ」

柔和な笑顔で置いたユージを真正面から見る。黒目に色素の薄い茶髪に近い黒髪、先程とは違い優しそうな面持ちで口調も優しい。とても男に向けた言葉が信じられないくらいの変わりようだ。

「鏡八、ユージ君は二重人格か？」

「似たもんかな。戦闘中は口が悪い、それ以外は温厚な性格だ」

先程は驚きのあまり呼び捨てにしてしまったが、落ち着いた今呼び捨てにする気は湧かなかった。鏡八の語る言葉は少なかったが、昔からの交流があるのか口元は楽しげに笑ってる。何時もの歪んだ嗤いではなく、本当の笑顔で。

それを横目に見ながらラーメンを啜(すす)るが、とても美味しかった。今まで食べた中で一番美味しかったかも、と思えるほどの味だった。

「そう言えば鏡八、君自身を賭けにした理由は何なんだい？」

食器を洗いつつ、ユージは尋ねる。そこは俺としても気になっていたことだ。わざわざ自分を賭けなくたって、業物(わざもの)の武器にするもよし、能力をくれてやるもよし。ただ鏡八への殺意と憎悪で周りが見えなくなっている者が多過ぎるだけで、冷静に客観視すれば誰だ

っておかしいと気付くはずなのだ。
「暇潰しだ。それと、今殺されると困るのでね」
成る程、と頷いてユージは食器を置く。しかし、言っていることが俺には意味が分からなかった。殺されると困る？　それなら、自身を賭けにするのは矛盾している。
「さてと、そろそろ店仕舞(みせじま)いかな。明日は戦わないといけないしね」
「ご馳走さん。ということは、タツキも出張ってくるのか。はぁ……一(ひと)チームくらいにして欲しいものだ。なにせ、あいつんとこの勢力は三万人近いからな」
「大丈夫、明日は僕とタツキくらいしか出ないよ。カズヤ、君も明日は出るのかい？」
「あぁ、出るよ。流石にユージ君、君には勝てそうにないな」
奇妙な違和感を感じつつも、席を立ち外に向かう。再び人が賑(にぎ)わう喧騒に目をしかめつつ、明日は戦わないといけないのだから早目に宿に戻ろうと思いつつ足を早めた。

二日目（後書き）

※フィンガースナップ……指パッチンのこと

分からない方もいるかと思うので……（特にガーベラさん！）。

因みに、作者は知らんかった！！

三日目……の、ちょっとその前に

薄暗い藍色にも似た夜空に輝く三日月と星々が燦々（さんさん）と架かっている。心地よい静寂に聞こえるは、流れる水の音ばかり。辺りは温めの湯で満たされ、ゆらゆらと水面に写った月を揺らしている。風が頬を撫でるが、涼しい風は湿気を帯びて少し生ぬるい。

「ふぅ……やっぱり温泉は気持ちいいぜ」

「だな」

鏡八が言葉短に同意を示す。俺たちは露天温泉に浸かっているのだ。この宿の風呂はとても気持ちがいいのだ。サウナに電気風呂、露天風呂など、他にもたくさんの風呂を備えており、鏡八自身がゲームを少々弄ってこの宿を作ったために客は俺とリンと鏡八だけしかいない。

「ふぅ……しかし、明日か」

「なんだ、怖気付いたか？　別に、棄権するのもいいんだぜ？」

軽く嘲笑するように鏡八は笑いながら湯を掬い弄ぶ。挑発をされているように見えなくないが――いや、実際にしてるのだが――、本気で言ってるわけでもない。結局、こいつにとって俺の選択など何を選んでも構わないのだ。

「そういや、カズヤあれまだ使わないのか？」

「あれか？　当分使う気ないぞ」

「まったく、つまらん。……次は使うといいな」

俺が面白いから、と付け加えて立ち上がる。湯が傷だらけの体を滴り流れ落ちる。水も滴るいい男とは言うものだが、同じ男である以上吐き気しか催さんわ……。

そのまま他の風呂に向かうようで、露天風呂を出てどこかへと消えていく。

「へくしっ！！　うぅ、俺も上がるかな……風邪引きそうだし」

長く浸かるためなのか、温めだし湯が腹の少し上くらいまでの半

身浴なのだ。長く入り続けると風邪を引いてしまいそうになる。
立ち上がり、脱衣所に向けて足を進め――
「……何故ここに？」
「鏡八が酒持って行けって言ったのよ」
リンが酒を持ってそこにいたのだ。ちゃんとバスタオルは巻いてるけど、シミ一つ無い体は目のやり場に困る。美術品のような均整のとれた体つき、女性らしい丸みを帯びたシルエット。ふくよかな胸に細い腰周り、そして普段はポニーテールにしている長い髪を下ろしている。
この宿の風呂は男女混浴なんだよな。いくら俺とリンと鏡八しかいないし、男女分けるの面倒だからって省(はぶ)いていい手間ではなかろうに。
「なんか、別人みたいだな」
「どういう意味よ」
軽く睨(にら)むようにじっとこちらを見つめてくる。しかし、髪を下ろすだけでも印象はがらっと変わるものだ。元々美人だが、髪を下ろしたのも大人っぽい色香があっていいものだな。
折角持ってきてもらったものだ。酒を受け取り、もう一度湯に浸かり直す。
「綺麗な夜ね」
俺は何も言わずに杯を少し傾ける。確かに、月も綺麗だし星も夜空に散りばめられた宝石の輝きのようだ。しかしながら、リンの美しさもまるで引けを取らない。
「カズヤ、私と会った時のこと憶(おぼ)えてる？」
「あー……憶えてる」
「あの約束も？」
リンはこちらを見ず、膝を抱えぽつりと言った。俺とリンが初めて交わした約束――それは、今も尚(なお)リンの心の中にあるだろう。
俺は何も答えず、ただ杯を傾け遠い過去に思いを馳(は)せる。

リンと初めて会ったのは、ゲームに来てから三日目のことだった。歩き出した何も無い草原を、ただひたすらに歩き続けた。動物どころか、モンスターもいない草原――それは俺が生きていられた奇跡だが、引き換えに食料もない生活を強いた。草は毒素を含んでいるのか、食べてみたが一日目は酷いことになった。

誰も居ない、食料も無い。件の虐めが尾を引き、生への執着が薄い俺にはそれ以上動く気力がどうしても湧かなかった。どうせ俺という存在がなくなったところで、世界には何も影響しない。鏡八との出会いで幾分か薄れていた思考が、俺の気力を根こそぎ奪いつくした瞬間だった。

「……死ぬのか？」

倒れこんだ瞳に写る空はどこまでも蒼く、山々は悠然としていて美しかった。芸術を愛でる心でもあればその景観に感動したであろうが、自己の存在にすら興味の薄い俺には何も感じなかった。そして、己がどのようなことになるのかすらどうでもよかった。

ゆっくりと目を閉じて、意識が闇に刈り取られていくように深く眠った。

次に目が覚めたのは、温かさに満ち溢れた部屋だった。知らない部屋だが、どこか安心感のある部屋で、調度品が控えめに置かれた部屋は清潔感がある。

「どこだ……ここ？」

心中に去来する虚無感を感じつつ虚ろに呟く。それは声になったのか、それとも口の中で途絶えてしまったか分からなかった。
上体を起こし、周りを見渡すが誰もいない。家主はどこぞへ消えたか知る由もないが、きっと遠くには行ってない気がした。ベッドを降り、空腹を少し感じたが無視しそのまま外へ。
そこに広がるのは気を失う前と変わらぬ空と、見果てぬ草原だけ。
「どうして……」
違うのは、今が夜であることと一人の少女が泣いていたことだ。呟きは少女の口から漏れたものだった。俺には気付いてないらしく、視線は地に落とされたままだ。翡翠色の瞳は涙に濡れ、緑色の長いポニーテールの先端が地面に付くのも気にせず座っていた。これが俺とリンとの出会いだった。
「何故、泣いてるんだ？」
少女ははっとしたように涙を拭い顔を上げた。とても美しい少女だと思ったのは今でも覚えている。整ったような顔立ち、線の細い体も精緻な作り物のようだ。しかし、そんなことを抜きにしても泣いている涙がとても純粋で綺麗だった。
「良かった、気が付いたの――」
「そんなことより、何故泣いてるんだ？」
とても失礼な態度だったと今でも思う。他人である俺の心配をしてくれているというのに、俺は礼もなく問いただそうとしているのだ。何故か分からないが、聞いておかないといけないと思ったのだ。
しかし、少女はそんな俺の態度を許してくれた。
「……少し前のことなんだけどね、妹が攫われてしまったの――」
少女は時々悲しみに瞳を揺らし、泣き、嗚咽を漏らしながらも語ってくれた。とても長い時間を掛けてゆっくりと全てを。終わる頃には夜も明け、空が白み始めた頃だった。
要約すると、妹というのは義妹なのだそうだ。長い間この草原で二人で暮らしていたが、妹は何者かに追われていたらしい。そして何者かが現れ、妹を連れ去ろうとしたそうだ。少女は妹を守るため、

刀を手に戦ったらしい。技量では決して劣ることはなく、とはいえ勝負は互角だったらしい。しかし、その何者かは奇妙な道具を用いてこの世界から姿を消したらしい。
妹はその時に攫われた。しかし、プレイヤーではないリンには世界を移動する権利がない。
「そうか……だが世界を越えればいいんだろう？」
「無理よ、私は世界を移動する権利がないもの」
その時の俺には世界を越えるという意味を理解していなかった。プレイヤーにしか越えることが出来ないことなど知らない。それに、自らの存在に興味がない俺には他人に気遣う意思など生まれるはずがない。
だが――
「行こう、世界を越える方法は必ず見つける。ここにいても何も変わらない」
「どうして……私の為にそこまでしようとあなたは言うの？」
少女の言っていることは正しい。見ず知らずの他人の言うことを信用するのは難しい。俺はここで断られるなら、それはそれでいいくらいにしか思っていなかった。
しかし、おかしな話だ。自己に興味の薄い俺が、わざわざ他者の願いを叶えようとしたのだから。そう思い、記憶を探り答えを探してみる。
「多分……俺の親友が言ってたからだ。美少女のお願いは聞くものだとさ」
「ふふ、面白い親友さんね」
「笑わせる為に言ったわけではないのだが」
首を傾げると、また少女は笑った。しかし、言ったとおり親友が言った通りに動いただけだ。何故か、親友の姿は思い浮かばなかったが。今思えば、自我の薄くなっていた頃の他者の言葉がこれ程までに強かったというのは恐ろしいことだ。
「そうね、連れてってくれる？」

「ああ……しかし、非常に困ったことがあるんだ」
「どうしたの？」
「腹が減った。出来れば、何か食べさせて欲しい」
くすっと笑ってリンは笑ってくれた。思えば、あれが初めての笑顔だった。

夜風は少しずつ涼しさを増して頬を撫でる。湯けむりが視界を薄く遮り、水の流れる音ばかりが耳に付く。
「時々思うの。まだ生きているのかな、って」
誰とは言わないが、二人とも攫われた妹のことだと分かっている。リンの言いたいことは分かる。不安、焦燥、願望、色々な感情が過ぎっては消えていく。そんな不安定な心情なんだろう。
残念ながら、未だに妹は見つかっていない。生きているのかすら確かめられていないのが現状だ。
「生きてるよ」
「どうして、そんなことが言えるの……。私たちには確かめる手段はないわ」
リンの顔は今にも泣きそうな程に歪んでいる。どうしてそう思ったのかは分からないが、それを見ているのが俺はとても辛かった。
「大丈夫、生きてる。俺は確約できないことは言わない」
そう、と言ってリンは少しだけ安堵の涙を流した。

闘技場にて（前書き）

また期間を置いてしまいました。
お待ちの方、面目ない。
今回は夏休みの宿題に終われていたとか、その他多数の事情により遅れました。
もうそろそろ、更新しないと流石にヤバイんで。

闘技場にて

三日目の闘技場は開幕から死人が出るという過酷なものであった。このゲームで人を殺すことを躊躇わない人は多い。誰にも罰せられることもない。寧ろ鏡八が初めてプレイヤーたちの前に現れ言った言葉、『君達が誰を殺し、欺き、生かすかは自由だ』という言葉がそれを肯定しているようにも思える。

だが、それを差し引いても最初の試合は酷かった。

「さて、一回戦目だが――」

闘技場に集結した人々が、鏡八の言葉を一言たりとも聞き逃すことのないように静寂を保っている。皆戦意を高め、十分な準備を行いこの日に臨んでいるのだ。そして、今まさに一回戦目の戦いが選ばれるのだ。

「こいつらの試合だ」

鏡八は、ぞんざいに言う。すると、闘技場の壁面や自分の席の前など多数の場所にモニターが出現した。それには一回戦目の出場者が出ている。かなり多く、一万人は下らないのではないかという程の名前が黄色で列挙してある。多すぎて自分の名前があるか探すのが一苦労だが、見たところ俺の名前はなかった。

それを見ていると、次々と席を後にしていく者たちがいた。多分、リストアップされた者たちなのだろう。入口の近くにあったどこへ続いているかも分からぬ階段を下っていく。それ以上先はここからでは見えないが、戦いに赴くのだろう。

「この闘技場は全員で戦うには狭すぎる。一組みだけここで戦って

もらおう。なに、流れ弾に当たるような柔（やわ）な作りはしていないから安心したまえ。まぁ、他の選抜者たちには別の場所で戦ってもらうがな」

どうやら一組みだけこの闘技場で戦わせ、他の一回戦目で呼ばれた者たちは地下かどこかで戦わせるのだろう。確かに、この人数を戦わせていたら時間がいくつあっても足りるものではないだろう。

「最初からこれでは面白みに欠けるな」

一回戦目の試合を見て興味を失せたかのように頬杖を付く。今にも溜め息をつかんばかりに呆れた様子だ。その様子を見るに自分で決めたものではなく、ランダムに決めたものなのだろう。

鏡八が興味を失せる試合が気になる。多分闘技場で戦う者たちのはずだが――。

「なるほど、こりゃ失せるかもな。だが、俺にとっては初めて生で見れるいい機会だ」

自分でも分かるくらいに、口元に笑みが浮かぶ。鏡八が興味を失せるのも無理はないかもしれない。モニターにはイッチー――本名はイチヤマのはずだが、何故かイッチーと書かれていた――ともう一つ対戦者の名前が書かれている。

顔を上げると、何時の間にか闘技場にはイッチーと何時ぞやの少女がいた。二人の間には敵意も殺意も戦意すらほとんど無かった。

「また合ったね、お兄ちゃん。今日は死んでね」

壊れた表情で笑みを浮かべる少女は二日前と同じ黒い格好をしており、表情は常に笑み以外を浮かべない。それに対してイッチーは無表情で構えもなく気負いもない。努めて平常心を保っているのではなく、心を揺るがすものがないのだ。

「お前に俺が殺せるか？」
イッチーの問いは当然とも言えるものだった。神格を得、思考を現実に引き起こすことすら難しくない彼を殺せるわけがない。しかし、彼の言ったことは問いではなく、さりとて見下しているわけでもない。俺にはそれが願望や希望に聞こえた。
少女はその問いに答えず、懐から短剣を取り出した。そして、それを淡々と投げる。
「……」
イッチーは微動だにせず、一瞥（いちべつ）をくれる。ただそれだけで、短剣は砂で作られていたかのように塵に変わった。少女はそれを見て驚きをほんの少し表情に過（よ）ぎらせるが、未だにその表情は笑みのままだ。
「じゃあ、これは？」
「心臓……が」
一見しても何が起きているか分からない。だが、少女の手の中には一つのものがあった。人間にはなくてはならないもの、心臓。無論それが少女のものではなく、イッチーのものであろうことは容易に想像できる。しかし、青ざめた顔色をするイッチーからは焦燥も危機感も窺（うかが）えない。
「バイバイ、これなら死ねるよね」
そのまま手を振りながら能力を発動させ、一瞬のうちにイッチーを空中に放る。そのまま重力に従い、イッチーの体は地面に叩きつけられた。体は骨という骨が折れ、いたるところが曲がり、脳も幾分かはみ出していた。遠目に見ても死んでいるようにしか見えない。
「ふふ、ばいばいお兄ちゃん」
そのまま少女は去ろうとして、後ろを向き歩を進める。百人が百人ともイッチーは死んでいる、と言うだろうから仕方がない。
「どこまで出来るかと思って全て受けてやったが……。やはり、この程度か」
「えっ――？」

ぴくりと少女は足を止めるのも、無理はないだろう。イッチーは脳が半ば飛び出しているのだ。生きているのかすら怪しいというのに、意識がはっきりとあり喋っているのだ。

「ああ、痛かった。久しぶりに痛覚を刺激されたぜ」

喋っている間にも体は治り始め、立ち上がる頃には傷一つ残っていなかった。何事もなかったかのように平然としているが、会場は静まり返っている。死んだと思っていたのが生き返ったのだから、仕方がないだろう。というか、お前はゾンビか……。

「どう、して……」

初めて少女の顔に笑み以外の色が映る。恐怖と言う名の色が。

「次はお前が死ね」

イッチーが空を見上げ、それに釣られるように皆が空を見上げる。俺も見てみるが、そこにはどこまでも青い空が広がっているだけだ。何も――

「ん？　あれは……」

黒い点のようなものがこちらに向かって落ちてきている。まさかと思い、闘技場を見回すが少女の姿はどこにもない。

「お前の能力では転移出来る距離は精々（せいぜい）百メートル程度。十倍で返してやろう」

イッチーはもう戦いは終わったとでも言うかのように、そのまま出口に向かって歩き始める。黒い染みのような物体は、もう人の形だと理解できるまでに迫っている。

「どうして！？　なんで能力（ちから）が使えないの！？　いや、死にたくない！！　死にたくない――」

「無駄だ、お前の能力（ちから）は使えない。後は死にゆくだけだ」

儚さを謳うように、その声は小さく風に流れるように消える。

――ぐちゃ！！

俺は思わず目を瞑（つぶ）ってしまった。いや、そんなことをしても少女

の死に際の恐怖の形相が数日は脳裏を離れないだろう。迫り来る死に対して抗うことも許されず、理不尽な死を受け入れられない表情。ゲームに参加して以来、幾度となく見てきた悲劇。
対してイッチーの横顔に映るのは勝利への歓喜でも、敗者への蔑(さげす)みでもない。物足りなさと諦観にも似た感情。
「つまらん……。やはり、俺と戦える奴なんてそういないか」
呟きを一つ溜め息に混ぜ会場を去る。
会場は出だしからの死人が出たことに、驚きと静寂に支配されていた。そして、一人二人と続けて続々と悲鳴を上げて会場を飛び出していく姿が見て取れる。命が大切なら逃げるのも手の一つと言えるのだろう。

「同感だな。退屈な……余興にもならん」
一回戦目の試合が終わり鏡八は見えすぎていた結果に呆れ、眠たそうにしている。普通目の前で人が死んでいるというのに、眠くなる程の平常心があるっていうのは恐ろしいことだ。イッチーも試合中、心を揺らすことなかったが鏡八も大概だ。俺はやはりそこまでの傑物にはなれんよ――いや、傑物でいいのか？――。
モニターを見てみれば、他の対戦者たちも次々と決着が着いている。負けたのであろう人たちの名前は灰色で表示されている。そう掛からないうちに全て終わるだろう。
「さあ、次の対戦者は誰だ？」
最後の名前が灰色になったところで鏡八は次を視線で促した。モニターの画面に映っている名前が一度消え、新たに名前が幾つも出てくる。これらは全て、二回戦目の選手なのだろう。
「また、俺の名前はなしか……」

会場には逃げ出した者もいるが、それでもまだたくさんの人間がいる。これだけの試合を全て消化するのは時間がかかる。これだけの数を本当にやっていたら、本当に何時まで時間があっても足りない。俺の番が回ってこないというのも頷けるだろう。

「次はタツキたちか。面白みがねえし、ちょっと弄(いじ)るか」

鏡八が椅子の傍に置いてあった機械を操作する。すると、画面が変更されタツキ対出ていた全員の名前になっている。

「今回は一つのチームを潰せば、全員勝ったことにしてやる。まぁ、勝てればだがな」

ククッ、と笑いを漏らしながら鏡八は選抜者を促す。選ばれたものたちは、一チームを潰せばいいだけだと歓喜していた。しかし、一部のものたちはそれを訝(いぶか)しむことのできる者たちだった。そのことに気付いた者たちのなかには、一チームを潰すだけという状況を怪しく思えるのを理由に棄権するものもいた。

しかし、それもほんの一部だけだった。理屈的に考えて一チームを潰すだけなのだから、無理からぬことである。

「ユージ君が強いってのは知ってるけど、流石にこれだけの数を相手に出来るのか？」

先程は二人しかいなかったため広く感じたが、今は第二回戦で選ばれた全てのプレイヤーと仲間が集っていてひどく狭く感じる。その真ん中にはユージ君と映像で見たタツキの姿がある。そして、それを二メートルくらい離れた形で取り囲んでいる。

「よし、ユージ君行くぞ！」

「ああん？　誰に言ってんだ、殺せばいいだけだろうが！！」

戦闘状態に移行したユージ君の口は悪くなっていたが、片手剣を

一振り傲岸不遜に笑う。この数を相手にしても負ける気は一切ないようで、萎縮しないというのは凄いことだろう。
「さてと何が出るかな～」
タツキは背後をユージ君に預け、上着をゴソゴソと漁っている。そこから、出てきたものは――
「対物ライフル……」
「何でそんなもんが、出てくるんだよ……！？」
誰かが逃げろ、と叫んだ。しかし、皆が動き出す前に虚しくも銃声が鳴り響き何人かの体が宙に舞った。俺は銃にあまり詳しくないため無駄にでかいライフルだな、くらいにしか思わなかった。しかし、問題はあの上着のどこにそんなものが入っていたのかである。
「さてと、次は何かな～」
しかも、今尚上着を漁っているのだ。何かの、能力付与でもされて異次元とでも繋がってるのか？　冗談抜きでそう考えてしまうし、あながちそれも外れではなかろう。そうこう、考えているうちにも次々とロケットランチャーやサブマシンガン、拳銃などといった銃器を取り出し撃ちまくっている。
「ヒャッハー、行くぜ！！　オラオラ、オラオラ！！」
使い捨てる気なのか、残弾の心配などせずに全てを費やすかの如く撃ち続けている。まさしく、阿鼻叫喚の様相を呈している。
「さて、こっちも行くかな」
ユージ君のゆっくりとした発言に似合わず、その体は視認するのがやっとの速さで敵目掛けて切り込んでいく。ときに火を用いるが、それも忘れていたかのように時々だ。やはり戦闘の主体は片手剣での斬撃なのだろう。
タツキにはユージのような人の限界を超えたような動きは出来ないが、尽きることのない弾幕で敵を圧倒する。ユージは反面、己の力だけで他者を圧倒する。その動きは対照的でありながらも、その本質は変わらない――強いということだけは。
「飽きた」

「えぇ！？　ちょっと待って、ね！？　ユージ君、戦闘中にそれは止めて！！」
ユージ君が一体何人程切り殺したくらいだろうか、いきなり攻撃の手をぴたりと止めてしまったのだ。お陰でタツキは全方位を囲まれる羽目になり、弾幕が薄くなり始めたところを突かれ始める。
「もう全員死ね」
ユージ君が一つフィンガースナップをする。たったそれだけの行為だというのに会場は火に包まれた。タツキとユージ君を除いて全ての敵が焼かれていく。観客席までは火は届かなかったが、凄い熱気を感じる。最前列辺りに陣取っていた人たちも我先にと後ろに下がってくる。
火が消えるのにそれほど時間は掛からなかった。しかし、その場は骨どころか剣も銃も何もかもが灰に還っていた。
「よし、これで終わり。タツキ帰るよ」
「死ぬかと思った……」
戦闘が終了したのを堺にユージ君の態度は変わっていた。しかし、タツキの方は幸い焼けなかったが近くで熱気をくらったため疲労困憊という状況だった。

「まぁ、そこそこ楽しめたか？」
鏡八の方は一回戦よりは幾分か楽しめたようで、満足気に頬杖を付いている。しかし、それでも物足りな気にモニターを弄り次の対戦者を選抜しているようだ。
俺も次の試合を調べてみるが――
「げっ……俺かよ」
遂に自分の番になったが、それはそれで緊張するものだ。いや、

ここで歓喜していれば人殺しを楽しんでいるという結果を得ることになるが。複雑な心境でモニターを見つめる。
「どうしたの、カズヤ。行くんでしょ？」
リンが何時の間にか隣に立っていた。一瞬驚いたものの、席を立ち上がり階段へ向かう。
中は光が届かず、壁に架かっている蝋燭（ろうそく）だけが頼りだった。少し埃（ほこり）っぽく乾燥した空気に覆われた道と、鋼鉄製の扉が延々と続いている。
「ここね」
リンは確認するように言う。扉の横には名前が書いてあり、一目で分かった。少し錆び付いた扉に手を掛け押し開く。
中は二十メートルくらいの正方形型で高さは三メートルくらいの部屋だった。鼻につく臭いに思わずコートの裾（すそ）で口元を覆う。見れば真新しい血だまりが出来ており、二、三人分くらいの量がある。一回戦と二回戦で使われた部屋なのだろう。
「リン、ここは俺がやる」
真向かいの扉からも人が入ってきた所だった。一人だが体中を鎧で覆っており、手には両刃直刀の剣が一振り抜かれている。装飾がされ、まるで聖剣とでも言わんばかりの輝く刀身。しかし、構える使い手ははっきり言って戦い慣れていない雰囲気だ。武器の性能に頼っていたか、ほとんど戦ったことがないかのように殺気が薄い。
俺も背から刀を抜くが、あちらの剣に比べて見劣りはするものの負ける気はしない。このゲームにおいて勝つことに関しては、――全てを否定する気はないが――武器の性能でも間合いでもない。経験則だが、殺意が深く関わってくるのは間違いないと思う。相手を傷付けること――敵意を突き詰めれば殺意になる。敵意があれば相手を傷付けることに躊躇はないからだ。
「さて、どれくらいのもんか試そうかね」
「ハアアアァ！！」
血で足元を掬われぬよう気を付けつつ、距離を詰めるべく走り出

す。相手も剣を上段から振り下ろしてくる。まずは近付くのが目的だと刀で払い――

「なっ――！？」

スパッとそのまま刀は両断されてしまった。しかし、相手の剣は勢いを緩めず振り下ろされている。

スライディングする要領で倒れつつ、折れた刀で剣の側面を思いっきり叩く。文字通り紙一重で頭の横の地面に剣が食い込む。横に転がりつつ立ち上がり、刀を見てみるが折れた訳ではなく切られていた。

「なんつー切れ味だ、まったく」

使い物にならなくなった刀を放り捨て、邪魔なコートを脱ぐ。もう一度真正面から走り込む。

「死ね！！」

突き出された剣を斜め前方に進むようにして回避する。そのまま勢いを殺さず、肩からタックル。

「ぐっ！！」

「そら、次行くぞ」

後ろに下がるまいと重心が前に出たのを横目で確認しつつ、足を払い突き出されたままの腕を持って一本背負いするが――

「重いぞ、クソが！！」

力任せに背中から地面にぶつけさせる。鎧のせいで持ち上げるのは辛かったが、下ろす分には鎧の重さも相まってしたたかに背中を打ちつけただろう。この程度で気を失ってくれればいいのだが、生憎と意識はまだあるようで手間のかかる。

先程折れた剣先を傷つくのを厭(いと)わず素手で掴み、鎧の合間の手首の筋肉を切る。

「ぐあぁぁ！！」

「さて、この剣は貰っといてやるよ」

腕の腱を斬り、握力がなくなったところで剣を奪いそのまま首を落とす。意外と呆気ないものだったが、掌からは血が滴り続けてい

る。括り付けられていた鞘を奪い、剣を納め背中にかける。あとはコートを着て、一旦落着か。
「傍目から見ると、とても危なっかしいわよカズヤ。それと窃盗よ、それ」
「ですか。まぁ、いいさ勝てれば。それと、折られたんだから弁償して貰ったと考えればいいのさ」
リンからの評価は芳(かんば)しくなかったが、一回戦目の戦闘は無事終了した。

二つの襲撃

十日程だろうか、未だ闘技場での果ての見えぬ戦いは続いていた。なにせ、圧倒的に時間が不足しているのだ。人数が多過ぎるのだから仕方がない。しかし、時間が過ぎるのに比例して死人の数が増えるのも事実だ。気の滅入ることで、闘技場から出来るだけ離れたいというプレイヤーの考えもよく聞く。自分の試合がないときは、闘技場にはほとんど人は寄り付かない。いるのは酔狂な奴か、単にイかれた奴らばかりだ。

「だからといって、主催者がここでラーメン啜(すす)ってていいのか？」

「問題なかろう。それに今日、明日にでも終わるだろうしな」

初日からの試合数は三回、運良く生き残れたがぞっとする試合もあった。三回目のときは特に血で足を滑らせ、その隙を狙われてしまうなどという簡単なミスをしてしまった。なんとか相手の手首を切り落とし命を繋いだが、久しぶりに死ぬかと思った。だが、生憎と三回ともに相手が一人、乃至(ないし)二人だったため大人数で囲まれることもなかった。

そして少し昼飯には遅い時間を狙い、ユージ君の店で鏡八と食事をしているという訳だ。だが、今日は珍しくフード付きのコートも手袋もしていない。店内は酒盛り騒ぎで静かに食事を楽しむ余裕はなかったが、どうやら俺と鏡八を除き全員タツキの仲間であるらしく気兼ねなくこの姿でいれるからだとか。少年に少女、大人、軍服を着たものなど色んな人間がいる。それだけ人望があるのか、或いは人を寄せ付ける魅力でもあるのか――いささか、外見からは判断しかねるが。

「でも、何で今日、明日なんだ？　まだたくさん残ってるぞ？」

「神のみぞ知るところってやつだな。まぁ、俺は神じゃないが」

冗談めかして言うが、実際このゲーム内では神にも等しいと言えるだろう。しかし、こいつも大変だ。ほぼ一日中座っていなければ

ならないのだ。プレイヤーはその姿を見て、殺意と闘志を燃やしそれを英気としている。故に、戦わせるのなら自身の存在を目の前に晒さなければならないのだ。
「俺の試合は午後にあるのか？」
「知らん、今パソコンお前に貸したままだろ」
そう言えばこの世界に来て宿で借りたままになっていたが、あれがないと情報が引き出せないのか？　幸い持ち合わせていたので、渡して調べてもらうが今日はもうないようだ。しかし、何時見ても不思議なパソコンだ。両手に少し収まらないくらいのサイズだというのに、どれ程の情報を蓄えているのだろうか？
「俺は、もう行く。カズヤ、今日は奢ってくれ」
「何時も奢ってる気がするがな」
鏡八は奢らせようとするが、何時ものことなので苦笑を混ぜつつ支払いを済ませる。振り向けば鏡八の姿はなく、人々の喧騒が耳を打つばかりだ。鏡八が逃げようとすれば、足音一つ立てず俺の前から姿を消すことは容易いが――。
「……礼くらい言ってもいいだろうに」
一つ嘆息をして通りに出る。そこには鏡八の姿はなく少々物悲しさを感じたが、俺も人混みの中へ消えた。

夜がしんしんと深けた頃、宵闇に紛れて動く者たちの影があった。服装も武器も統一感がなく、共通項は一つもないと言っていい。いや、目的だけは共通していると言える。鏡八を殺すこと、それだけのために百人近くにも及ぶ者たちが集ったのだ。
「明日は決行日だ！！　明日こそ長きに渡る、憎悪、殺意を晴らせる日が来るのだ！！」

リーダー格と思える男が熱弁を振るっている。そして、それに同調するように皆が頷く気配がある。深夜と言うこともあり静寂を壊さぬよう、それでいながら皆に伝わる声量で男は叫ぶ。
「各自、計画通りに頼む！！」
男は数分間喋り続け、締め括るように言い闇に溶けるように姿を消した。

何時かは夜も明け、朝が来るものだ。今日は雨が降りそうなほどではないが雲が多く、日差しが遮られ丁度良い涼しさだ。そして、何時も通りカズヤが後ろの席に座ったのを遠目に見やる。十日も経てば人はほとんどいなかった。死亡と棄権、理由は至って単純なものだ。初日でイッチーとユージ君の戦いっぷりを見れば棄権も止むを得ない。それでなくとも血なまぐさい戦いを好む者もそうはいない。
「さて、今日の試合は――」
ドゴーーンッ、ゴゴゴゴォ！！　と、どこか遠い所で爆発の音と、とてつもない質量を持った物体が動く音がした。モニターに向けていた視線をずらし、音源を流し目で見る。すると、闘技場の入口から武装したプレイヤーたちが押し寄せてくる。
「……何のつもりだ？」
立ち上がり、その拍子に腰のナイフがちゃりっと鳴る。見ただけでも会場の入口は岩のようなもので塞がれており、会場や背後などを三十人近い数で包囲している。しかし、それでも慌てるほどのものではない。
「貴様の茶番に付き合うことはないということだ、死ね！！」
背後に立っていた女が叫びつつ、手にした槍を思いっきり突き立

てる。しかし、穂先が刺さるかと思った瞬間には腕と槍が半ばから絶たれていた。俺から見れば遅すぎて五回は殺している速度だったが、振り向かずに腰のナイフを抜きざまに断ち切っただけだ。

女は痛みに顔を顰めつつも、残った柄で頭を叩き割ろうと振り上げるが――

「邪魔だ」

首をナイフで切り落とし、無造作に血を払い出口へ向かう――その間に椅子に掛けてあったフード付きのコートを羽織っておく――。道を塞ぐように十人程いたが、向かうものには無慈悲なまでに死を与え、逃げるものは追わなかった。だが、出口には岩が詰まっており通れない。

「まったく、刃こぼれしそうで嫌なんだが……」

短く嘆息し、一瞬のうちにナイフを三度閃かせる。それだけで、鈍色の光の奇跡をなぞるように岩が切れた。断面は磨かれたように滑らかで恐ろしくなるほどだ。そのまま出口から外へ出るが、そこにも五人ほどプレイヤーが立ちふさがっている。一度腰を落とし前進しつつ、懐からもう一つナイフを取り出し近くに居たものを斬る。

「まず一人」

驚きによる一瞬の隙を突き、近くにいた二人にナイフを投げつける。狙い違わず、吸い込まれるように首へ飛ぶ。その間に残り二人が我に返り、槍と剣を振り下ろす。

「ちっ！！」

ナイフを取り出す暇が無い！！　迫る槍に手を沿え、軽くずらす。それだけでベクトルを狂わされた槍は俺の髪先を掠り、剣士の首を抉った。絶命こそしなかったものの、数分の命であろう。死体からナイフを引き抜き、槍使いの首を斬る。

だが至る所から、草木を掻き分けて進む音がする。一つ息を吐き出し、駆け出す。

気配を頼りに足音を消して進めば、誰にも見つかることなく移動することは容易だ。残念ながら、俺の目から見れば今のプレイヤーはあまりにも弱い。イッチーやユージ君くらいのクラスならば問題ないが、今のプレイヤーにそれを求めるのはあまりに酷（こく）な話だ。

しかし、プレイヤーの配置からして誘い込まれているのは一目瞭然だった。

「ようやく来たな、今日こそ貴様の命日だ」

茂みが開けた場所には、一人のプレイヤーが立っていた。少し浅黒い体表に、乾いたような金髪を立たせた精悍（せいかん）な風貌（ふうぼう）の男。身長は少し高めの百七十代であろう。防具は最低限だけというのを見るに回避重視だろう。

だがゲーム内の服は柔らかいくせに刃を通さないなどと、作った俺ですら意味の分からない服が大量にある。これはビジュアル重視というのもあるが、完全に趣味だ。

「ゲーム攻略組のリーダー、名前はたしか……ライ。ギルドと銘打ち、集団でのゲームクリアを行っている者の首魁（しゅかい）が何用だ？」

記憶に照らし合わせて見つけた答えが、ギルドという名のゲーム攻略集団。規模で言えば百人前後で徒党を組み攻略する大規模な集団だ。そして、それらを統率し率いてるのが目の前の男。強さも今のプレイヤーの平均を頭一つ飛び出たもので――流石にイッチーやユージ君には敵わないが――、目的は俺を殺すこと。そして地球に返ることだったか？

「言わねば分からんか？　貴様を殺せば、我らの悲願は叶えられるのだ！！」

「ふん、詰まりは俺を殺しに来たって訳だ」

タイミングは悪くないが、何故俺をここまで誘い込んだのか気になる。闘技場で囲んでしまえばいいのだ。それなのに、ここまで誘

き出した理由は何だ？　相手を下に見ている分冷静に思考することが出来た。だが、その意図が全く掴めない。大規模な能力で他人を巻き込まないように、などと単純なことであればいいが……。
　嫌な予感だけが増えるが、今日追い詰められることも承知の上でここにいる。何故なら、俺はパソコンにアクセスして密会が行われていることも、計画があることも掴んでいるからだ。
「だが、今日の目的は貴様の始末だけではない。カズヤというプレイヤーの殺害も含めてだ」
「！？」
「お前はナレーター、K、複数の名前と服装でカズヤというプレイヤーに接触している。ナレーターのときには風を用いて周到に音を鳴らさず、Kの場合は行動を共にしている。だが、カズヤとやらは強くも、取り立てて能力が秀でている訳ではない。怪しい故に、不確定要素は排除すべきだ」
　努めて顔には出さないようにしていたが、俺は内心とても動揺していた。そして、全てを掌握せずにおいた自分を叱咤（しった）する。所詮、自分が狙われるだけだと決め付けておいたのが良くなかった。
「死して償え！！」
　俺の動揺を見切り、駆け出した相手を見てようやく戦闘に移行したことを思い知る。ライは背に掛けられた二本の片手剣を素早く抜き、今のプレイヤーの基準にしては遥かに速く走る。
「ッ！！」
　気を持ち直し腰ナイフを抜きざまに片方に叩きつけ、もう片方の側面を蹴りで払う。いくら俺とはいえ、気を持ち直すのが一瞬遅かったら少々危険だったことは否めない。
「だが、甘いぞ！！　一本で何時まで支えられると思っている！？」
　言うだけのことはあるようで、その手数は凄まじいものがある。懐からもう一本取り出し、応戦するが闘技場の方へ意識が向き戦闘がワンテンポ遅れる。
「ええい！！　うざったい、折れろ！！」

ナイフを投げ、切り払いで払った剣に割り込ませる形で、ナイフの背にあるソードブレイカーで剣を無理矢理へし折る。相手は惜しげもなく折れた剣を俺に投げつけ、もう片方を背にしまう。
「死ね」
「くっ！！」
投げつけられた剣を払い、視界に飛び込んできたのはライが双銃を構えている姿だった。その視線は勝ったと思いきった目だった。至近距離から発砲しようというのだから、それも無理からぬことだろう。
バ、バン！！　と、ほぼ同時に放たれた銃弾を――切り捨てた！！
「ふっ、ナイフがあれば出来ないことはない」
「なっ！？」
また絶句するのも無理からぬ話だ。だが、このゲームで規定されたスキルを使えば斬れなくもない。このゲームには能力の他に、獲得する形で入手出来るスキルがある。今のは心眼という音速に近い弾丸でも斬ることが可能というものだが、集中しなければ使えないし連発も集中力の問題上不可能に近い。
「お前は器用貧乏だな。悪いことじゃねぇが」
このゲームの性質上寿命はなく、多岐に渡る武器の扱いなどを習熟したものが有利であることなど言うまでもない。詰まり、一見習得し辛い二刀流の扱いも双銃も悪くは無い。寧ろ着眼点は素晴らしいとさえ言える。
しかし、相手の間合いの方が依然として有利であることにも変わりは無い。こちらから仕掛けるよりは、相手の出方を窺った方が賢明だ。
だが、俺の考えに反しライは懐から古い懐中時計を取り出して時間を確認した。
「時間だ。今から、カズヤの殺害を決行する」

鏡八が襲われたのは理解できるが、今の俺の状態は到底理解出来るものではなかった。
三十人程のプレイヤーに囲まれて、剣先を突きつけられ一体どうしろというのだ。恨みを買うような生き方をしていないとは言わないが、このタイミングじゃないといけない理由が見つからん。大体、一人のプレイヤーを集団で囲むというのは前代未聞だ。
「お前がカズヤだな？」
集団の中にいた一人の男が問う。動きやすそうな軽装で、鎧の類は最低限しか身に付けていない。リンが警戒心も顕(あらわ)に刀に手を沿え、何時戦闘になっても大丈夫なようにと準備をする。
「そうだが？」
「恨みはないが殺す！！」
男が抜刀し駆け出すのを皮切りに、他の一部の者たちも各々武器を構え駆け出す。殺気が身を打つが、それは恨みのこもったような強いものではない。だが残念ながら、俺には鏡八のように全方位を防げるような技量も無い。だからといって、死ぬわけには行かないのだが――！！
「ちょいと失礼」
一言(ことわ)断ってリンの腕を掴み引き寄せる。引き締まって細く、女の子特有の柔らかさを感じるが今はそれどころではない――この感触は戦闘中以外でゆっくりと堪能したいものだ――。そして、全ての武器が振り下ろされる。
「無駄だ」
全てが僅かにずれた。いや、逸(そ)らしたのだ。武器はまるで俺を中心に円を描くように地面を深く抉り、各々の表情には驚愕や疑問が過(よ)ぎる。
「今のは風だな？　空を切ったときの逸らされた感触、間違いある

まい」
　その中でも気付いた者もいた。これだけの人数での戦闘だ。知識量も経験量も、相手の方が上なのだからすぐに手の内がばれてしまうのは仕方が無い。ここにきてゲームで初めて切った能力と言う名のカードも役にたたなそうだな。
　まぁ、逸らし方は至って簡単なものなのだが。武器に風でほんの少し力を与えてやれば、ベクトルを狂わされた武器はあらぬ方へと向かうのだ。
「隠していたのか……能力を使ったことがないと聞いていたというに……」
　今度は、ぼそぼそと喋る声がどこかで聞こえる。だが、こいつが言っていることは正しい。俺はこの風を操る能力を未(いま)だにほとんど使ったことがない。使ったときに見られた場合は全て殺して口を封じた。切れるカードは、あればあるだけいいものだ。
「さて、今度はこっちから行こうか」
　俺は動かず、精神を集中して風を集める。無風だったのが、いきなり強風へと変わる。鎧など重いものを着ていないものは、すぐにでも吹き飛ばされそうな程だ。鋭すぎる風は皮膚などを切り裂き、血の混じった空気を撒き散らす。
「竜巻(トルネード)……」
　想像する風の使役(しえき)方は竜巻だった。爆発的に増えた風はやがて渦を形成し、形あるものを全て切り裂いていく。血と肉片が舞い骨すらも断ち切ってしまう風に、会場にいた人々はパニックを起こし逃げ惑(まど)う。しかし、風より速く動くことなど出来るはずもなく無慈悲に酷薄(こくはく)なまでに死ぬ。その中で立っていられるのは俺とリンだけだった。
　振り払うように竜巻を一瞬で消し、闘技場内を見渡す。そこには生存者など一人もおらず、ただ人であった者たちが肉塊(にくかい)へと変わっているだけだ。
「無茶苦茶ね」

「そうでもないさ。とても疲れたし、連発も出来ない。一発こっきりなんて使えない能力だ」

近場にあった椅子に腰掛け、空を仰ぎ見る。多かった雲は風で吹き流され、気持ちのいい晴天が覗いていた。血と肉塊が散乱し、鼻につく鉄の臭いが少々アンバランスだった。

スルト

「何だ、あれは……天災規模の能力を操るなど……」
「ふぅ、これで安心したぜ。ゆっくりと殺し合いをしようじゃねぇか」
突如発生し、数秒で消えてしまった竜巻を見て呆然と呟くライ。しかし、それも当然の話だ。
通常風を操る能力を使えても、鋭く研ぎ澄ました刃状にしたもので切り裂くとか、酸素を無くすくらいしか使い道が無い。集中力と想像をすれば、あれを起こすことも一応不可能ではない。だが、人の精神は有限だ。人という枠組みを超えない限り、精神をあそこまで高めるのは土台無理な話なのだ。あんなもの、人間の範疇で使えてたまるか。
そういう意味では、カズヤは人間を辞め始めていると言える。
「おら、よそ見してっと殺すぞ！！」
殺気を放ち、こちらを気付かせる。それだけで我に返り、即座に銃弾を放ったのは悪くない。十分に狙いをつけて撃ったものではないが、狙いは心臓と悪いものではなかった。そして、今度は俺は避けない。キィン、と澄んだ金属音が鳴り響き弾ける。衝撃は少しあったが、外傷は無い。
「生憎と俺の刃物は特別せいでな、銃弾くらい弾いちまうんだよな」
コートを軽く開けて見せる。そこにあったのは、ありとあらゆる多種に渡るナイフ、ナイフ……。数え切れないほどのナイフをびっしりとコートの内側に付けてあり、まるでナイフで作られたパズルかのようにほとんど隙間が無い。
「馬鹿な……それだけの重量で体を覆いながら、戦っていたというのか！？」
流石に驚きを隠せないようで、銃弾を乱射する。その狙いは冷静さを欠いているとはいえ、頭に飛来するものが幾つかあった。頭に

飛んで来たものはナイフで切り捨て、胴体に来たものは無視した。
「もう、弾切れだろ？」
「くっ！！」
「遅い！！」
ライが銃を片手剣に代えようとしたときには、俺の掌底が顎に入っている。そして流れるような動作で、空中に僅かに浮いたライの丹田辺りに肘打ちを入れる。吹き飛ばされるように、三メートル程空中を浮遊して落ちた。
倒れたままの状態のライの目に怪しい光が灯る。能力の発動の雰囲気だと勘付けた所までは良かったのだが、いかんせんライの能力は未知数だ。
「燃えろ！！」
俺のいた地面が燃え――というより、爆発と言った方が正しい――、驚き背後へ跳んだのが間違いだった。
「捕まえろ！！」
他のプレイヤーが増援に来たのか！？　精神を研ぎ澄まし、人の気配を探るが誰もいない。
しかし、この一瞬の集中が俺の対処を誤らせた。ライが言ったのは人ではなく、自身に言ったものだった。多分領域操作系の能力なのだろうが、近くにあった木々の枝が俺の手首を万力のような強さで縛り上げた。握力が弱まり、ナイフを取り落としてしまう。
「無様だな、これでお前も終わりだ」
「はっ、笑えるぜ。残念ながら、腹を抱えては出来ないがな」
皮肉を混ぜつつも、負ける気は毛頭ない。ライ自身も片手剣を取り出し、何時でも殺せるのだと言わんばかりにその存在をちらつかせる。
「何故、カズヤとかいうプレイヤーに拘った。その体の傷も、前回の世界で庇ったものであろう。本来なら今回の世界でカズヤを抹殺するつもりだったものが、貴様が自身を賭けにしたせいでギルド内で揉め見送る形になりそうだったものだが」

コートの淵(ふち)からは、包帯がちらっと覗(のぞ)いている。どれだけギルドとかいう集団は情報を溜め込んでいるのか。少々、危険な組織である気もしてきた。
「どうにか、持ち込めた計画だが失敗に終わった。だが、貴様が死ぬ前に聞かせてもらおうか。何故奴を生かすために自身を賭けにしたのかを！！」
「あいつがこのゲームで必要だからだ」
「ふん、意味の分からん事を。だが、最後になってようやく話す気になったか？」
「ああ、お前の手向けとしてやろう」
俺の言葉が言い終わった瞬間には、ライは弾かれたように反射的に俺を横薙ぎに斬り殺そうとした。腹筋、背筋、その他の筋肉に力を込めて無理矢理体を逸らし避ける。服の一部と肉に数ミリほどの傷が入ったが動けない程ではない。その反動を利用し、踵落としを頭部に見舞う。しかし、体勢も不十分だったことから大してダメージも与えられず少しよろけるくらいだった。
しかし、俺はそれを狙っていた。頭部を踏み台にして、逆上がりの要領で足を縛っている枝に近付け空中で靴底同士を合わせる。すると、しゅきんと靴に収められていたナイフが飛び出し枝を断ち切る。
「馬鹿な、ギミックを――！？」
「驚くのは後がいい」
ナイフを拾い上げ、両手両足を武装して走る。都合、四本のナイフを使って近接戦を行う。手で持ったナイフを閃かせれば、ナイフ付きの足で蹴りを放つ。当初の二刀流ならまだ何とかなったかもしれないが、四刀流の手数には圧倒される。
「くそっ！！」
後退して懐から何か取り出す。何を取り出したのか分からんが様子を見ていると、それをライは地面に思いっきり投げつけた。フシューッ、と吹き出る音がして煙が視界を遮(さえぎ)っていく。どうやら煙幕

らしいな、と理解しつつ聴覚に集中すると遠ざかっていく足音がする。
音を頼りにナイフを投げる。当たったようだが、致命傷ではないようで足音は一瞬遅れて遠ざかっていく。
「おいおい、逃げんのかよ。人様に迷惑かけてそれでいいと思ってんのか？　ククク……」
顔は何時もと同じで嗤(わら)っているのだろう。歪んで壊れたような、殺すことが楽しくて楽しくて仕方が無いという表情(かお)で。
ゆっくりと獲物を嬲(なぶ)るように悠然と歩いて追い詰める。視界が晴れたのは、変形された地形が広がる場所だった。そこにあったのは、土を固めたような槍が幾重にも生えている三メートル程の深い堀。先程の枝を変形させて即席のロープにしたのと同じ能力だろう。だが見た所かなりの範囲が能力で変形されていて、ちょっとした池くらいの広さはあるだろう。
「よっと」
気配は今尚離れて行ってるが、これを迂回していたら逃げ切られるだろう。ひょいっと、一足踏み出し爪先立ちの要領でナイフの刃先と土の槍の矛先を合わせる。傍目から見れば、曲芸の一種だと言えるだろう。違うのは綱渡りは線だが、これは点と点だということだけだ。
「なんとかなるか？」
そのまま次々と足を踏み出し、向かい岸へと向けて駆ける。しかし、その速度は地上を走るのとほとんど変わらず、滑るような動きに迷いは感じられない。
ほどなくして地面を久方ぶりに踏み、安堵(あんど)するのも後回しに追う。
「だが、何故だ。奴はこのタイミングで逃げる理由など……」
恐れをなして逃げた、安易に結論を出すならこれで構わない。しかし、何か目的があって逃げているとしたら……？

「はぁ、はぁ……！！」
森の中、一人ライは走っていた。能力を使いながらも、あの常人離れした鏡八から逃げ切るというのは高望みし過ぎというものだ。それにライは今日の計画で、自身が命を落とすことも有り得ると感じていた。だからといって、鏡八から逃げたのは命が惜しくなった訳ではない。彼にはまだやらねばならないことが残っていたからだ。
「スルト、どこにいる！！」
目的地だったのか、ある一点で立ち止まり大声を上げる。腕は先程投げられたナイフによる傷で血が滴り、失血しすぎたのか顔色も悪い。だが、それでも瞳に宿る強い光だけは絶えていない。命を賭ける覚悟が見て取れるような悲壮な眼光だ。
「ここだよ、ライ。目的のものは入手出来たのかい？」
影が染み出すような動きで、木々の合間から声の主が姿を現す。スルトと呼ばれた男の身長はライよりやや低く、少し伸びた綺麗な黒髪を無造作に一つに束ねていた。線の細い顔立ちで、体も筋肉質とはいえない。戦士ではなく、学者のようなイメージを抱かせる。ジーンズにシャツという戦場に似つかわしくない出で立ちで、最低限の防具は疎(おろ)か武器すら所持していないのも原因の一つだろう。
ライはスルトの態度に不満そうな顔をしたが、プラスチックの破片のようなものを手渡した。大きさはピンセットで摘(つま)まないと、掴(つか)むのも困難なほど小さい。
「確かに」
スルトは柔和な微笑を湛(たた)え、それを丁寧に袋に入れて口を縛る。

俺がその場に着いたのは丁度袋に破片を入れて懐に仕舞うときだった。
「今のは粉末から再生し始めた俺のパソコンの一部だな？　目的は言わずとも、いくらか絞れようが貴様らの手には余る代物だ。ああ、だが返さなくていいぞ。貴様らはここで殺す」
王者の風格を漂わせるかの如く、全てのものをひれ伏させようという殺気にライが竦(すく)みそうになる。だが、俺の殺気を受けていながら失神しないだけマシであろう。破片自体は俺を縛り上げ、切ったときに剣に付着したものが再生し始めたのだろう。
遊んでやるのも、いい加減飽きてきたことだ。今更一人増えたところで、殺すことには変わりない。
「くそっ！！　スルト、逃げろ！！　今それを失えば――」
「囀(さえず)るな……」
ライは捨て身で時間を稼ごうとしたのだろうが、抜剣することすら叶わず額にナイフが突き刺さる。今の俺の顔には先程の歪んだ笑みは浮かばず、ただ機械の如く敵を殺す無慈悲な目をしているだろう。俺としても楽しみたいところだったが、あれを手中に納められてはゲームバランスが崩壊する。
「ふむ、速いですね。でも、ここで死ぬわけにはいきませんので――」
「だから、囀るなと言っている……」
スルトは何か言っている途中だったが、その胸にナイフを突き刺す。血に濡れた刃先が背中から飛び出しているが、スルトの表情には苦悶(くもん)も危機感もない。訝しげに観察するが、不審な点は見つからない。だが、直感は何かあることを告げている。
「無駄ですよ。これは質量を持った、ただの幻です。それに、貴方が渡すまいとしているものは転移させて本体が回収しています」
「クソが！！」
毒づくが、今更後悔したところで意味はない。遊んでいたことが

間違いだったのだ。
「僕の目的は、あれを使ってこのゲームを支配することなんですよ。ライは鏡八を殺すためだと言って聞かせましたが、あれがあれば貴方の存在など路傍の石も当然です」
「だから、スルトなのか……。北欧神話における世界に火を放つ者にして、ラグナロクの勝者。神を気取るつもりか！？」
プレイヤーネームの由来を紐解いたのはいいが、あれが再生しきってしまった場合には間違いなく勝者になる。あれにはゲームにおける全ての情報が記録されている。情報を握るというのは自分が有利な戦いが出来る。
それに、あれには隠された反則的な用途がある。
「博識ですね。そう、それこそ私のプレイヤーネームの由来。さて、あれが完全に再生するのに長い時間が掛かるでしょう。なにせ粉からですからね。あわよくば本体をとも思いましたが、ライ程度では無理な話です。では、また会える日を。ふふ、さようなら」
言いたいことだけ言うと、スルトの体は塵に変わり風に巻かれて消えていった。ナイフに付着した血も消えうせ、鞘に納め腰に掛ける。
「失態だ……」

闘技場は閉鎖――もとい、使用出来る状態ではなくなったので次の世界に転移させられることになった。その旨が告知されたのは、鏡八が戦闘を終え闘技場に着いてからのことだった。闘技場はほぼ全壊しており、その場に残り眠っている俺を見て鏡八は呆れたらしい。当然そこには死体の群れしかなく、俺と寄り添うように傍にいるリンしかいなかった。

俺が再び目を開けたのは、世界に鳴り響くアナウンスの声だった。
「――プレイヤー諸君、ゲームはバッドエンドを迎えた。よって、次のゲームに移る。開始は明日の明け方だ」
たったそれだけの簡素で味気ない事務的なアナウンスは、世界のどこからでも聞くことが出来たらしい。寝ぼけた俺はそれを聞き逃したが、幸いリンはそれを聞いていたため問題はなかった。一つ欠伸を漏らし、俺達は宿に急いだ。何が起きたのか俺だけでは全貌を把握しきるのが困難だったからだ。宿には待ち構えるように鏡八の姿があった。疲労のせいか普段の飄々（ひょうひょう）とした態度ではなく、気だるげなぼんやりとした表情で溜め息を付いていた。服は汚れていたが、血などは付いていない。
「よう、遅かったな」
「いや、疲れててさ。派手にやっちまった、はは……」
闘技場を半壊させてしまったのは俺なのだ、苦笑するしかない。鏡八は、そんなことどうでもいいと言い宿に入っていく。真面目な雰囲気に取り残され、頭を掻きつつ鏡八の後に続く。中は埃が薄く積もっていたが、俺が歩くたびに近場の窓から全て流れていく。風が一つ撫でるように過ぎていく度に、空気も清浄なものに変化していく。
長い廊下を経て食堂に入ると、そこには酒瓶が一つにグラスが三つあった。そこで鏡八はコートを脱ぎ散らし、シャツを巻き上げ腹の消毒をしていた。
「まったく掃除機か、お前は」
「いや、俺ってカビっぽい所とか埃っぽいの駄目なん――」
「それはいいけど、傷は大丈夫なのかしら？」
軽く流されたのが精神的に痛かったのは内緒だ。リンは鏡八の腹の具合を見ているが、様子を見るにそんなに悪い状態ではないのだろう。大体、鏡八が大怪我するようなことは想像つかない。
酒をグラスに三つ注ぐ。小さめのグラスだったが、それだけで半分ほど空になった。その赤い液体を口に含んでみるが、まったく美

味しさというものが分からない。
「面倒なことになった。パソコンを盗まれた」
「あれって、確か情報たくさん蓄えてるはずだろ？　やばいじゃねえかよ」
「だが、まだ大丈夫だ。盗まれたのは破片だからな」
そう言って、グラスに口を付け唇を湿らす。味わっているのか、ゆっくりと嚥下（えんか）する。
破片――それは、パソコンの一部なのだろう。あの不可思議な再生能力があるのだ。何時かは完全なものになるのだろう。だが、まだと言ったのだ。当分は時間があるということだろう。
「そういうわけで、俺は当分消える。ゲームにも干渉しない」
「わざわざ、パソコンの捜索にか？　ご苦労なことだ。チーターの存在くらい、何時もなら面白がりそうなものだがな」
「ああ、ただのチーターならな。奴め、神を気取るつもりだ」
プレイヤーの存在を越えることに怒りを覚えているのか、それとも別のことを考えているのか黙り込む。それに釣られるように、俺はもとい始めから会話に参加するのを控えているリンも無言になる。じっと空気に耐えるられず、酒を啜る音だけをさりげなく鳴り響かせる。
「それで何故お前が襲われたのは何故だ……と聞くのは野暮な話か。じゃあ、俺が狙われたのは？」
「知るわけなかろうが」
理由を知らない訳ではないが、言ったところで気にしすぎるのがオチだ。プレイヤーは皆自立して行動するのがモットーで、甘やかすように優しすぎるのも問題である。
鏡八は明日に備えて寝ろ、と言い残し部屋に戻っていく。静寂の中に液体を嚥下する音だけが虚しく響く。
「俺も仮眠するか。リンも少し寝たほうがいいぞ」
「そうね、また明日」
グラスに残った酒を一気に飲み干し、部屋に戻るリンの後ろ姿を

ぼんやりと眺めた。何時もと変わらぬ様子はどこか安心出来た。何故不安を感じたのかは知らない。
「酔った……か、な？」
ふぅ、と一つ息を吐き出し机に手を付いて立ち上がる。手が微(かす)かに震えた気がして、見てみるが何事もなかった。戦闘を行なった日は何時もこうだ。人を殺すことに躊躇いはないし、人を殺すのに罪悪感もほとんどない。だが、全てが終わったとき良心が痛む変わりのように手が震える。だから、俺は剣を握ったのだと常々思う。銃のように己が手に殺した感覚をなくして、人を殺してしまわぬように――。
「人を殺さないのが、倫理的には正しいのだがな……」
呟きは泣きそうなほどにか細かった。

静寂の闇を切り裂くように、照らすのはパソコンの明かりだった。いくつか情報を引き出すために置いておいたのだが――
「……ん？」
いざ触れてみると、俺以外が触った履歴があり驚いて表示させる。それはここ最近貸し出している間にカズヤが調べていたものだった。それを見て、今更ながらにここ最近は触れていなかったのを思い出す。好奇心を刺激され、履歴を次々に表示させる。大半はイッチーとユージ君、それにタツキを中心に調べたものだった。中には面白いものがいくつか含まれていた。
「戦神楽(いくさかぐら)……また、懐かしいものを」
そこに表示されているのは一振りの刀だった。どんな材質なのか漆黒の刀身は闇を切り取ったように濃く、装飾は全くされていないに等しい。形状は日本刀とそれほど大差はない。物凄い切れ味に加

え、その他多数の能力を付与し完全無欠の最強の一振りと言っても過言ではない業物だ。説明書きを添えてあるその画像は、俺にとっては見ていて懐かしいものだ。

「ふっ、失われし魔剣と言ったところか」

僅かに笑みを添え皮肉に笑う。カズヤは最強の武器を求めて検索したのかもしれないが、この刀は遠い昔に失せたはずだ。俺自身が消去したもの中に含まれていたのだから、漏れがなければ塵一つ残さず消滅している。

俺がゲームを作り上げたばかりの頃だった。一番最初に作られたゲームバランスの崩壊した世界に存在していたものだ。その時のゲームは全てのデータを破棄した。そしていくつものゲームを作り破棄し、それら全てのゲームの残骸を下地に今のゲームが築かれている。それ故に、極稀にだが消したはずの遺物が見つかったりする。まぁ、ほとんど可能性はないに等しいが。

「ん……アヤメとは誰だ？」

他に調べた中に一人の少女が含まれていた。十歳ほどの可愛い少女だ。遂にロリコンにでもなったのかと顔を顰め、額を抑えて目を通す。黄金色の髪を足首辺りまで伸ばし、瞳は美しい碧眼だ。髪は長すぎて、歩くのも一苦労しそうだと思う。読み進めて分かったことだが、リンの義妹であるらしい。

ある程度検討がついた所で、興味が失せ他にめぼしいものもないようなので本来の仕事に戻るとしよう。

「スルト……奴を殺さねば被害はカズヤにも及ぶ可能性がある。今あいつを殺されるのは痛手だ。まだ、あいつには働いてもらわねばならん」

そこで一度息を吸う。冷たい夜風が肺を満たし、思考が澄んでいくのが分かる。

「ようやく見つけたのだからな……例え、何十億の命が失われようと覚醒してもらわねば――」

風が一つ凪いだ。まるで言葉を紡ぐのを、必死に止めようとして

いるかのようだった。それによって、どれだけの血が流れるのか分からない。幾多の悲しみが降り注ぎ、どれほどの人を殺めるのかさえも誰にも理解出来はしない。

「――このゲームは崩壊するのだから」

封印されし者と契約者、そして……タツキ（前書き）

久しぶりの投稿。学校が忙しくて、嫌気が差す毎日です。

封印されし者と契約者、そして……タツキ

目が覚めたのは妙な浮遊感を感じたからだった。視界に映り込んできたのは、闇夜の森とリンの横顔。しかも、一メートル程の高さという訳の分からない場所で、というオマケ付き。咄嗟(とっさ)に受身を取り立ち上がると、淡い燐光が俺の体を取り巻いていた。見覚えのある――というより、世界を移動する度に見ているのだから知っていて当然だ。

世界を越えても時間は、まったく一致しない。前回の世界では明け方だったはずだが、この世界は深夜のままだ。世界を越える弊害(へいがい)は、時間と文明レベルの違いくらいだ。だが、そんなことよりも物凄い違和感を感じた。

息苦しく、例えるなら全方位から殺気をぶつけられるような感覚。知らず剣を抜き、全方位に視線を配る。そして、その感覚の正体に気付き戦慄した。殺気のような人を圧倒する存在感。

「何がいる……？」

「そうね、でも敵意はないわ」

心拍は天井知らずに上がり、冷や汗がたくさん出る。空中から始まったのは、ベッドで寝ていた間に転移させられたのであろう。ゲームにおける座標軸についてはよく分からないのだが、転移しても大抵リンとはぐれることはそうない。気配は一向に消えず、こちらに対しての敵意も感じられないため一先ず剣を納める。

「最悪だな。来て早々面倒になりそうだ」

落ち着いたが、ここにいても情報を集めることは出来ない。麓(ふもと)の方に街灯りが見えるので、まずはそこに行ってみようと足を進める。夜風は涼しかったが、当分冷や汗は止まることはないだろう。

「一体何がいるのかしらね？」

「さあ、知らんが楽しいことにだけはならないだろ」

「戦うのが好きなんじゃないの？」

リンの疑問は半ば確定したものを確認するような言い方だった。俺自身は戦うのは面倒だと思っているはずなのだが、リンの評価では戦闘狂だとでも言うのだろうか？　でも振り返れば、殺すこと事態は好んでいるのかもしれない。戦闘中は常に高揚感と少しの不安で埋めつくされ、殺すことしか考えていない。楽しいのか知らんが、高揚感に胸を支配されるのは殺したいから……なのか。

「血ガ、アレバ……コノ封印ヲ……」

飽和して反響したような不快感を与える声が空間を震わせる。だが、そこは世界とは別の空間で放たれたもので、世界には一ミリたりとも干渉することは出来ない。それを理解して、また不快感を感じるという悪循環。

無限の闇に支配された空間でそれは待つ。己（おの）が主は未だ現れず、ただ悠久にも似た時間の流れに身を任せ。

朝日が昇って来た頃、ようやく俺とリンは麓に見えた街に辿り着いた。少し賑やかな喧騒が耳に付く。いくつかの視線がこちらを捉えるが、よそ者と思っただけで特異なわけでもない俺の興味など、すぐに失くし雑多な雰囲気に埋没する。

「賑わってんなあ。何かイベントでもあんのかねぇ？」

「さぁ、どうかしら。前回みたいなのは嫌だわ」

「嫌って言うけどさ。誘った俺が言うのもなんだが、ほとんど戦っ

てないよな」
軽く睨(にら)まれたのは、揚げ足を取られたことに対するものではなく、リンの本心を知りながらも言ったからだろう。――戦いたくないという優しい心情に。
それを受け流しながら、少々わざとらしいと自覚しつつも市場の品に目を走らせる。肉、魚、野菜といった食品が所狭しと立ち並びつつも、明らかに景観を壊しているものを売っている場所もあった。武器という殺す為の道具。画面越しのゲームなら違和感など微塵も感じなかっただろうが、現実として見るとアンバランスという言葉じゃ済まされない。
「取り敢えず、酒場に情報収集にでも行くか？」
「そうね、お酒も飲みたいし」
酒場の喧騒は猥雑(わいざつ)の一言に尽きた。まだ早朝だと言うのに、むっとなるような酒の臭いが充満した部屋だった。広い部屋に酔い潰れた客がだらしなく倒れ、動いているのは酒場のマスターと思(おぼ)しき男とカウンターの端に腰掛けた少年だけだった。
「ユージ君じゃないか。何故ここに？」
「あ、カズヤ。久しぶり……でもないか。タツキが、ちょっとね」
「喧嘩でもしたのか？」
そんなとこ、と言いつつジュースを啜(すす)る。その横顔に憂(うれ)いはなく、暇を持て余した様子が見て取れる。
「マスター、トマトジュースくれ」
何となく言ってみただけなのだが本当に置いてあるようで、しばらくすると赤い液体で満たされたコップが目の前に置かれた。本音を言うとトマトは嫌いなのだが、無いと思っていた俺が馬鹿だった。
「ふふ、子供ね」
「悪かったな。朝から酒が飲めるか」
リンはその横で普通に酒を頼んでいたが、俺は濃厚な味のするトマトジュースを一口含む。一口目で吐き気を催すトマトの味が口内を満たし、二度も口を付けるのは躊躇われた。

「なあ、ユージ君。戦ってくれないか？」
目を見ず言った言葉だったが、ユージ君の表情には困惑のが広がっているのを感じた。俺とて力量の差を理解していないわけではないが、前回の世界では理由も分からず狙われた。切ったカードは一枚だが、俺にとっては持ち札の全てだった。
「強くなりたいんだ」
「ふうん、悪いけど興味ないね。でも、暇だから少しだけ鍛えてあげるよ」
内心を察したわけではないだろうが、楽しげにジュースを飲み干す。
「さ、じゃあコート脱いで」
「は？」
「いいから、いいから」
少し待って、と言い残しコートを持ってどこかへと消えていった。しかし、体格は俺とそう変わらないはずなのに凄い腕力だった。有無を言わさず、コートを持ってかれた。
「カズヤがコート着てないの久しぶりに見たかも」
「そうだっけ？」
俺は忘れ癖が酷く、脱いだ挙句そのまま忘れることがあるのだ。自覚しているからこそ、俺は出来る限り脱がない。コートの下は黒無地のシャツにブラックジーンズ。ロングコートで隠れているから普段は見えないが、中は動きやすい服装なのだ。
「中も外も黒よね。好きなの？」
「着れりゃ、何でも構わんけど。たしかに、黒か白しか着ないな。それも黒寄りだし」
ロングコートも中も真っ黒。黒が好きなのかと訊かれたら、そうなのかもしれない。決して性格が黒いのが反映されて、などという理由でなければいいのだが。
どうでもいいことを苦悩しつつ、トマトジュースにもう一度口を付けるべきかどうか悩んでいたときユージ君が戻ってきた。手には

持って行ったはずの俺のコートがある。手渡されたので受け取ったが、その感触に確かな違和感を感じた。その違和感の正体に気付けぬまま袖を通す。
「あれ、もしかして縫ったの？」
「まあね。さて、街から出ようか。ここじゃ満足に戦えないし」
切られていた部分などが新品かのように綺麗になっていた。先程感じた違和感はこれだったのだろうか？

同時刻、タツキは珍しいことに一人で行動していた。別に転移させられたときに仲間とはぐれた訳ではなく、理由は単純にユージ君と口喧嘩――実際の所は、タツキが一方的にユージ君に口負けた――したためであった。
そう、事の始まりはユージ君の一言だった。
「タツキって活躍してないよね」
内容は思い出すのも嫌だが、タツキ自身が弱いということだった。売り言葉に買い言葉ではないが、男の微妙な意地とかが反論させた。
「そんなことないって！！」
「いつも最後のとどめは僕が刺してるよね？」
「それはユージ君が横取りするからだろう！！」
「タツキが一向に敵を倒さないし」
ぎくっ、と身を強張らせた。ユージ君の言っていることは正論だった。威勢よく戦いに挑みつつも、ユージ君に獲物を横取りされる――手こずっているタツキを見て、ユージ君が苛立ち捻り潰す――のが常だ。今までは戦闘を楽しんでいるだけであって、殺すことを楽しんでいるわけではなく気にはしていなかった。だが、思い起こせばいくつか思い当たらないでもない。

「いや、でも……！！」
「まあ、仕方ないよね。タツキは弱いしね」
「うわーーーん！！」
「あ、タツキ……」
走り出したタツキを見てユージ君が声を掛けた――追いかける素振りは欠片もなかった――のだが、それで止まるような男ではなかった。それが事の顛末だった。
そういう事情で日が昇っても尚、薄暗い森の中を単身進んでいた。それで切れるようなプレイヤーと仲間の繋がりでもなく、何時かは戻らねばならず今はただ放浪していた。
「あー、誰でもいいから撃って気晴らししたい……」
呟きは静寂が包み込む森へ溶け込んでいった。しかし、よくよく考えてみれば言っている事は通り魔と大差ない。そのことに気付いていないわけではないが、ゲームとしか捉えていない故に人を傷付けることに躊躇いはない。

森にいたのはタツキだけではなかった。背のやや低い体躯を鎧で固め、派手な装飾のされた剣を一振り背負っている少年がいた。黒い髪を坊主にして、身長は百五十を下回るくらいしかない。鏡八が見れば機動性の落ちる鎧はまだしも、派手な作りの耐久度の劣る剣に呆れただろう。はっきり言って、見栄えはいいかもしれないが外見からして雑魚と知れる。
彼の目的は強い仲間を探すという一風変わったものだった。その考えだけなら変なものではないように思える。だが、プレイヤーが強い仲間を擁している（ようしている）のは個々の能力差によるものもあるが、偏（ひとえ）にプレイヤーの育て方によるものであることを彼は知らない――いや、

プレイヤーが知ることの出来るものではない。
ふいに足音が聞こえ、体を強張らせる。近くの木に背を預け、その向こうの気配を探る。気配の主は規則的な歩幅で、まるで散歩をするかのような気安さで一直線にこちらへ向かってくる。
「見つけたぜ！！」
楽しげな声が耳に流れ込んだと感じたときには、既に木諸共前方に身を吹き飛ばされていた。すぐに起き上がりつつ、背後を振り返る。そこにはロケットランチャーを構えたタツキの姿があった。
「ひいぃ！！　助けて！！」
頬を流れた血が地面に落ち、絶叫しながらも彼は逃げ出そうとした。重たい鎧を鳴らす不様な様子は、タツキの心を大いに満足させてくれた。悠然とした歩みで銃弾を撃つ姿は、狩りを楽しむ肉食動物のそれだ。
それ故に、タツキは気付かなかった。彼が流した血が幾何学模様を作り、この世界と異世界との境界線を曖昧なものとしたことに。そして、封印は解かれ彼の者は姿を現す。

「近イ……感ジル」
悠久の時は、もう間も無く終わろうとしていた。暗闇に支配された空間は震え、今にも解き放たれんばかりに軋み崩壊の序曲を奏でる。だが、空間は微妙な均衡で壊れなかった。まるで体中を縛った鎖が、残り一本だけ外れないような危ういバランス。
それは待つ。時間の概念すらも現実とは違う隔離された世界で――。

街外れの森は静寂を保ち、独特の警戒心を強めさせる。誰もいないから音が立たない、などという馬鹿な話はない。風を使えば空気の振動は消え、音は届かなくなる。相手の精神に働きかけるものなら、聴覚を弄(いじく)るだけで音は聞こえないと錯覚させられる。聴覚は当てにならず視界も悪い。能力を駆使する者なら、ここで戦闘をしかければ独壇場だ。

狙われたのはまだ昨日のことなのだ。安心など出来るはずもなく、結果警戒心は増え神経は際限なく摩耗させられる。

「ふふ、安心していいよ。ここから百メートル以内には僕たち以外の気配はない。熱源も感じられないしね」

見透かされたかのように、安心させる笑みを浮かべる。僅かな挙動で内心を読んだとでも言うのだろうか？

「リン離れててくれ。警戒を頼む」

「さて、どこからでもいいよ」

リンが離れていくのを視界の隅で確認しつつ、静かに剣を抜く。派手ではないが装飾のされた剣は、俺の趣向とはそぐわない。対してユージ君は片手剣を下げたまま構えをとらない。

「行くぞ！！」

接近しつつ袈裟斬り、突きを繰り出すが最低限の動作で回避される。その顔には、うっすらと笑みさえ浮かんでいる。上段からの振り下ろし、横薙ぎの一撃も全ての攻撃が読まれているかのように異常な反射速度で反応してみせる。

「ちっ！！」

逆袈裟に斬り込み、風を使って全周囲からの同時攻撃。

「甘いよ」

十分な余裕を持って剣を弾き、陽炎のような淡い火が身を覆ったと思ったときには風は全て燃やされていた。舌打ちを一つして剣で苛烈に攻める。脳が真っ白になって何も考えられなくなるまで、目

の前の少年を――。

タツキの強さ

ここまで攻撃が当たらないというのは、幻影と戦っているのではと疑ってしまう。それ程までに目の前の少年は素早かった。全ての太刀筋は触れることすら出来ず、全方位からの攻撃は最低限の動作で防がれる。

一時間弱、それが戦闘時間だ。神経は摩耗して剣筋は単調なものになっている。最初はなにかと喋っていたユージ君も無言になり、それどころか眼光は鋭いものになっている。

「おら、隙だらけだぞ！！」

防戦一方だったユージ君の思わぬ反撃に防御も出来ず、コートの上から切られた！！　物凄い衝撃に耐え切れず倒れてしまう。

「がはっ！！　げほっ！！」

「あ、ごめん！！　攻撃しなければ戦闘状態にならないと思ったんだけど。まぁ、斬れてないし大丈夫だよね？」

斬れてない？　剣で切られたんだぞ！？　倒れた状態から腹の感触を探るが、痛みのせいで下半身が繋がっているか分からない。仕方なく上体を少し持ち上げ見てみるが、下半身は繋がったままだった。

「喜んでいいのか、不思議と困るな」

「コートを作り直しておいて良かったよ。見た目は変わらないけど、耐久性は紙と鉄くらい違うはずだよ」

感じた違和感の正体は綺麗になったことではなく、改良されていたことだったのか。納得しつつも、切られたというのに五体満足でいられる理不尽な耐久度に呆れる。質感は普通の服と変わらず曲がるし、鎧よりは破格に軽い。

「骨も折れてないし大丈夫だね」

「考えてみれば、ユージ君なんでも出来んのな。料理も美味いし、コートも作るし」

「出来て当然だよ。だって僕は」
――最強クラスだから。それは傲慢(ごうまん)でもなく過大な自信の表れでもなく、厳然たる事実として述べただけ。そして、それを認めさせてしまえる強さが彼にはある。だが、彼は悲しそうにそれを言う。その声音はイッチーと似ていると思う。
ふと浮かんだ疑問を投げかけてみた。
「最強って何だろな？」
「さてね。純粋な肉弾戦なら僕は誰にも負けないし、反面イッチーは能力を使った戦闘なら右に出るものはいない。でも、最強クラスって言うならそれで構わない。でも、ゲーム内の最強は何でも出来ることにあると思うよ。あらゆるものを作り出し、身体能力に長(た)け、誰にも負けない」
そんなものなのか、と漠然(ばくぜん)と思った。それが正しいのか俺には分からないからだ――いや、誰にも分かるはずがない。最強なんて決められたクラスでもないのだから。
「じゃあ、タツキは最強になる素質があるのか？」
「え、どうして？」
単身で何でも出来るユージ君が、タツキと一緒に行動するメリットは少ない。世界を越えるという行為に拘(こだわ)るなら理解出来るが、理由が見つからないのだ。
「ふっ、面白いことを言うね。大体言いたいことは分かったけど、それは違うよ」
「じゃあ、ユージ君にメリットがあるのか？」
「あると言えばあるね。でもね、彼はプレイヤーの中では奇抜な存在だよ。プレイヤーはアリのように蔓延(はびこ)っているけど、たった一人だけなんだ。あれは一群を率いる将の器だ」
実に面白そうに言う。だが、よく考えてみれば異質なことだ。一般にプレイヤーは複数の仲間を作り行動していく。表面的に見れば既存のＲＰＧのシナリオそのものだが、数万もの仲間を作るなど通常ありえない。プレイヤーは自身の強さに固執(こしつ)する為、仲間を積極

的に作らないからだ。
「でも、よく分からないな。特異なのは理解出来るけど、タツキは強いのか」
「タツキ自身は弱いよ。でも、タツキは強いよ」
謎かけのような訳の分からないことを微笑で覆い隠す。それは理解させないためなのか、本当のことを言っただけなのか。

『グアァァァァ！！』
突如（とつじょ）、耳を劈（つんざ）くような咆哮（ほうこう）が世界を震えさせた。森に出現したのは三十メートルはあろうかという巨躯。力強い双翼と逞（たくま）しい体つきで、薄紫色の体表を血のような真紅が彩っている。
「何だ……竜？」
形容するなら竜で間違いないのだろう。飛ぶことが出来ないのか、それとも飛ばないのか、竜は地上に留まったまま何かを探すように視線を巡らせる。
「うわあぁ！！　何だこいつは！？」
今まで弄（もてあそ）んでいた少年は、鎧を鳴らし腰を抜かしている。拳銃を突きつけられた状態だというのに、叫んでいられるのは驚きのせいか。一瞬、目の前の少年を殺してから竜を対処すべきか悩んだ。
しかし、それについて思考するのは全くの無意味だった。引き金に掛けた手に力を込めた瞬間に、竜の前足が振り降ろされていたからだ。迎撃など出来るはずも無く、身を投げ出すように前に飛び転がる。
「？」
起き上がっても攻撃の気配はなく、おかしく思い振り返る。振り降ろされたと思っていた前足は空中で完全に停止しており、少年は

悲壮な顔のまま固まって意味をなさぬ言葉を紡いでいる。
「あわあぁぁぁ……！！」
足がゆっくりと踏み下ろされ、土埃が舞う。少年は腰を抜かしたまま動かず、竜は少年を射抜くように見つめる。数分ほどの膠着の後、その変化は起きた。竜が小さくなり始めたのだ。二十メートル、十メートルとなり……やがて、それは人の形を成した。
少女だった。長い髪は体表と同じ薄紫色で右目は血のような真紅、左目は翡翠色の虹彩異色。
「あなたが主？」
「主……？」
少女はどこか抑揚のない感情の感じさせない声音で話す。対して、少年は呆けた表情で見上げるばかりだ。主人公とヒロインのような構図だが、生憎と傍から見れば攻撃のチャンスとしか思えない。だが、竜というものと戦ったことは未だ経験がない。攻撃のタイミングが掴めない。
「取り敢えず、ライフルでぶち込むか……」
二脚を使って安定させた対物ライフルのレンズから覗き見る。少女がこちらを見ていた。視線が交錯したと思ったときには反射的に引き金を引いてしまっていた。
音速を軽く越えた速度で弾は少女に飛ぶ。当たったと思ったが、腕に防がれていた。ただし、少女の細腕ではなく逞しい竜の剛腕だった。
「主は傷付けさせない」
「てかさ、あんたら誰だ？　名前聞いてないんだが……。雑魚敵だと思っていたんだけどな」
ライフルを放置したまま、上着から二丁拳銃とインカムを取り出す。装着して呼びかける。
「全員集合、ショータイムだ！！」
戦闘開始だと告げるように、音高く銃声を鳴り響かせる。

「あれ、竜か？」
「うん、みたいだね。しかも、タツキの現在地はあの辺りなんだよね」
頭を？きつつ、困ったように言う。何故、お前はそんなことまで分かる……？
疑問を一瞬脳裏に抱いたが、そんなことで驚いていては身が持たない。熱源を感知したのかもしれないし、気配があったとか非現実的な感覚で理解したのかもしれない。
「助けに行かないのか？」
「それが、あれ魔竜って言うんだけど中々に手強くてね。単体での戦闘力じゃ群を抜いてる。倒すのが面倒なんだよね」
面倒と言うだけで、倒せないとは断言していない辺り余裕が窺える。助けに行かないとなぁ……、と言いつつ渋るのは仲間としての最低限の義理か。
「行って来たら？」
「うん、決めた。丁度いいし、カズヤも行こう。リン、君は宿を探しているといい」
走り出したユージ君の後ろ姿を見送りつつ、リンはどこにいるのかと考え一瞬行動に出遅れた。
「行くの？」
「あぁ、宿取っといてくれるか？　ちょっと行ってくるよ」
何時の間にか後ろに立っていたリンに答え、遠くなった後ろ姿を追いかけて走り出す。
「流石に速過ぎるだろ！！」
ユージ君の速度は風か地を走る稲妻のようだった。普通に走っていては追いつけそうにない。後ろから風を吹かせ、半ば吹き飛ばさ

れるように無理矢理距離を詰める。ほとんど地に足を付けていないに等しい。制御が難しくアドリブでやりたくはなかったのだが、風で空中を飛ぶ。
「あ、それいいね。どうも炎じゃ、戦闘に使えても応用が利かなくてね」
笑いながらも息は切れておらず、気付いた時には姿は消えていた。
「嘘！？　有り得んだろ！！」
一段とギアを上げて、その姿は遥か先にあった。追いつくためにスピードを上げるが、速過ぎて体は軋んで限界だ。これ以上速度が上がると、体がバラバラになりそうになる。
悠々と走るユージ君のペースは変わらず、見えなくなってしまった。止むを得ず、直線的なコースに切り換える。これならゴールの差はほとんど出ないはずだ。
「うおおおおらぁ！！」
見通しは甘かったことを思い知る。木々を抜けた先、山頂辺りにいる竜とユージ君は交戦していた。片手剣一本で足を切り裂き、蹴り殴る。傍目から見れば蟻（あり）と象とまでは言わないが、それに近い印象を抱かせる。
「結局俺は何したらいいんだ？」
竜の攻撃対象には含まれていないようだが、時折吐く炎のブレスに当たりそうになる。
「うおおおりゃ！！」
「死ね、死ね！！　フハハハ！！」
タツキとユージ君の連携は見事なものだった。タツキの苛烈な射線上でユージ君は戦っているはずだが、その体は一発の弾丸も掠（かす）ることはない。見事の一言に尽きると言えるだろう。こうも息が合うなど、どれだけの修羅場を共に掻い潜ってきたのか。
だが、竜は巨大過ぎた。どれ程の弾丸を浴びせても、どれ程切り刻んでも死なない。
「全・弾・発・射・！！」

タツキが勢いよく上着を広げたかと思うと、その内側から数え切れぬ弾丸とミサイルが放たれていく。哄笑しながら苛烈な攻勢を見せるタツキの姿は、恐ろしいの一言に尽きた。
「めんどくせえな、おい！！　ははは、いいぜ！！　もっと楽しませてみろよ！！」
ユージ君は剣一本での戦闘によるものなので、どうしても限界がある。タツキのように派手さにも欠ける、だが物凄い速度で繰り出される剣戟は恐ろしい。
だが、二人の熾烈な攻撃でも竜は倒せないでいた。
「こんなの倒せるのか？」
「倒せるよ」
ユージ君の一言は意外に近い場所で聞こえた。気付けば何時の間にか攻撃は止み、竜だけが動いていた。
「彼には才能があるんだよ」
タツキは真正面から竜を睨んでいた。先に動いたのは竜だった。前足を振り上げ、タツキを押し潰そうとした。だが、その腕は振り下ろされることはなく空中で止まっていた。
「攻撃開始！！」
タツキがインカムに向かって叫んだ。空気が揺らいだように感じて、目をしばたかせる。
「何だ、これ！？」
驚いてしまうのも無理はない。空と大地を埋め尽くすかのように、人と機械で溢れていたのだ。オマケに、ヘリや巨大な人型のロボットまであったりする。空中で不自然に止まっていた前足は、人型ロボットが受け止めているからだった。
驚きが支配して、次に戦慄した。これ程までの練度と人数を、たった一人のプレイヤーが動かしているのだ。これだけの戦力なら何が相手でも負けることはないだろう。光学迷彩でも使っているのか、直前まで姿を見せなかったのは凄かった。
そして、集中砲火が始まった。それは残虐であり、理不尽な一方

的な戦いだった――いや、戦いと呼ぶことすらできない。
『グアアアアアアアアアアアアアアアアア！！』
天地を轟(とどろ)かせんばかりの悲鳴。それに、多種に渡る武器と能力の嵐が加わる。大きいとはいえ、この物量で戦ったら勝ち目などない。竜が完全に動かなくなるまで、そう時間は掛からなかった。
「攻撃、止め！！」
ぴたりと止んだ攻撃の後には、息も絶え絶えな竜が残されるばかりだ。竜の形を保つのも辛いのか、人型に戻っていく。
「おい、大丈夫か！！」
「あ、まだ生きてたんだ……。撤収！！　撤収！！」
先ほどの鎧を着た少年は生きていたらしく、少女の元へと駆け寄る。
そして、逆にタツキの仲間たちは撤収していく。ユージ君が、あれはいいの？　と訊いていたが、タツキは、いいと答えていた。
「凄いな……」
「分かった？」
「あぁ、強いな。個人ではなく、集団を使って戦うプレイヤーはいない」
それがタツキの魅力なのさ、と言い残してタツキたちは消えていった。後に残されたのは、俺と少年と竜の少女だった。微妙に居づらい雰囲気で、その場を後にした。

日常の中にある思い出（前書き）

本当に申し訳ありませんでした！！
更新したかったのですが、先月学校が忙しかったもので投稿出来ませんでした。
今月に入っても姉の誕生日などがあり、ようやく暇が出来ましたので投稿します。
毎日アクセス数を見る度に申し訳なく思っていました。今一度、謝罪いたします。

日常の中にある思い出

眩(まぶ)しい日差しで目が覚めた。

周りを見回すが、簡素な木製の机と俺が寝ている窓際のベッドがあるだけだ。窓から入り込んできた光は俺を焼き殺そうとしているのだろうかと考える。寝起きが悪くない俺は寝ぼけて考えた訳ではなく、起きたくないと現実逃避しているだけだ。

「うぅ……太陽なんて消えちまえ……」

呻(うめ)きながら、毛布を深く被(かぶ)り直す。お構いなしに気温は上がり、時間が経つのと比例するように不快度も上昇して眠るのも厳しくなってくる。

「飯食うか……」

諦めて起き上がり、腹具合を確認してからベッドから飛び降りる。壁に立て掛けておいた剣を手に取り、刀身を少し引き抜き眺めてみる。

装飾のされた両刃の直刀の剣は光を浴びて輝いている。その光は禍々しいものではなく、聖剣と言わんばかりの綺麗な輝きだ。名のある剣だと思わせるのだが、こんな剣の噂は聞いたことがない。

そして正直な話、俺には聖剣よりは魔剣の類の方が似合っていると思う。

「どうでもいいことだな」

無造作に背負い、扉を開けて階下へと向かう。石作りの床の上に絨毯を敷いただけの廊下は、寒々しい事この上ない。木製よりは堅(けん)牢(ろう)な印象を抱かせるが、プレイヤーによっては容易く壊すことが出来るため安心感などない。

階下は賑やかな喧噪で包まれており、はっきり言って五月蠅い。パンとコーヒーだけ貰って食堂の端のテーブルに腰掛ける。固焼きのパンを頬張りコーヒーで流し込むだけの機械的に食事を行っていると、ふいに声を掛けられ我に返った。

「カズヤ、遅いわよ。今日はどうするの？」
ずっとここに居たのであろう。リンはコーヒーを持って近づいて来た。何時も通り動きやすそうな服装だからという理由で選ばれた服は、露出が多く目のやり場に困る。周りの視線――男共のだが――を集めているのに気付いていないのだろうか。
思考を切り換え今日の予定を脳内で確認するが、ゲームを攻略するという目的を含めなければ急ぎですることはない。ギルドとかいう攻略組は、かなり熱心に取り組んでいるようだが、俺は攻略を真摯にやっている訳ではない。遊びの延長でやっているだけという言う方がしっくりくる。
「今日は観光でもする？」
「あぁ、構わんよ。どうせ、ゲームのクリア条件も目処が立っている訳でもないしな」
コーヒーの苦みを堪能しつつ眠気を追い払う。窓から見える空は雲一つない快晴で観光日和と言わざるをえない。コーヒーを空にして立ち上がる。
「何か面白いものあるかしら」
「可愛い女の子と観光するのは楽しいことだろう？」
「？」
リアクションの一つでもあれば、笑って流すことも出来たのだろう。しかし、首を傾げられたのは少々予定外だった。頬を？き、どうこの場を流すか必死に思案する。それから十分ほど俺は立ちすくむことになった。

明るく陽気な喧噪が耳朶を打つ。
人々は笑顔で商品を売ったり、昨日の竜の騒ぎなど無かったかの

ように自然としている。現実的に考えれば恐慌状態に陥ってもおかしくない事だが、生憎とゲームで起こることに一々驚いていてはいられない。日々命のやり取りをしているに等しいゲームで段々と感覚が摩耗していくのだ。そう感じても仕方のないことかもしれないが、死ぬことすら怖くなくなる日がいつか来るのだろうか。

つらつらと思考を際限なく肥大させながら歩く。その間リンとの間に会話はなく、又何を話していいかも分からなかった。

「噴水……か」

「どうしたの？」

立ち止まった視線の先にあったのは噴水だった。大きな石作りの噴水は水を盛大に噴き出し、少し距離のあるここまで水飛沫（しぶき）が飛んでくる。どうやら広場のような造りになっているらしく、開けた円形の広場から放射状に市場が広がっている。

「懐かしいと思ったのさ。子供の頃、噴水を見ているのが好きだった」

「正直、意外ね。カズヤに芸術を愛でるような感性があるなんてね」

「感性なんて大層なものじゃないがな」

子供特有の純粋な興味だった。懐かしいと感じるのは年数の問題ではなく、殺伐としたこの世界で穏やかな気持ちになったからだろうか。

きっとリンは楽しそうに微笑んでるのだろうと思っていた。仮初（かりそめ）ではあるが、平和が目の前にあるのだから。だがリンの横顔に浮かぶのは、不安と焦燥感を混ぜたような切なげな表情だった。

「もしかして、妹のこと思い出したのか？」

「えぇ……」

力なく肯定する。どれが妹を思い出すきっかけになったのか分からないが、とても観光を続けることは出来そうにない。この展開を予想することは難しかったとはいえ、観光を許可したのを後悔した。

「リン、予定を早めて旅に戻ろう」

さり気無く混ぜても、気付かれる気遣いに意味はあるのだろうか。

「ふふ、ありがと。気を遣ってくれて」
予想を裏切らず真意を汲(く)み取られ、力無い笑みと共に言葉が返される。たった一人の少女の願いすら叶えられない無力さに胸が痛んだ。
リンが妹のことを気にするのも仕方ない。家族と引き裂かれて無事でいられるはずがない……のだろう。俺がそれを断言出来ないのは家族を見捨てたからだ。最後に会ったのはゲームが始まった日の現実だったが、もう生きてはおるまい。ゲームに参加させられた時には近くに家族はいなかった。だが、そんなの言い訳だ。探そうともしなかったのだから。
後悔はないし、やり直す気もない。他者など、どうでもいいものだと来て早々示したわけだ。
「そうと決まれば、早いとこ食料買って行こうぜ」
「そうね」
やはり、その声に力は無かったが今の俺にはどうすることも出来なかった。自分の無力さに嘆いたことはいくらでもあるが泣いたことは一度もない。だから身を裂かれるような無力感は当分消えることはないのだろう。

買い物を手早く済ませて街を出て、深い森に生えた草を掻(か)き分けて進む。人が通った形跡はなく、獣道が続く道は何が現れてもおかしくない雰囲気を漂(ただよ)わせている。一見安全のように見えるが、変哲のない場所にボスモンスターが出てくることも有り得るのだ。警戒心を持って歩くのは至極当然のことと言えた。
「にしても、今日は野宿か？　街からじゃ森しか見えんかったし」
「かもしれないわね。でも、情報集めなくてよかったの？」

ゲームの攻略に取り組むプレイヤーは、街の酒場などで情報を集めてクリア条件を模索するのが基本だ。多種多様な情報が集まるので好んでこの手法が使われる。
だが、嘘を言うプレイヤーがいないでもない。攻略組の中にはクリア目的の為に、わざと情報を操作して攪乱(かくらん)する者もいる。貴重なゲームクリア報酬があるからだ。
無論全てが嘘である訳ではなく本当に一部の者だけだ。プレイヤーの情報は詳細に聞けるため、一定のリスクを孕みつつも主流なのだ。俺個人としては気ままな放浪を好むため、あまりこの手の手法は使わないが。
「情報に踊らされるのはゴメンだ。無駄な手間が掛かるだけかもしれないしな」
「それもそうね。でも、行き先くらいは決めたのよね？」
「……調べてない」
「まったく、こんなことじゃないかと思ったけど」
溜め息を一つ漏らし、額を抑えて呆れている。行き先を調べていないのは何時ものことなのだが、今回は敢えて調べなかった。
理由は四方を山に囲われた地形にある。この世界に来てから日はそう経っていない為、プレイヤーの情報は当てにならず山を越えてくる商人の話しか聞けなかった。故にクリア条件を探るのは不可能だと早々に見切りを付け、山越えを優先したのだ。そして近場の街にでも着いてから情報収集しようと思っている。
「大丈夫。ある程度は考えてある」
「そう、ならいいけど。でも、気付いてる？」
微風(そよかぜ)が木々をざわめかせる音だけがやけに聞こえる。溜め息をつきたくなり心の中で頭を抱える。初歩的なミスをおかしたことに今更ながら気付いたのだ。生物が発する音だけが欠落している。
不審に思い、自身を中心に風を百メートル程まで吹かせてみる。しかし、風の進路上には人はおろか獣一匹すらいない。
「獣がいない」

「どうしたのかしら？」
たかが百メートルだから偶然だと言い切ることは容易い。しかし、どんな小さな異変でも見逃せば、それは死を招く。それが、このゲームにおける残酷な現実の一面だ。
対処を熟慮するが名案は浮かびそうになかった。経験則で言えば残念ながら答えは出せず、直感では大丈夫な気がする。
「進もう。何かいれば偶然で済ませれる」
「そうね。警戒しながら進みましょう」
取り越し苦労であることを願いつつ、音を立てないように静かに剣を抜く。何が出てきても問題ないようにしておかなければならない。逆に右手が塞がってしまうが、この際構わないだろう。
左右に視線を配り、風で索敵しつつ歩き続ける。しかし、いくら歩いても何もいない。
「きゃあああああぁ！！」
緊張が解けかけたのを狙うかのように前方から女性と思しき悲鳴が一つ上がり、リンと顔を見合わせ駆け出す。足元は落ち葉で滑りやすく木の根が道を阻むように出ている。声は遠くから聞こえたが果たして間に合うだろうか。
『グルルルゥ……！！』
視界が開けた所に、三匹のモンスターと今にも襲われそうな少女がいた。モンスターの形は一言で言えば狼のようであった。毛色は黒に近い灰色、瞳は輝く金色。しかし、その瞳に生気はなく害意だけが渦巻いている。
「操られてるのか！？」
獣を操る能力があるなど聞いたことないが、虚ろな瞳は生物の意思が反映されてないように思える。
背後からの奇襲のような形になり、手近なモンスターが悲鳴を上げる前に首を落とす。残りの二匹を無視して少女の元へと駆け寄る。優先事項はあくまでモンスターの排除ではなく少女の生存だ。
「大丈夫か？」

「はい……！　あの――！！」
「話は後だ」
残りを殺すために振り返り、俺はどうすればいいか分からなくなってしまった。事実だけを述べるなら戦闘は終わっていた。俺が少女と会話していた間だから五秒もなかったはずだが、モンスターはそれぞれ首と胴が切断されていたのだ。
「早すぎるだろ……」
リンが刀を鞘（さや）に納める音が虚しく響く。
「あ、あの！　助けてくださって、ありがとうございます！！」
「ああ。それより怪我はなかったか？」
「いえ、大丈夫です」
美しい栗色の髪をストレートヘアーにした少女は、リンとそう歳も変わらないだろう。襲われた直後だからだろうが真鍮色の瞳は涙で濡（ぬ）れていた。
現実世界で十六年ゲームで数年生きてきたが、残念ながら泣いてる女の子を元気にする方法など知らない。かける言葉も思い浮かばず困り果てる俺を見て、リンが呆れを混ぜて声を掛けてきた。
「カズヤ、索敵お願い」
何時もなら俺に相手をさせるリンが珍しく俺に索敵を任せた。人間、恐怖を感じたときは頼れる人が傍にいてやるべきだ。詰まり、少女にとって今の俺の表情が頼りないのだろう。
現に索敵など建前でしかなく、どこからも敵意は感じない。ここにいても少女に不安を感じさせるだけだ。それに女同士の方が上手くやってくれるだろう、と思い足を適当な場所へ向ける。
「ん？　今何か……」
草木が揺れた気がして手に持つ剣を僅かに上げる。視線を四方に巡らせて、気配を必死に探る。
「どこ見てんだ？」
「！？」
背後からの声に驚き、出遅れたことを理解しつつも剣を振りぬく。

だが、刃先はぴたりと止められていた。背後の人物が指だけで剣を白刃取りをしていたからだ。
しかし、背後の人物は俺の知っている人物でほっとした。
「……イッチーか。びっくりさせないでくれ」
「驚かせるつもりはなかったんだが」
イッチーが済まなそうにしながら剣から指を離す。謝意があるくらいなら後ろに立たないで欲しいものだ。わざわざ背後に転移までしてきて何がしたいのか分からない。
「それより、こんな場所で何してるんだ？」
「ゲームをクリアしに行くとこだ」
「クリア条件を知ってるのか！？」
当然だとばかりに頷く。しかし、その目はやる気とは程遠く暇潰しだと語っているようだ。事実、そうなのだろう。
「どこにいる？　何が条件だ？　教えて欲しい」
普通の相手にならこんなことは頼まない。何故なら攻略組にクリア条件は情報として高値で売れるからだ。相場としては数万から数百万で一儲け出来る。だが、イッチーなら金を欲していないだろうし、交渉の余地はあると思ったのだ。
「ええー……どうすっかなー？」
「別にいいだろ。減るもんじゃねえし」
「まあな。ここから三キロくらい進む所にある塔にいる奴を殺せばいい」
話が本当だとするならばスタート地点によほど恵まれたと見える。なにせ距離だけなら、転移してきた地点からでも十分に視認出来る位置だ。正確な測定は行われたことはないが、世界は俺たちプレイヤーの故郷である地球に近い大きさだと言われている。それだけの大きさにして、この距離とは僥倖と言わざるを得ない。
しかし、指し示した方角を見るが草木が多く何も見出すことは出来ない。
「何も見えないぞ」

イッチーが呆れたように宙に手をかざす。それだけで、嘘のように視界を妨げていた木々が消え失せる。後に残るのは、夕焼けを背景に聳え立つ塔だけだった。遠目からで正確なことは言えないが、二百メートルくらいはありそうな高さだ。

「あれが……」

「そうだ。せいぜい頑張れ。俺は腹ごしらえでもして明日にでも挑むとしよう」

言うだけ言うと、幻であったかのように姿は掻き消えた。ここにいたことを示すのは、消された木々とその先にある塔だけだった。

はっと我に返る。イッチーと随分話し込んでしまった。もう戻っても彼女は落ち着いているだろう。

「リン、そっちは終わったか？」

「遅いわよ。日が暮れたら面倒よ」

「悪かったって。家はあそこの街か？」

「いえ、近くに村があるんです」

日も落ち始め、すぐに夜になるので俺たちはその村へ行くことにした。本音としては塔のことが気になるのだが、夜間の戦闘は極力避けるべきだ。

それにイッチーと巡り合えたことで行程を大幅に省略することが出来た。世界を移動してから数日しか経っていないというのにクリア条件を知ることは大きい。条件が見つからず何ヶ月もクリアされないというのはよくあることなのだから。

無力感

クリア条件を知りつつも遠回りしなければならないことに、後ろ髪を引かれる思いで村へと足を進める。道中モンスターが出ないか警戒していたが、少女を不安にさせぬよう剣を納めた状態では不安が募る。

「しかし、あんなところで何をしていたんだ？」

「私は畑を見に行ってたんです」

畑というのは村の所有物と考えてよいと思われる。しかし、何故村から離れた場所にあるのだろうか？

「私たちの村はモンスターの脅威に脅えています。村の畑は食い荒らされ、家畜は殺される。ですから、村から離れた所に畑があるんです」

「でも、村から離れてるんだったら荒らされるんじゃないの？」

「いえ、理由は分からないんですけど、どうしてかそこだけは大丈夫なんです」

雑談で気を紛らわせてやっているだけで話の内容は頭に入ってはこない。所詮、行き摩りの少女だ。深く思い入れをするのは好ましくない。俺たちは進むことしか出来ない旅人なのだから。

このゲームは世界を行くことは出来ても戻ることは出来ない。詰まり、一度来た世界には二度と行くことが出来ないのだ。そこの住人を仲間にしない限り、どんな別れも今生の別れになってしまう。それを思う度に理不尽な別れがあることを痛感させられる。

「あれが――リン、そこの女連れて避難してくれ！！」

村が見えたと思った矢先にモンスターの大群が押し寄せていた。多様な形をしており例えるなら、熊や鳥、先程の狼もどきなどがいる。大きさも区々（まちまち）で、小さなものだと犬ぐらいのものから、大きいものだと十メートル程の長さと俺の背丈程の太さを兼ね備えた単眼の大トカゲなんてものがいる。

「ちっ、数が多すぎる！！」
近いものから切り伏せていくが一向に減る気配がない。ざっと見ただけでも五十はいそうだ。
右手の剣で狼型のモンスターの喉を切り裂き、襲ってきた鷹（たか）のようなモンスターを左手で牽制する。
「二本欲しくなるな！！　手数がまったく足りねえ！！」
二本というのは言うまでもなく、剣――もしくは刀――のことである。人を相手にするなら二刀は技術的な意味で不安が残るが、本能で襲ってくるようなモンスターなら問題ない。
風を使おうと考え、ふいにユージ君との戦闘の後に言われたことを思い出した。
「カズヤは能力を片手間で使うと剣が鈍（にぶ）るよね。もうちょっと成長すれば簡単なんだけど」
「でも、それだったらどうすれば強くなれるんだ？」
「そうだね。今のカズヤの長所は能力の発動規模だから、誰かに守ってもらって、集中して大技を使うとかかな？」
言われた直後は、結局一人で出来るようなことではなかったので忘れていた。しかし、言っているのはそう悪いものではない。ただ、これが使えるのは集中するために誰かに守ってもらわねばならない。そして、敵が多ければ多いほど良いものであることは自明の理だ。まさに、今の状況では打って付けというわけだ。
「でも、リンはあっちだしな……捨て身覚悟でやるか？」
言ってはみたものの、この攻撃の最中集中するのは不可能に近い。それよりは、地道な消耗戦を繰り広げる方がいいだろう。幸いなことに、こいつらも先程と同様に操られているようで攻撃は単調なものが多い。
「駄目だな。引き上げるか」
辺りを見渡してみるが、モンスターの姿はあれど人の姿は一つもない。次の攻撃が止んだときを撤収の合図としようと剣を握る手に力を込める。

しかし、俺の思考を読んだかの如く大トカゲもどきが獰猛な牙を並べて襲いかかってきた。口の大きさからして、俺を飲み込むことなど造作もないだろう。ギリギリまで引き付けて、斜めに進むように前へ出る。紙一重の意味が身に染みるような距離をモンスターが駆け抜けていく。

「っ！！」

短く息を吸い、尻尾の先を地面に縫い付けるように剣を思い切り振り下ろす。

「ゴアアアアアアアァァァ！！」

絶叫が響き渡るが所詮は体の末端に過ぎず死にはしない。だが動けなくなっただけで十分だ。滑る背中に足を掛け、顔の上まで疾駆する。ぎょろ、と大きな金色の瞳が俺を睨みつける。ここからは、少々勇気が必要だったが振り上げた拳を目に叩き付ける。

「ギャアアアアアアァァァァ！！」

金色の瞳は容易く拳の侵入を許し、少し湿った感触と生々しい肉の感触を感じさせた。不快な感触に顔を顰めつつ、深く埋まった腕を引き抜く。

「気持ち悪いな……」

そのとき痛みに耐えかねてモンスターが暴れだし振り下ろされてしまった。地面にぶつかるときに受け身を取り、武器を求めて尻尾に駆け寄る。剣は引き抜かれておらず、手放したときと同じ姿でそこにあった。これだけ暴れていても抜けないものだと感心する。

解き放たれたモンスターは怒りを浮かべ、学習能力がないのか突進してきた。しかし、今度は目を潰された分狙いが甘く、俺の体が掠るくらいのところを走っている。剣を真一文字に構え、足に力を入れる。

「死ね、よく分からん爬虫類！！」

「ガアアアアアアァァァァ！！」

剣が食い込む重い衝撃に歯を食いしばり、突進の勢いを利用して胴体を切り裂いていく。しかし、最初の衝撃に比べて剣はバターを

切るかのように肉に食い込む。血が吹き上げ、俺の体を真紅に染め上げていく。
突進は肉を半分程斬ったところで静止した。剣に付着した血を払い、鞘に納める手間も惜しみ撤退する。言うまでもなく、圧倒的な物量差による敗走である。
「ちっ、俺にもチート的能力があればいいんだがな……」
村を蹂躙するモンスターの群れを視界に捉えながらも、その多さに無力感と殺意を覚える。しかし、無理してここで戦う意味もそれほどない。建物は破壊され、家畜も食われ、これ以上守るものなどないからだ。
モンスターたちは俺の存在など目もくれず、一様に狂ったように破壊か咆哮を繰り返すだけだ。お陰で易々と逃げることが出来た訳だが、己の無力さを改めて痛感する。今日は無力だと思うことが多過ぎる。
「弱いな……」
呟きは空気に溶けるように誰の耳にも入らず、無論モンスターが言語を解するようなこともなかったが、悔しさに歯を食いしばる。ぎりっ、と音が自分でも分かるほどの強さだ。
ほどなくして村人と思しき集団とリンの姿を見つけることが出来た。
「カズヤ、怪我したの！？」
「問題ない。返り血だ」
決まっていたかのような受け答えを即座に行い、集団に目を走らせる。大なり小なり怪我をしているものは多いが死亡者は二、三人程度だったようだ。息を一つ吐き剣を突き刺し、木に寄り掛かって地面に座る。
座った理由は疲れではなく、この後の展開を検討するためだ。大きく分けて二つの選択があることになる。
ここに留まり明日イッチーがゲームをクリアするまで村を守るか、或いは見捨ててゲームを攻略するかだ。前者はよしんばイッチーが

クリアしても無駄な徒労でしかなく、後者は自身の感情を優先することになる。
そこまで考えて愚問だと思った。何を迷っているのだ、と。家族すら見捨てた俺に今更他人を守る権利などあるはずもないのだ。
「リン、ゲームを攻略するぞ」
「この人たちを見捨てると言ってるのかしら？」
即座に言わんとしていることを理解したらしく、その言葉には十二分に非難する響きが含まれていた。思わず溜め息を吐きたくなったが、舌打ちを一つして視線を始めてリンに合わせる。何時もは凛々しさを感じさせるものだが、静かな怒気を込めた瞳は睨み殺せそうなほど冷たい。
だが、俺もここで引く気はない。
「ここで俺とリンで戦って勝機があるのか？」
「それでも、これ以上誰かが死ぬのは嫌よ」
気持ちを共感出来ないが理解は出来る。心優しき故に他者の身を案ずる。それはリンの美徳であろう。しかし、所詮は他者であり一つでも世界を越えれば再び巡り合うこともない。そして全てを守ることが出来ない俺たちの言葉は偽善でしかない。
「俺には関係ない」
「はぁ……行きましょう」
短く嘆息して諦観（ていかん）を現しながらも不承不承（ふしょうぶしょう）歩き始めた。立ち上がり剣を納めて集団へと目を走らせる。先程助けた少女が怪我人を介抱するのが見えた。
地面に水滴が落ちる音がして視線をそちらへ向ける。血が土に染み込んでいるのが映った。ようやく手に食い込むほど強く爪を立てていたことに気付いた。
「俺が弱いんだ……そう弱い……」

件の塔に着いたのは夜天に美しい満月が懸かる頃だった――いや、その言い方は正確ではない。遠目に見たときは気付かなかったが、塔は周りを谷に囲まれていたのだ。
「ここなの？」
「リンに対応を任せていたときに、イッチーから情報を貰った」
彼ね、と思い出したように納得するリン。
しかし、このままでは向こう岸へ向かうことが出来ない。冗談抜きで考えた一つ目の案は、そこら辺に生えた木で棒高跳びするというものだった。しかし、木はしなりそうになく不可能に近い。
舌打ちを一つして周囲を探るが、塔の壁に金色で描いたような瞳を円で囲う奇妙な文様くらいしかない。足元にある石を手に取り投擲姿勢に入る。谷の間隔は二十メートル程しかない。届くはずだ！！
「っ！！」
右手を高速で閃かせる。狙った通り石は吸い込まれるように文様の中心へ飛んで行く。思わず手を握り締めてしまう。しかし、当たったと思った瞬間、足に何か当たった感触があり足元を見る。
石が一つ転がっていた。
「そういうことか」
「成る程ね」
背後を見ずとも予測は付いていたことだが転移していた。ワープの目印だとでも言うのだろうか。
――うぜぇ、殺したくなるな……。
普段なら仕掛けを楽しむ余裕を持っているが、今の心情では苛立ちしか浮かばない。リンとしても似たような心境なのか微笑みはなく眉を顰めている。
塔の内部は三十メートル程の円形が延々と続いているだけだ。
「階段もねえのかよ」
「まったく悪趣味な建物ね」

壁からは数えるのが億劫になるくらいの棒だけが突き出していた。逆に言えばそれしかない。
「あれを登れって言ってんじゃねえだろうな？」
「それしかないんじゃないかしら」
入り口まで近寄るのですら仕掛けがあったんだ。他にもあってもおかしくはないが、改めてこの現実はゲームだと思い知らされた気分だ。
辟易（へきえき）しながら内部を確認する。一番近い棒ですら三メートル近い高さがあるのだ。到底登れるはずがない。
「まったく、今回はとことんゲーム気分を味合わせたいらしいな」
部屋の隅に新品の鉤爪（かぎづめ）ロープが五つほど落ちていた。一つ手に取り、軽く振り回し適当な棒に引っ掛けて登り始める。
「ほんと面倒だわ……」

喋れないボス

俺が今歩いているのは何もない通路だった。白い壁が続き、左右には一メートル間隔くらいで扉がある。天井は遥か彼方、壁からは棒が幾重にも迫(せ)り出している。空間は連続しておらず、抜け出すことすら出来なくなっている完全にお手上げ状態。罠(トラップ)に引っ掛かった俺にはどうすることも出来ない。

困ったものだが、避けようのないことだった。

「カズヤは何を求めてゲームをクリアしようとしてるの？」

リンからの突然の問いだった。内容に驚き、手にしていたロープを手放しそうになって慌てて握りなおす。リンが攻略に傾注するのは妹を探すために俺に付き合っているだけだ。俺は何のために攻略しているんだろうか。

「俺は……」

言葉は続かなかった。何かを言おうとはしたのだが考えても理由は出てこない。

昔は何かあったと思うのだが今は何だったか思い出せない――いや、それ以前に元々あったのだろうか。

「知らん」

「そう」

リンはさして気になることでもなかったのか黙々と登っている。俺もそれに倣(なら)うように黙々と登ることにした。沈黙が空間を支配し、妙な居心地の悪さを感じる。

やがて体感で五十メートル程の高さくらいまで登ったところで俺

たちは扉を発見した。
「まだ上あるよな？」
「そうね。下よりも上の方が距離があるわ」
下を覗き込みつつ言うリンは正しい。天井までは今まで登ってきた二倍近い高さがあると思われる。
しかし、この扉を開けるというのは正しいのか頭を悩ませた。リンは俺の選択に従うようで待機している。
「開けるぞ。まだ何も起きてないが、ここは敵地だ。リンは最悪の事態を想定して待機してくれ」
「了解」
開き戸に身を寄せ、警戒心を高めて開けた。呼応するように視界を眩い光が染めて何も見えなくなった。

そして気付いたらここにいたという訳だ。おまけにリンとも逸れた。
しかも、部屋に足を踏み入れてないのに発動する罠なんて卑怯だと思わなくもない。だがここは間違いなく敵地である。どこに罠が仕掛けてあってもおかしくないのだ。
「だからと言っても、これはないだろ……」
左手の扉を開けるが、そこには同じ配置の通路が続いてるだけだ。違いは扉のデザインが違ったり、通路が石造りになっていたりするくらいだ。そして実は先程から同じことを続けている。空間が無限に広がっているのだ。
リンの方は大丈夫だろうか。俺よりはしっかりしているし、普通に考えるならば問題はないだろうが。

「こちらもダメね」
リンのいる所はカズヤの空間と反比例するかのように狭かった。部屋は一辺が三メートル程の立方体だった。扉も窓も明かりもないはずなのに、どこかぼんやりとした光が空間を照らしている。
壁にもたれ掛かるように座る。無駄な体力を消費するのは好ましくなく、落ち着いて対応を考えるのが先決だろう。
しかし、思い浮かぶのは今日のカズヤはどこか焦っていたように感じたことだ。駄目元で村を守ることを提案をしてはみたが、やはりカズヤは動かなかった。他人のことなど、どうでもいいと普段から言っているが今日はそれを差し引いても決断が奇妙だった。
「何を焦っていたのかしら?」
本人にしか分からないことなのだから考えても答えは見つかるはずもない。
それに私には先にしなければならないことがある。妹を探さなければならないのだ。今日も噴水の前で穏やかな気持ちになると同時に妹を探し出せないことに対する焦燥感が浮かんできた。少しの罪悪感と共に。
当初のカズヤとの行動は妹を探すために利用したとしか言えない関係だったが、今では双方ある程度分かりあうことが出来て楽しいと素直に思える。そんなことを自分が考えているときに妹はどんな状況であるかも分からないのに。
結果、それらを含めてあの表情になってしまった訳だ。そしてカズヤは気遣ってくれた。掴めない性格をしている彼だが本当は優しい人だと思う。
「カズヤは私のことをどう思ってるのかしら……?」
少なくとも彼が言う他人に自分が含まれているなら放っておくは

ずだ。自分は彼にとって他人以上の何者なのだろうか。

「ちっ……。どうすっかな？」

今いるのは先程から抜け出すことが出来ない通路だ――正確に言えば、視界を埋め尽くすほどの大量で異形のモンスター付きだ。今日戦ったものとは類似した特徴がなく、全く別個の生命だと言える形をしている。三足歩行だったり、明らかに体のパーツが足りなかったりする実にＭｏｎｓｔｅｒ（モンスター）らしい化け物。

しかし、目に相当する器官を持っているものだけは共通するものがあった。意思の欠落した瞳。

俺が剣を音高く引き抜いた音を皮切りにモンスターたちが動き始めた。

「グルアアアアァ！！」

「ガアアアアァ！！」

「やっぱ面倒」

剣を抜いたのはいいが、これらの数を相手にするのは体力の無駄だ。風を使って滑るように舞い上がる。適当な高さの棒に着地し眼下の群れへと目を向ける。

飛んでいるものもいるが圧倒的に地を這うタイプが多い。これなら出来るかもしれない！！

精神を深く集中させ、外界の刺激をシャットダウンして意識を闇へと落とす。敵からの攻撃があることすら忘れて、風が全てを切り刻む姿を想像、現実を置き換える！！

形あるもの全てを灰燼に帰さんとするそれは宛ら（さなが）風と言う名の死神のようであった。

「終わり。まぁ、安全圏なら一人でも十分出来るんだよ。……って、

食われてるし！！」
　軽傷ではあるが体中を啄(ついば)まれていた。それに気付くことすら出来ないほど集中していたのだ。しかし、この程度の損傷で敵を殲滅出来たのは大きい。通路は足の踏み場もないほどに夥(おびただ)しい死体が埋め尽くしている。
　足下を俯瞰(ふかん)していると急に空間が震え始めた。そして、それに驚き剣を取り落してしまった。
「ちっ、鍵はモンスターということか」
　経験で言うならこのパターンは通常の空間に戻るときの前兆のようなものだ。条件を満たせば抜け出せる分、死に直面しかねない罠よりは幾分かマシだ。
　詰まり、取り急ぎ剣を回収しなければ、どことも分からぬ空間に置き去りにすることとなる。はっきり言って、あれだけの業物を捨てるには惜しい。飛び降りて限界まで手を伸ばす。しかし、もう俺の体を燐光が取り巻き始めていた。触れるか、触れないかの刹那――
「間に合わなかったか」
　転移させられていた。傍らにリンの姿を認めるが剣はどこにもなかった。
「そっちは大丈夫だったか？」
「ええ、何もなかったわ。どちらかと言うと、そっちの方が何かあったみたいね」
　言葉に嘘はなかろう。リンに怪我はなく服装等にも乱れはない。戦闘は行われなかったと見るのが正しいだろう。寧(むし)ろ俺の方が体中に軽傷ではあるが怪我がある。
「さて、行くとするか」
「何が出てくるのかしら」
　転移された位置は塔の最上部。もしかしたら、あれは距離を短縮するために設置された罠なのだろうか。しかし、無駄な徒労をした。風で最上部まで一っ飛びすればよかっただけなのだ――能力が無効化される空間もないわけではないし、不用意に能力を過信するのも

問題であるが――。
豪奢（ごうしゃ）な扉に手を掛け力を込める。ゆっくりと扉は重厚な音を立てて開いていく。
内部はホールになっていて、そこには一人の青年が腰掛けていた。軽くウェーブした金色の髪に深い蒼色の瞳。服装も中々恰好いいが、明らかにイケ面の雑魚ボス。
「ようこ――ぐはっ！！」
「あ、悪ぃ。何か言うことあったのか」
セリフが予め（あらかじ）設定されていたようだな。先手必勝とばかりに飛び蹴りをしようとしていたら丁度遮る形になってしまった。だからと言って攻撃の手を休めるはずもなく、もう一度口を開こうとしたのを頬を抉（えぐ）るように強烈に殴りつけることで黙らせる。
「はっ、こりゃいいぜ！！　最高だな、オイ！！」
「ぐっ！！　やめ！！　ごはっ！！」
「カズヤ、ほんと楽しそうね」
ほとんど無抵抗な敵を一方的に殴る、蹴る。リンが若干引いてるのに気付かぬまま、喜悦を浮かべつつ攻撃する。
「剣がなくて残念だったな！！　楽に逝けなくてよ！！」
更に拳を振り上げ――ゴオオオォォン！！　と物凄い音が鳴り響き、音源へ目を向ける。そこには分厚い壁が無理矢理破壊された形跡があった。そして、やはりというかイッチーの姿も。
「面白そうなことになっているな」
一見すれば穏やかな微笑にしか見えないほどの僅かな笑みを浮かべて、拳を鳴らし悠然とした歩みで近づいてくる。
「来る――ぐあああああああああぁ！！」
言い切ることも許さず、目の前まで転移して殴りつける。動きは素人然とした稚拙なものだったが、込められた力が違いすぎる。ゴキッ、っと嫌な音が鳴り響き涎（よだれ）を垂らしながら悲鳴を上げる。
「忘れもんだ、ほらよ」
イッチーは手を一閃させると棒状のものが形成され、それを放り

投げてきた。それが何か分からず受け取り、思わず目を見張った。
回収し損ねた俺の剣だった。
「ナイスだ、イッチー！！」
未(いま)だ痛みから抜け出せず現実を視認出来ていない彼の首を刎(は)ねる。
血を払って、イッチーの方を振り返る。
「サンキュー、これ勿体なかったからな」
「まったくだな。聖剣を捨てるなんてな」
「それが聖剣だと言うの？　中々どうして似合わないものを拾うのかしら？」
予想範囲内の正体だったことに安堵(あんど)するも、武器を使わないイッチーの情報網の広さに驚く。リンの言い方は若干酷いものがあるが、俺というのを正確に理解している。
「聖剣『始(し)』を司(つかさど)る剣だ。中々の業物だな」
「始？」
「ああ、いくつか聖剣の上があるんだ。ゲームと一緒さ。強化したり派生した先があるってことだ」
どうも今日は、ここがゲームだと思い知らされるな。しかし、ボスが弱かったから感じなかったが無力感も。
「そういや、ボス弱かったな」
「あ、それ俺のせいだ。どうも無意識で思考しちまうんだよな。俺以外の奴は弱いと」
顔が引き攣(つ)るのが自分でも分かってしまった。無意識下の思考ですら現実を変容させ得(う)る神の名を冠する能力の規模に。
「くっ！」
「どうしたの！？」
そして突如、酷い頭痛に襲われた――いや、痛みではなく違和感と言った方が正しいか。細胞の一片まで変革するような強烈な違和感が痛みと錯覚させたのだ。やがて頭から首、胴、体の末端へと順繰りに違和感が走って、終わりも同じく唐突に止まった。
「何だ、この感覚」

「能力の獲得に伴う感覚だ。右手の文様からして……能力名は『トランス』」
「トランス？」
右手の掌を見ると、見慣れぬ黒いゴシック調の文様があった。しかし、逆に言えばそれ以外に違うところはない。それに名前が分かったからといって能力を扱える訳ではない。
「そうか。初めての感覚だな」
イッチーが楽しげに俺を見ているが何が楽しいのか分からない。リンとしては俺のことを気遣わしげにこちらを見ている。
「どんな能力なのか教えて欲しい」
「やだ」
「即答かよ！？」
「教えたら俺がつまらん」
俺はお前の玩具（おもちゃ）じゃねえぞ！？　てか、俺で面白がるなよ！！
反論の一つでも言おうとしたとき体を淡い燐光が取り込んでいた。これが示すことは一つ、ゲームクリアしたということだ。
「じゃあな、また運命の交わる道で会おう」
「運命……？」
「そうだ、お前が生き続ければ俺は必ずお前に出会う」
それがこの世界で聞いたイッチーの最後の言葉となる。何故なら、この後すぐ転移させられてしまったからだ。
その不思議な予言めいた言葉を身を以（もっ）て知るのは、まだまだ先の話である。

ギルド（前書き）

取り敢えず、毎度のことながら亀更新で申し訳ない。
しかし、今回もテスト期間やらで忙しかったんですよ。
毎日数人来ているのを確認して申し訳ないと思いつつ、書けないという状況でした。

ギルド

イッチーと強制的に分かれた転移した俺は辿り着いた世界の宿でぼんやりと考え事をしていた。表通りに面した宿だというのに市場には活気がなく、開け放たれた窓からは湿気を含んだ空気が流れてくる。

考えていたのは、イッチーが言っていた新たに手に入れた能力と運命の交わる道という不思議な言葉だった。

コンコン、と扉が控えめにノックされ虚ろに視線を向ける。

「あのー、カズヤさんですか？」

緩慢な動作で起き上がり扉を上げる。

声を掛けてきたのは主は、気の弱そうな俺より――肉体年齢が――若干年上だと思われる青年だった。綺麗に手入れされた黒髪に宝石のような綺麗な淡い赤紫色（マゼンタ）の瞳。身長は少し俺より高め。

大概のプレイヤーは自衛のために剣や銃などの武器を所持するのが普通だというのに、身に纏（まと）うのは軽装の類で武器すら持っていない。勿論（もちろん）例外は居るには居るが、イッチーみたいな純粋な能力者ぐらいしかいない。

気になるのは見知った顔ではないことだ。何の用事があって俺に会いに来たのか見当がつかない。

「誰だ？」

「僕はギルド所属のレンナーといいます」

――ギルド。

その言葉一つで一瞬で頭が覚醒する。ギルドと言えば大手の攻略組で開始当初から攻略に取り組むなど実績も大きい。発足した理由は死にたくないという現実的な思いからだと聞いている。

それもそのはず。組織的に取り組むのは当然の話で、ギルド所属のプレイヤーは他と比較しても死亡率は低い。

「何の用だ？」

「今から一緒にギルドの本部に来て欲しいんです」
一気に不信感が募る。ギルドとの交流は今まで一度もなかったのに、何故接触を図ってきたのか。そもそも俺に何の用事があるというんだ？
ギルドは逮捕権を持っている訳でもないので、取って食われることはないはずだ。
「緑色のポニーテールの髪の女を見なかったか？」
「リンさんのことですか？　彼女と思しき人は見ませんでしたけど」
リンに一言断ってから行くべきだと判断したが、部屋にいないのは明白なので尋ねてみたが近くにはいないようだ。
しかし、思ったよりもギルドの情報網は広いらしい。もしくは優秀な情報屋を大量に抱え込んでいる可能性もある。
因みに、情報屋とはプレイヤーの情報や攻略条件などを売買する者のことだ。彼らは組織に雇われていることが多い。殺人罪も適応されない世界なのだから、プライバシーが保護されていなくて当然だが、勝手に調べられて気持ちいいはずがない。
それにしてもリンはどこへ行ったのだろうか。昼寝している間まで待機しろとは言わないし、好き勝手してくれて構わないのだがギルドに単身で行くのは怖いな。敵対している勢力ではないが友好関係にある訳でもないのだから。
レンナーに連れられて外に出るが生憎と空は曇天だった。それもあってか、この街は活気が少なく寂れた印象を受ける。
「そういや、ギルドってどこにあるんだ？」
「本部は近くにありますよ。少し街外れですが」
物件はプレイヤーの武器などと同じに扱われて世界を越えるときに持ち込めるのだろうか？　検証したことはないから知らないが、そもそもこのシステムからして不明なことが多い。持ち越せる物があることにはあるが持ち越せない物も確かにある。服とか持ち込めなかったら素っ裸になるがな。
数十分歩き続けてようやく見えてきたのは何階建てなのか分から

ぬ高さがある建物だった。しかし、一見して高いと細長く感じてしまいそうなものだが幅があり城――或いは要塞――のように見える。入り口には大きくギルドの象徴である青地に銀色の剣を二つ重ねた姿がある。

レンナーと共にギルド本部に入っていく。中は舞踏会を催すことが出来るくらい広く、調度品も温かみのある部屋だった。

「こっちです」

部屋を見回しているとレンナーが階段に足を掛けているところだった。いくつか登った先が目的の場所だったようで、そこでレンナーが止まり扉を控えめにノックした。

どうぞ、と声が掛かり扉を開けた先にいたのは、大人の一歩手前といった感じの少女とやや太めの青年だった。

少女の方は綺麗な栗色の髪を一つに束ね、瞳はルビーを思わせるような優しげな赤色をしている。青年の方は少女より確実に年上だろう。三十路に近いのではと思われる。灰色に近い白色の髪に明るいライトブルーの瞳が穏和な性格を映している。

「こちらがカズヤさんです」

「初めまして。私はギルドの賢者に所属している真紅と申します」

「私は愛梨と言います」

どうやら男の方が真紅で少女の方が愛梨らしい。しかし、プレイヤーネームとして真紅とはいかがなものか。スーツ服で、いかんせん赤い要素が全く見つからない。

「呼び出しに与かったカズヤだ。敬語は不要と見受けるが？」

「構いませんよ。呼んだのはこちらの方ですから」

見た目通り温厚な性格のようで、敬語でなくていいのは正直ありがたい。どうも敬語には自信がなく、自身の性格も相俟って苦手だ。

「早速ですが要件から入ります。あなたにスパイを頼みたい」

「スパイ？」

思わず顔を顰める。お陰で、ますます呼ばれた意味が分からなくなってきた。俺の能力、スキル共にスパイや隠密行動には向いては

いないからだ。普通それらの行動にはスキルの盗聴や透視を持っているものが適任だ。
「あなたには不可解な点が多い。プレイヤーの中で言えば、あなたの勢力は取るに足らない。だというのに、あなたはトップに限りなく近いイチヤマやタツキの勢力から一目置かれています」
一目置かれているかは兎も角、ある程度の関係は持っている。しかし、その話がスパイに関係しているのか？
「そして最大の疑問は鏡八との接触」
――何故、鏡八と俺が接触しているのを知っている！？
「スパイをして欲しいのは鏡八のことです」
「却下だ」
やはり、と思いつつ即答する。鏡八だけが元の世界に戻るための唯一の方法を握っているということは自明の理であり、是が非でも帰りたいのなら捕らえるしかないのは分かる。
しかし、だからといって俺は関係ない。それに俺は元の世界に帰りたいとも思っていない。
「それはあなたが鏡八と同じくゲームを管理する側だからですか？」
「は？」
予想外の問いに思わず間抜けな声を出してしまった。まさか俺がGM（ゲームマスター）と勘違いされるとは思わなかったからだ。しかし、考えてみれば仕方のないことかもしれない。
鏡八を庇（かば）い立てするということは真っ当なプレイヤーなら考えられない。ゲームを管理する側ならば辻褄（つじつま）が合うと考えられても無理ない。
「軍には、そのような噂が流れています」
「軍？」
「ギルドには賢者と軍の二つで成り立っているんです」
レンナーが即座に補足してくれる。そういえばギルドはゲームについて研究・考察をする部隊と攻略に邁進（まいしん）する部隊があると聞いたことがある。それが賢者と軍の二つなのだろう。

「賢者側の意見が聞きたい」
「賢者の見解としては分からない点が多すぎて何とも言えませんね。まず、鏡八の目的が分かりません。地球上にいた人類を全てゲームに移動させた、その理由が」
少なくとも賢者側の意見は保留か。しかし、ギルドの二分された勢力でも俺を潰すのは容易であろう。もしかすると前々回の闘技場で襲ってきたのはギルドの軍の勢力だったのかもしれない。
「すいません。私たちは会議がありますので少し席を外します」
そう言うと真紅とレンナーは出て行った。
しかし、ギルドの在り方こそ人の尤もらしい行動だと思う。まともな人間なら組織を作り、現状の対策を出来る限りする。俺みたいに少数で行動している方がおかしい。
実際ギルドは百人規模の戦闘を行えるというだけで、下部組織や協力関係を結ぶプレイヤーの数はもっと多い。集団で行動することこそ利口な手段だと分かる良い実例だ。
「あなたは行かないんですか？」
女性相手だと口調が優しくなることを自認しつつ尋ねる。賢者の会議なら彼女は出席するべきなのではないだろうか？
「いえ、私は出られませんから」
出られないというのはどういう意味なのか内心首を傾げる。薄い微笑みからは何も読み取ることが出来ない。何となく聞き返すには間を置きすぎて躊躇われた。それにコホッ、と咳き込む音が聞こえたからだ。
「風邪か？」
「いえ、持病なんです」
持病ねぇ……奇妙なことだが、プレイヤーは病気になるどころか風邪を引くことすらない。少なくとも、そう聞いていたのだが違ったのだろうか。しかし、それを理解していながら訊く俺もどうかしていると思うが。
もしかしたら会議に出られないのも持病が関係しているのかもし

れない。
「大事にな。俺は帰らせてもらう。返答は却下だと伝えてくれ」
ここにいても埒が明かない。俺が鏡八を売るという構図も面白いが、敢えて乗らずに自分の立場を悪くするのもまた一興。
伝えておきます、と言ったのを聞きながら部屋を後にした。

外は深々と雨が降っていた。
「風を使えば防げるか？」
上昇させる風で雨を当たらなくさせようとするが――
「何故、使えない……？」
風は起きず雨は容赦なく降り注ぐ。集中力如何によっては発動しないこともあるが、そんな感覚ではなかった。何故能力が使えなくなったのか分からないが偶には雨に濡れるのも構わないだろう。
新たに加わった能力の所為なのかもしれない。今度検証してみるか、と軽く思いつつゆっくりと道を歩く。見える範囲に人の姿はなく、誰もいない世界に取り残されたかのようだった。
宿に着くのは行く時より時間が掛かった気がした。陰鬱な雨空が錯覚させるのかもしれない。宿にはリンが先に戻ってきていたようだ。濡れぬよう軒下から呆然と空を見上げていたが、近付く俺に気付いた。
「部屋にはいなかったみたいだけど、どこ行ってたの？」
「ギルドに行ってきた」
「何それ？」
――ギルドって、かなり有名な集団なんだけどな……。
リンは知らないようで首を傾げていた。説明するのも億劫だし、早く風呂に入らないと風邪引きそう。あ、プレイヤーは病気にならなら

ないんだったか。
「そういや、リンはどこに行ってたんだ？」
「買い物よ」
雨の降りそうな日に御苦労なことだ。
「面倒くさいことになるかもしれん」
「また何かしたの？」
いいや、と首を振りつつ宿に入る。嵐の前の静けさを予感させるのは雨が降っているからなのだろうか……。

ギルド（後書き）

もしかしたら、今年はもう更新出来ませんかもしれません。
出来るといいな……。

嵐の予兆（前書き）

誰か、今年も更新出来ること祈ってて～。

嵐の予兆

空は相変わらずの曇天で、それを見ていると焦燥感と不安が押し寄せてくる。そもそもギルドに鏡八との関係が漏れた時点で危機意識は最大にまで引き上げられたのだ。

しかし、それも仕方ないことなのだ。鏡八と言えば恨みの渦中（かちゅう）にある人間だ。それと接点を持つということは、どうなるか言葉にしなくても分かる。軍の方は何かと物騒なようだし、早めに本部のあるこの街から離れたいものだ。

部屋を出て隣の部屋に向かう。そこはリンが借りている部屋になっていたはずだ。出来る限り早くこの街から逃げ出さねばならない旨（むね）を伝えるためだ。

「リン、いいか？」

声を掛けつつもノックすらせず扉を開ける。しかし、そこにリンの姿はなくベッドだけが綺麗に整えられていた。どこへ消えたのかと思案するが、外が薄暗いことから夜明け前だと思われ、出掛けるには早すぎるだろう。

軽く辺りを見回すが行き先を示すようなものはなく、仕方なく探すのを諦めて宿を出る。朝日が昇ればリンも現れるだろう、と自分に言い聞かせて薄暗く静けさが支配する道をを歩き続ける。目的地はなかったが、不思議と足は迷わず一直線に進んでいった。

適当に歩いていると何時しか風景は変わり、煉瓦敷きだった道は舗装されていない土を踏みしめただけのような獣道になっていく。

そして視界が開けた場所は街を見下ろすことの出来る小高い丘だった。そこには先客が一人いた。

少年のような面影を残す青年だった。身長は俺より高く、少し伸びた黒髪を無造作に一つに束ねていた。線の細い顔立ちで整った顔立ちだが、体は筋肉質とはいえない。学者のようなイメージを抱かせるが、もしかしたらギルドの賢者に属しているのかもしれない。

しかし、髪は手入れがされた形跡がなくシャツもよれている。第一印象もあるのだろうが、目の下に刻まれた深い隅が何日も徹夜した研究者に思えた。
「やあ、君は散歩かい？」
「そう……かもな」
どう返答するか一瞬迷ったが曖昧にした。
「君はこの世界で大切な人を失ったことはあるかい？」
視線はどこまでも遠い過去に馳せるように虚ろで悲しげだ。それに睡眠不足なのか生来の気質なのか判断出来なかったが言葉には抑揚がなかった。
答える必要性はなかったが、いきなり突っ込んだ話をする所は気に入った。
「……ないな。大切なものなどないからな」
「それは悲しいことだね」
こちらを振り返った瞳には深い悲しみと暗い希望、そして俺に対する憐憫があった。大切なものがないというのは俺の感情が摩耗しているからなのだろうか？
「一番強いものがゲームの支配者、延いては神になれる」
唐突な物言いだったが、それが何を指しているかすぐに理解出来た。このゲームについて語っているのだ。神――それは唯一ゲームを改変し得る力を持つ鏡八のことなのだろう。決してイッチーのような権能を指し示している訳ではない、と直感的に理解した。
「神になりたいのか？」
「いえ、なるのですよ。後少しで、ふふふ」
瞳に力強く宿る暗い希望はこれのことだったのか。納得すると同時に俺は酷く冷めた目で見つめていた。神などという曖昧なものに興味がないからだろう。それに支配するという思想は嫌いじゃないが、好きじゃない。支配するということは何かの上に立つということだが、縛られるのは好きではない。
「そうか、俺に迷惑が掛からん所でいくらでもやってくれ」

丁度いい暇潰しになったと思いながら来た道を戻り始める。
「記念に名前教えてくれよ」
「僕はスルトです」
遠くでは朝日が昇ろうとしていた。

宿に戻る道すがら今後の計画を練っていたが、ギルドの意向が分からないのに動くのは却(かえ)って危険かもしれない。しかし、意向を探るのも不可能な話なのでこの思考に意味がないことも事実だ。
俺は知らないが鏡八がプレイヤーに接触しているのは、ほんの一握りのはずだ。鏡八に繋(つな)がる手掛かりとして俺は格好の獲物だろう。
「しかし、誰が俺の情報をリークしたんだ？　いや、寧(むし)ろ出来たと言うべきなのか？」
考えても詮無いことだと分かってはいるが昨日からこの疑問が離れない。
だから気付くのが遅れた――火事が発生していることに。奇(く)しくも炎上していたのは、俺がここ数日間逗留(とうりゅう)していた宿だった――いや、果たしてこれは偶然なのか？　そして、リンは大丈夫なのか？
「リン、いるか！？」
視線を巡らせるが、どこにもリンの姿は見受けられなかった。俺が出かける前まで部屋に居なかったから大丈夫だとは思うが胸は焦燥感で焦がされるようだ。
逃げ遅れた者も少なくなかったようで人が群れをなして逃げ出してくる。その中に一人だけ違うものが混じっていた。酷薄(こくはく)な笑みを浮かべ悠然とした足取りで進む少年だ。
「おぉ、お前がカズヤか？　ククッ、丁度良かったぜ！」
「誰だ？」

長く赤い髪と赤い革ジャンが血のような印象を与える。そして笑みと相俟(あいま)って殺人鬼のようだ。やる気満々、というか戦意たくさん、寧(むし)ろ殺気がひしひしと伝わってくる。
「俺のことなんてどうでもいいだろ！！　さあ、殺し合いをしようじゃねえか！！」
見た所獲物はないようだが徒手空拳で戦う気なのか？　しかし、構えすら取らないのは何故だ！？
不幸中の幸いは剣を持ってきていたことだろうが、相手の動きを見て動くのじゃ遅すぎる。見極めが大事とも理性は叫ぶが先手必勝こそ俺の流儀だ。
抜剣して駆け出すが少年は動かない。あと一歩で攻撃の間合い、腕に力を入れて突きを入れようとする。
「――！！」
それは勘だったのか、それとも偶然だったのか突きを中断しようとした。
「死ね、炎龍！！」
少年が振り上げた腕に呼応するように地面から何の前触れもなく炎の龍が発生した。そして刀身を焼き尽くさん、と通り抜けていく。中断していなければ良くて半分、悪くて体を全部溶かされていただろう。
炎で構成された龍――形状は蛇にも似ている――は停滞するように宙を舞っている。太さは二メートルくらいだろうか。
「おいおい、何で作ってんだ？　溶けきらねえじゃねえか」
驚きで呟かれた言葉は何を指しているのか分かった。何故なら、それは俺の手の中にあるものだったからだ。剣はその半分以上を溶けきらずに原型を留めたままだった。イッチーが言った聖剣という言葉も、あながち嘘ではないのこもしれない。
しかし、溶けたのも事実で人を殺すには十分だが使うのは本意ではない。それにどの道、熱を帯びた剣を握ってはいられない。
「まあ、よかったか。剣は嫌いだしな」

少年に向けて剣を投げつけるが簡単に避けられる。尤(もっと)も当たることなど元より期待はしていない。捨てた武器の代わりになりそうなものを探すが目ぼしいものは全て燃えてしまっている。どうやら最後に徒手空拳になったのはこっちの方らしい。
「お前は結局何がしたいんだ？」
「はっ、決まってるだろ。てめえを潰せば鏡八が出てくる。それを潰せば、この世界を支配できる！！」
「流行ってんのか、それ？」
スルトとか言ってた奴も支配したいようなことを言ってたな。
支配欲、私怨、怒り……様々な感情が多かれ少なかれ誰にでもあるのだな。こいつの場合、若干思考が短絡的で愚直だと思うが少なくとも鏡八を殺したとなれば名声は得られるはずだ。
「まったく……ギルドの奴かと思ったじゃねえかよ」
しかし、問題はどうやって倒すかだ。銃火器があれば遠距離からの攻撃が可能なのだが生憎と剣も捨てたばかりだ。
「考えても埒(らち)が明かねえか」
直線的に疾駆する。下手なフェイントを混ぜていては却(かえ)って敵の攻撃に集中出来ないからだ。龍は俺を迎え撃つように真っ直ぐ進んでくるが考えていたよりも少し速い。大勢を低くして、前に進む勢いを殺さずに斜めに走り抜ける。
左拳を固めて殴りつけようとする。龍は長い性質上、俺の攻撃には対応出来ないはずだ。
「バーカ、龍は一匹じゃねえ！！」
もう一本の腕を振り上げ、そして龍が発生して――
「もう終わりか？　腕一本無くなっただけだぜ？」

意識が熱いということだけを伝えてくる。肩を抑えて呻(うめ)くが、あるべき腕はもう無い。溶けて無くなってしまったからだ。
――刀が欲しい……！！
切実に思った。そうすれば首を刎(は)ね飛ばしてやれる。それは最早渇望とさえ言えた。
「何だ、これは？」
訝(いぶか)しげな声で目を開ける。少年の視線の先にあるのは俺が願った刀だった。
だが、俺はもう一つ気付いたことがあった。右手が光っていた――正確に言えば掌にある黒いゴシック調の文様だが。
イッチーの言っていた能力名を思いがけず呟いた。
「トランス……」
答えるかのように光は弱々しくだが明るさを一瞬強めた。物質を作り出す能力かと考えたが根本的に何かが違うと感じた。
――物質を作り出す……？
引っ掛かるのは小さなものだった。それは似て非なるものだ、と何かが告げる。
しかし、考えている暇はどこにもなかった。敵は目の前に居て今にも俺を殺そうとしているのだ。
「くそ……が！！　腕一本持って行っただけで勝ったつもりかよ。冗談じゃねえ」
少しでも油断すると途端に萎えそうになる体を叱咤(しった)して立ち上がる。片腕は無くなってしまったが、刀振り回すのに片腕あれば事足りる。
「炎龍！！」
二つの龍が追いすがってくる。回避に専念するが攻撃をする暇がない。敵を中心に据(す)えて円を描くように背後に回る。
そして、そこには一つだけ好機がある。勢いよく足を蹴り上げる。そこにあるのは俺が捨てた剣、狙いは首だ。折角の反撃の機会。これを外したら俺に勝ち目はない――ように見えただろう。敵も首を

振るだけで避けて見せた。
そして俺は駆け出す。この龍の弱点は目視してないとコントロールが甘くなるということだ。思った通り龍がこちらに向かって来るまでに一撃入れることが出来る。
「しまっ――！？」
「これで！！」
刀を逆袈裟に振り出す。表情から見ても三匹目が出てくる可能性はないだろう。
――当たる！！
そう確信した。そして刀は狙った通り胴を断ち切――らなかった！！
「なっ！？」
驚いたことに刀はガラスで出来ていたかのように砕けてしまったのだ。動揺から無理矢理立ち直り、大勢を低くして俺を狙ってきていた龍を避けようとした。しかし、龍は直前で霧散して新たに下から発生して俺を焼こうとした。しゃがんだ膝のバネで後方へ飛ぶ。
何とか攻撃を凌いだが武器を調達しなければ話にならない。もう一度刀を想像して刀を創造する。そして折れた刀と新たな刀を見て違いが明確に分かった――いや、新たに創造された刀も根本的には同じなのだ。想像しきれず中身を作り切れていないだけ。
「ふっ、ははは！！　馬鹿みたいなものだ。分かれば簡単なことなのにな」
突然笑い出した俺を見て気でも触れたのかと怪しむ視線を感じた。
「何を笑ってやがる？」
「面白い、と思ったからだ。こいよ、次で終わりだ」
指をくいっ、と曲げて挑発する。両者の間に流れる空気は次が勝負の趨勢を動かすことを物語っている。
「炎龍！！」
「トランス！！」
叫んだものは違ったが行動は同じだった。トランスで俺は炎龍を

作り出したのだ。その数五体。
　トランスは物質や現象を引き起こすことが可能なのだ。しかし、それは俺が見たことのあるものでなければ性質上作り出せない。そして正確に想像しなければ形だけの紛い物しか作ることは出来ないのだ。
　そういう意味では刀なんて隙間ない原子の集まりを作るより、炎だけで構成された炎龍の方が適していた。腕を焼かれたお陰か想像しやすい。
「何で……何故、お前が炎龍を使える！？」
　答える必要性も意味もなく、無言で炎龍を操る。二体の龍が防御に専念しようとしたが五体もの数の攻撃を防げるはずもなく、最後は呆気ないものだった。
「来るなーー！！」
　少年は絶叫して逃げ出すが五体の龍は追いすがり食らいついた。

　カズヤたちの戦闘を遠目に見つめる者がいた。
「やれやれ、やはり彼では役者不足ということですか」
　支配欲に憑りつかれた彼を促した本人である彼は短く嘆息をする。しかし、その瞳は先程の悲しさや憐憫の情などが介在する余地がないほどに冷徹だった。モルモットを観察する科学者の目と言えよう。
　勝負の決着が着くと同時に興味が失せたようで、体の構成が崩れるように粒子になって消えていく。
「これでは見に来る価値もなかったですね。あの程度の戦力では計画に支障は出ません」
　それまで冷徹だった目に喜悦が映った。それに笑いを堪えるのが難しくなったようで笑い声が漏れる。

「私は必ず手に入れる。このゲームを……！！」
ぞっとする程の低い声で紡がれた言葉は誰の耳に入ることもなく消えた。

軽い疲労と血が抜けたのが原因で動くのが億劫だが、応急処置もなしに眠りに身を委ねてしまうのは危険すぎる。どうにか起き上がり傷口を確認する。傷口は炭化していたお陰で予想していたより血は流れていなかった。
目を閉じて深く集中する。肩から延びる腕を想像し、血管、筋肉、骨、その他を全て寸分のミスなく頭の中で固定する。逆の腕は健在な分、数秒でイメージを固めることが出来た。これなら訓練していけば一瞬の内にイメージを作り上げるのも不可能ではないかもしれない。
「トランス」
目を開けると左腕は以前と同じようにそこにあった。肩を動かし、肘、手首、指、と順繰りに確かめて異常がないか確認していく。初体験だった分、上手くいったかどうか不安だったが問題なかった。
「さて、リンを探さんとな」
しかし、それ程探すことなく見つけることが出来た。火事の焼死体を一時的に安置していた場所にいたのだ。
声を掛けようとして躊躇ったのはリンが涙を流していたからだ。綺麗な涙だと思って、そんなことを感じる資格が自分には無いのだと思い直す。この死体は俺が原因で引き起こされた災禍の被害者なのだ。
「リン、知り合いだったのか？」
違って欲しいと願ったのは何故か分からない。後に引きずられて

困ると冷酷に判断したのか、或いは――。
「いいえ……違うわ。私が助けられなかったのよ」
焼死体は幼い少女だった。逃げ遅れたのを助けようとしたのか知らないが、リンが悲しむ必要はないはずだ。
「泣くなとは言わんが、リンのせいではなかろう。首謀者も死んだし、少しは報われただろう」
「死んだの？」
ああ、と呟いて罪悪感を感じる。
首謀者が死んだ？　少しは報われただろう？　俺という存在が引き起こした事故であるというのに、どの口でそんなことを言うのか。
「もう行くぞ。旅に戻る」
「相変わらず、他人のことはどうでもいいのね」
非難されているのかと思った。しかし、リンの表情は責める意思が見受けられなかった。
ただ……もし、その言葉が本当なのだとしたら、この感情は一体誰に対するものなのだろう？

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9011r/

K-GAME

2011年12月19日00時49分発行